

# WIFE

## 特集 ● 10年前のわたし

対談 ● この10年の女たち / 駒尺喜美・小西 綾

グラビア ● 森は生きている / 監修・富山 和子

レポート ● 留学の風景 / 関野 光代







株式会社 ミネルヴァ書房

〒607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1  
☎(075)581-5191 振替京都 2-8076

# あたりまえの 女たちの出発

兼業主婦時代

シリーズ  
《女・いま生きる》

⑥

ただ一たびの、かけがえない人生——それをどう生きるのか。これまでと全く家事と育児だけに終わりがちの女性も、いまようやく自分自身の世界をもち、精神的、経済的に自立し、心豊かな生き方をしはじめた。著者自身、ごくふつうの主婦として子育てをしながら働いてきた女性の一人である。この本は、仕事と家庭のあいだを揺れながら、イキイキした子育て後の人生を送りたいと考えるあなたにおくる体験的兼業主婦論。

予価一三〇〇円 円 250

## 男女同権論

菅 隆明・女性の視点で考える

男女同権をめざす婦人解放の思想を紹介し、さらに労働問題などをめぐる内外の女性解放運動、婦人参政権運動から、あるべき男女平等社会実現の途を平易に解説。

定価二二〇〇円 円 300

東京新聞婦人家庭部編

## 男ってなんなの

定価780円

ミズのための心理学

現代の清少納言たちが不思議な

男の像・人生についてホンネを語る

男ってなんなの

男というものの正体

制作家 田中澄江

夫と妻のあいだとは

随筆家 木村治美

女より一枚上の知恵

評論家 三枝佐枝子

見ようとしないうちの姿

「わいふ」編集長 田中喜美子

永遠に抜きさしならぬ関係

絵本・童話作家 佐野洋子

男の現実、男の夢

井邊士 渥美雅子

粗大ゴミにならぬために

評論家 十返千鶴子

尊敬されたい、甘えたい

シャッソウ歌手 石井好子

総女性化的なこの時代に

作家 宇野千代

昔の女はよかつたわねえ

作家 佐藤愛子

ミズのための人生セミナー

人生を一生懸命に生きて

女優 沢村貞子

新しい気分で自分を見直す

作家 桐島洋子

いつまでも若々しい精神で

作家 永畑道子

数字にみる

女性のライフ・サイクル

柏書房

〒113 東京都文京区本駒込1-13-14

☎03-947-8251



いたい放題 したい放題

書きたい放題 よみたい放題の

投稿誌が わいふです

人間 ほんとにやりたいことは やれるもの

ウジウジ・イライラふり捨てて

思いつきりやれば 気かはれる

いろんな人のいろんな時の

いろんな心を材料にして

二か月に一回 わいふが出来あがるのです

仕上げに適量の“ユーモア”と

“思いやり”のスパイスを！

ピリツとくるか まろやかになるか

それはあなたの“うで”次第！



# WIFE 187

## わいふ目次

表紙イラスト 松本圭以子  
レイアウト 森 三紀子

森は生きている 4

文・監修 富山和子

職場は多面体 9 ★

TH・三吉野優子

マジの発言 13 ★

久米昭江・飯田順子・田中恵子

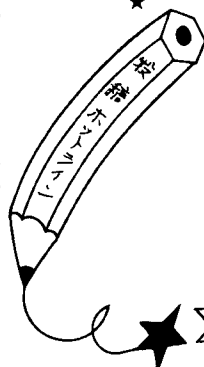
特集・十年前のわたし

卒業アルバムを見るたびに 20

野村尚子

歳月の重み 長縄幸子 23

四十歳の出産 友沢昌子 28



キリスト教に出合つて 30

酒井千恵子

処女を棄てた二十九歳 34

関根洋子

オー・マイ・ドーター 38

鈴木桂子

可愛げのない高校生だった 43

TH

栄養価の高い冷凍野菜 47

柳本綸子

対談

この十年の女たち 48

駒尺喜美・小西 綾

ファミリー・イン・ブルー NM 58 ★



うちの悪ガキ TY 60★

WIFE・ガイドブック

子連れ遊びのガイド 江の島水族館 62

若木菊枝

生きてます活字人間 66★

原田静枝・宮前 和・大島真理  
和田好子・丸山友岐子

オットどっこい FM 72★

私立高校あらがると

独立王国の三年間 74

聖パウロ学園高等学校

文 早川裕子 写真 長野早紀子

エッセイスト・クラブ 庄田博子 82★

対話のページ 86★

武田睦・大川原みち子・  
高木八重子

★印は  
投稿ホットライン  
の、ページです!

わいふミニニュース 89

WIFE・連載2

とも  
智よ、自然に学べ 90  
こくぶんひろこ

WIFE・連載2

きのえね

甲子ハイツ一〇二号室 108  
柳原和子

観たり聴いたり 山本陽子 122★

わいわいがやがや 123★

北川洋子・古池けい子・S.E.  
真崎恵子・市川弘子

WIFE・レポート

留学の風景 関野光代 128

情報コーナー 104 サークルだより 106

投稿規定 142 テーマ原稿募集 73

編集だより 144





# 森は生きている

(1) 土こそが人間を守る

富山和子

(木曾のひのき天然生林)





岐阜県 御母衣湖（みほろこ）



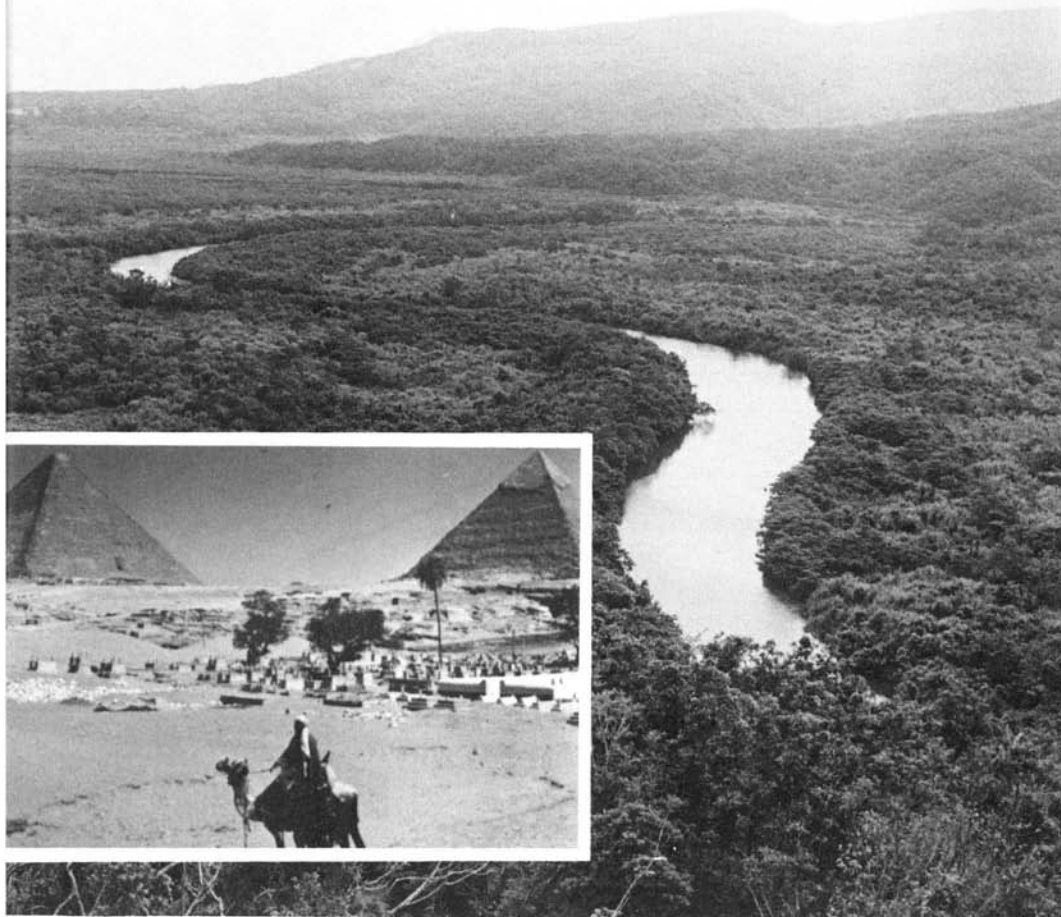
(1) 土こそが人間を守る

いま、わたしたちの社会は、土の大切さを忘れかけている。

都市の足もとでは、コンクリートだらけだ。虫にも、埃にも、泥んこ道にも悩まされることがない。わたしたちの暮らしは便利になり、ゆたかになった。

その代りに、少し雨が続けても、町は水につかるようになった。川も危険になった。少し日照りが続いても、水不足で大騒ぎするようになった。川も汚れるようになった。





## エジプトの砂漠

水をつくり出すのも土である。自然のごみを始末してくれるのも土である。ごみを始末できるのは、水でも、大気でもなく、土しかない。その土は、放っておけば、雨にとけ、風にとばされ、だんだん失われていく。人間は、土を守らねばならない。

## 緑の中をうねる日本の川

その原因は、一つである。降った雨を、使った水を、土に返さなくなったからだ。

昔、日本人が、土からもらったものをみな、土に返していたときには、川は、汚れるどころか、今よりずっときれいだった。

微生物や虫でいっぱいのは、ごみをかみくだき、最後には、炭酸ガスと水に分解してくれる。その水は、ゆっくり、ゆっくりと、また川へ、はきだされるのだった。

そんな土が、肥えた土だった。

肥えた土が、緑を育てた。





人工の杉林

自然が大切だ、大切だとは誰もがいう。ではいったい自然とは、なぜそれほど大切なのか、私たちは深く考えたことがあったろうか。

土を失った文明は亡びる。

エジプトもメソポタミアも、インダス文明も、ギリシアやクレタ島などの島々の文明も、土を失ってほろんだ。いま、岩だらけのギリシアにも、数千年の昔には、うっそうと木が茂り、こんこんと泉が湧きでていたのである。

日本列島が、今日まで石の山にならないですんだのは、先祖たちが営々と土を育ててきたからだだった。土を育てるということは、森林を育てることであり、森林を育てる人を守ることでもあった。

そのことがいま、忘れられようとしている。

（写真提供・林野庁／エジプト大使館）

（このページは講談社刊・富山和子著『森は生きている』に基づいて構成したものです）



## 労働教育センター

東京都千代田区神田駿河台3-2-11  
TEL03(253)3362/振・東1-125488

3月新刊

### 変わる女性の世界

学習・婦人差別撤廃条約  
笠原郁子・中島通子編 四六判 定価1500円  
職場・地域での学習テキストに最適!

※弊社の本のお求めは、お近くの書店又は直接弊社までご連絡ください

●自立する女の生き方について考える  
箱の中の人形たちよ 「主婦第二」「職業論」その後  
石垣綾子著 四六判 定価1200円

働く女性は美しい。仕事に誇りをもち、いきいきと立ち働く女性はより美しい。だが、どうすれば素敵な女性になれるだろうか? 女の人生と仕事、仕事と家庭、夫と妻、親と子……など、充実した人生を送る上で、女が避けて通れぬ現代的な問題を、石垣綾子が正面から考え、問いかける。

### 家庭と女性 つくられたマイホームからの脱出

藤井治枝編

第一章 自立への道を求めて 第二章 明日への模索 第三章 家庭とは・仕事とは 第四章 これからの家庭と女性の課題 第五章 現場からの提言他

矢島せい子のくらしの歳時記  
矢島せい子著 B6判 定価980円

日本人のくらしのなかに育ち、受けつがれてきた歳時習俗、年中行事などに光をあてて、生きていく知恵を若い世代に語りつたえる。

## ●各国にみる男女平等の波

### 世界の女たちはいま

柴山恵美子 編著

四六判上製272頁 定価1500円

アメリカ・イギリス・スウェーデン・イタリア・フランス・東ドイツの六カ国および日本をとりあげ、それらの国に長年かわり研究してきた経済学者・女性労働問題研究者が、女性労働者の諸権利の国際比較をするとともに、諸外国の保護と平等に関する法律とその適用状況を「鏡」にして、今後のわが国のあるべき姿を示唆する。

●転機を迎えた女たちの選択

### 働いて生きる

大脇雅子 著

四六判282頁 1200円

●女の生きがい 働きがい論

### あしたの女たちへ

樋口恵子 編著

四六判240頁 980円

●女の生と性60事例

### 女たちの民法問答

鍛冶千鶴子 編著

四六判252頁 980円

●愛と性と自由と

### 各国『女性』事情

樋口恵子 編著

四六判236頁 1100円

学陽書房

東京都新宿区市谷薬王寺町26 営業(電)261-1111/振替東京7-84240



投稿ホットライン——能ある鷹は爪をかくす

# 職場は多面体

愛すべき職場——死角の部分に何があるか？

パートタイマーで働いて

T・H

一月二十八日夕方、まだ雪の残っている道を自転車で走った。十カ月間通った勤め先からの帰り道である。

「もっと続けられ続けたら。人間を物のように扱うお偉方の言い草も我慢すれば我慢できた。みんな良い人達だった。もう一緒に働くことはできない」  
等々、心の中のつぶやきはみな私を責めていた。

パートタイマーで近くのスーパーマーケットに勤め始めたのは、昨年の三月末である。事務員として入ったはずが、仲間の欠勤や退職の穴うめとして品出し値付等色々な手伝いをする事となった。牛乳箱やうどんなど箱詰の商品も運んだ。

みんな、言葉は悪くとも人なつこく、不慣れな私に親切だった。今まで事務



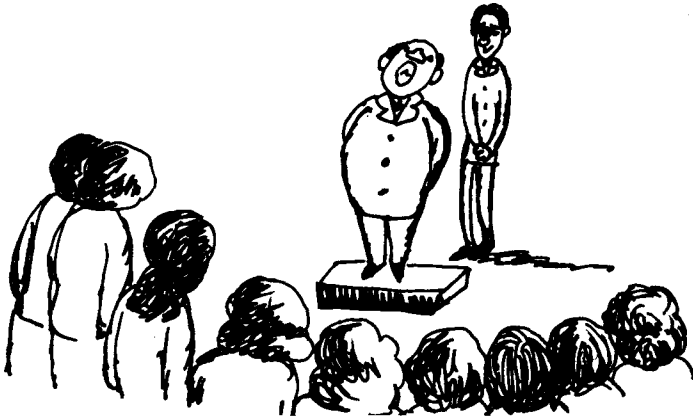


系の職場にいた私には全く新しい人達に見えた。詭弁を使わない、物事の是非は売り上げとお客へのサービスを基本としている、とてもすっきりとした世界であった。時給四八〇円はこれまでの自分の収入から考えれば恐ろしく安かったが、全く苦にならなかった。

朝八時過ぎから夕方六時半頃迄、仕事は絶えず私を追いかける。時々仲間をどなったり、大声で冗談を言いつたりしながら、片はしから仕事を片付けていった。

子供や夫がいて、パートタイマーで働く人達。野菜を洗ったり、肉を切ったり、魚をパックする人達。私はや々と労働者になった。もう夫に、人の上前をはねている事務労働者と言われないうで済む。時々はみんな酒を飲んだ。送別会、歓迎会、新年会、色々な名目で。

以前の職場でのイザコザも迷いも全て飛んだ。私は私が好きになった。食



事がおいしく、もう夜眠れないこともない。アルバイトの男の子とも助けあって働いた。店長へもズケズケ忠告した。

しかし、この牧歌的な職場も改装という出来事で、すっかり面変わりしてしまった。本社の部長と課長が乗り込んで来た。彼らは言う。

「パートタイマーは、いつ辞めても良い。代りはいくらでも来るから」と。一日に、五回も六回もマイクで召集する。髪の中から靴の先まで注意を受ける。そして、一月二十四日、朝礼で言った「遅刻、早退三回で欠勤一回の扱いにする」と。パートタイマーは遅刻早退の分の時給はすでに差し引かれている。何の補償も受けていない。その上、三回で一日分(数時間)の給与を差し引かれるとは。

労働基準法に違反しているのではないかと夫に聞く。夫は、判例では今のところ、労働者側に不利であると教え



てくれた。私達朝礼に出た者は署名させられた。これは、合意の上という形で合法化するためであろうと思われた。

いつでも辞めて良いパートタイマー。店はきれいになって、売上はのびた。品出し、運搬、仕入、仕事の段取りもするパートタイマー。いつ辞めても良い私達。

次から次へと私達に注文をつけるお偉方。

これからもまた私の仲間に、次々と注文をつけてゆくのだろうか。私は考えた。もう同じことを見る勇氣はなかった。

みんなをまとめるにも、私には力が足りない。一人で抵抗するにも私には勇氣が足りない。

私は辞めた。たった一人で。

もう売上の数字とも商品ともそしてみんなとも、お別れだ。

店長には理由を言った（非常に消極的な意見表明）。みんなにも考えを述

べた（非常に不徹底なオルグ）。

さよなら、さよなら。とても寂しい。雪の道は冷たく、いつもより遠かった。

月末の給与明細で、彼らは私達の給与から遅刻、早退分を欠勤扱いとはせ

## ある会話

男 A先生から、あなたのことは聞いておりましたけどね、わたしや、女の人はいらんと言うたんですよ。（はつきり言ってくれるね。やる気かね）  
女 （艶に微笑しつつ）わあ、どうしてですか。

男 女はどうもいかん。私の知ってる女の人というのは、だいたいどの人もつまらん。学校でも女の先生というのはダメ。授業にならんですもん。退屈ですよ。声は小さいし、話す内容も大したことないし。ちょっと女の人は：

ずに終わったことが判った。

しばらくして行った職場では、皆変らずに働いていた。みんなは我慢強い、根っからの庶民、労働者達だ。

私は今、自分を責めている。

福岡県三池郡 三吉野優子

：（この人ホモかいな）  
女 いやあ、先生、そら古いですよ。昔の女性はそうだったかもしれないけど、今はいろいろ変わってきましたからね。認識不足じゃないかなあ。ちょっと、その認識は甘いというか、少し変えていただかんと……（博物館に入れちゃうぞ）  
男 それに、うちの仕事は、夕方から夜にかけての仕事だからですね、子どもさんはおいくつ？（ソレソレソレ、きたきたきた）



女 小学一年の男の子と、五歳の女の子です。(女、やや不安になる)

男 ううん、大事な時期じゃないですか。(あたしにとっても大事な時期なんじ、クソ)

女 いいえ、家のことなら心配していただく必要はありません。一週間のうち二日ぐらいならどうにでもなります。男 いや、たとえ二日だとしてもあ、あた、母親たるものが、その時間帯に家を開けるとするのは、コリャ大変なことですよ。(そんなことあ、百も承知、二百も合点だ)

女 昨年、教員採用試験も受けました。でも通りません。私の成績も悪かったのでしょうか、ご存知のとおり、世の中が、不景気なものですから、若い俊秀達が公務員の方に殺到するんです。採用する側から言えば、いい若いモンがこれだけ先生になりたがっているんだから、三十を過ぎた子連れの主婦なんか、家にすっこんでろというところ

なんでしょう。去年、高校の部の国語だけでも、受験者は二百三十人ぐらいいました。半数は女性でしたけど、実際の採用となると、女性ほとんど対象に入っていないんです。

男 うん、うん、そうでしょう。雇う側から言うなら、仮に、あなたが満点に近い点数を取ったとしても、雇わんバイ。やっぱ、男ば採るよ。エエ、しかし、採用試験を受けるような、そんなファイトがあるの。ほんとお！女 ファイトだけは、あるんですよ、人の何倍も。(だまされたと思って雇ってみんさい)

男 五十九歳。某有名塾オーナー。酔うと、軍歌を好んで歌う、いうところの九州男子。

女 三十四歳。会社員の夫と二人の子をもつ主婦。貧血のくせに血の気の多い九州女。

ちなみに、この会話の結末は

「中学二、三年を受け持ってもらいたから週四日来てくれ」

「いや週四日はちょっとムリ、初めは週二日の線ですべり出してみたい。それがダメなら、もうご縁がなかったものと……」

「では、週二日の線で行ってみましょう」

とすったもんだの交渉の挙句、結局週二日(木よう日五時半～七時半)、土よう日三時～五時)の勤務という事で一件落着。現在に至っております。



(元・松本をきえ)



# マジの発言

黄色い声、赤い声——五色の声でももの申そう！

## 私観風体抄

## カラーTVと白黒TV

東京都稲城市

久米昭江

先日、親しい友人の家へ初めて上がり込んだ。——え！白黒テレビなの？「ウン、フッフ買えないのよ」

白黒TVなんて、今どき我が家ぐらいただと思っていたら、案外近い所に同胞がいた。この前NHKの調査員が来なかった？ カラー料金払えって。あ

んまり高飛車に言うものだから言っちゃったの。どうぞ上がってご覧下さい、家は白黒ですって。

「まだ家には来てないわヨ。きつとびつくりして調査を打ち切ったんでしょ」それにしても、未だ初期の技術の白黒にこだわっていると、いろいろな面白

いことに出合う。友人のフッフという含み笑いも、その意味が込められているのだ。

ドラエもん全盛時代、子供の絵も絵描き歌よろしくドラエもんばかり。皆申し合わせたようにドラエもんは水色。気を付けてみると、ぬいぐるみやおもちゃも水色。どうしてだろうと思っていいたら、何とドラエもんは水色だったのだ。それを知らない娘は、ピンクや黄色、オレンジでドラエもんを描く。それを見て「ア、ドラエもんは水色なんだよ」と娘の友達が許さない。

新製品のCMを見て、今度あれ食べたいと息子。スーパーへ行って売り場の陳列棚にやっと思つて手に取り、ああこういう色だったの。

たまに、よそでカラーTVを見ると面白くてたまらない。このバックは、こんなきれいな山だったのかとか、この場面はスタジオ臭くてがっかりだとか。白黒だと、映る中心の人や物し



か目に入らないのだ。

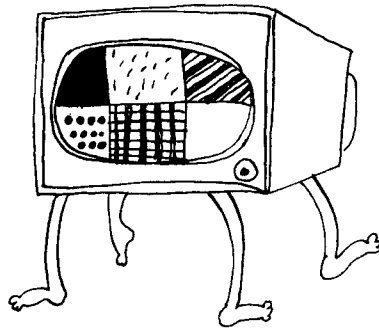
白黒TVで一番困るのは、受像器はカラーと決めつけている時。

「赤君黄色君がまざって、おやおやオレンジになりました」

なんて、想像するのみ。そう言えば、二人の子供は、色を覚えるのが遅かったかな。赤やオレンジ、ブルー等々、白黒では明度の差と、その後関係で色を探さなければならぬ。大変高度なテクニクを要する。

娘や息子の友達が家に上がり、一緒にTVを見る時がある。きっと「変なTVだね、おばさん」と来るだろうと構えているが、今まで一度も聞かれた事はない。「サト君の家のTV、色がなくて変でしょ」ある日、息子の友達に聞いてみると、「ウン」と短い答えしか返って来ない。家庭で、よその家の物とやかく言うのではありませんよ、と馴られているからそれ以上言わないのではない。色にこだわっていないか

ら、執着していないからなのだろう。色が付いているかいないかなんてどうでもいい、画像が見えさえすればいい。色は二の次三の次で、あまり関係ないのだ。



ところが、大人は違う。白黒かカラーかなんて外見だけですぐ見分けるし、それが分かると、なるべくTVの方は見まい話すまいと気遣いをしてくれる。あれは一年ほど前の旧盆のこと。子

供と一緒に田舎へ帰り、主人ひとりで東京暮らし。寿司屋のメニューはどこだ、客用歯ブラシはどこだと主人から電話がかかった。エッ！お客様、どんな？ お前は一度も会ったことないよ。女主人の留守の快適さからか、客人は二泊もして、主人の仕事のスケジュールを大いに狂わし、そして、

「白黒TVにタンスのセットもない。

まるで家庭じゃないですね」

と捨てぜりふまで残し、大型バイクにまたがって消えた、と帰るなり主人からまた電話。この！今度来てみる、玄関払いにしてくれる。

画像を純粹に見ている子供と、色にこだわる大人と、白黒TVのおかげで、ハプニングは絶えない。二台めは、テレビデオにしようかな、それとも白黒のままでもいいかなと、かなりお天気屋さんになったTVを見ながら、悩んでいる。



# 百分の一の言い分

東京都 飯田順子（41歳）

昨年より、パートの仕事を辞めて以来、家の中で高く、広くアンテナをはりめぐらして刺激を得んとしている。お金のかからない、近くの各種婦人教室に首をつっこみ、自分の行く末を模索しているのだが、二月、或る婦人学級に足を運んだ。

その日「私達の政治」のテーマで、某大新聞社の論説委員の方（K氏）の話を聞く事ができた。日々のニュースを報道する現場の生の声だから迫力がある。聞きにきている五、六十人の女性達は身をのり出して聞いている。その中で感銘を受けた話。

東北新幹線が、一昨年大宮―盛岡間で開通されたが、リレー車の通る上野―大宮の間にちょうど北区が位置し、今、京浜東北線の駅付近は、線路延長のため、工事が行われている。賛否両

論が闘わされているが、一昨年、開通予定日の六月二十三日の数日前に、その某新聞社のK氏の手許に一通の手紙が届いた。差出人は北区住人。名前から察すると、沖縄出身者のようだ。（K氏は沖縄で二年程仕事をしたことがある）「……来る六月二十三日は東北新幹線開通祝賀会が行われると聞いています。八月十五日、八月九日、八月六日には国でお祭りをしますか？」と書かれていた。一瞬、何の事かわからなかった。だがその後にも文が続いていたので、すぐに合点がいったそうです。

六月二十三日は、沖縄では県の条例で休日になっており、戦争で沖縄が全滅した日にあたるため、「慰霊の日」になっている。その六月二十三日と祝賀会の六月二十三日がかち合った。投書した人にとって、二十三日はまさに

「慰霊の日」と切り離す事のできない日だったので。私は東京に生まれ、育った者ですが、恥ずかしながら、その時、初めて六月二十三日の沖縄に思いを馳せた。その時、日本国中で何人の人が六月二十三日の二点を重ね合わせていたか。

東京は日本の人口の約十分の一、沖縄は東京の人口の約十分の一にあたる。単純に計算して、全国の百人に一人が一昨年の六月二十三日をまったく違った目でみていた。本土の意識のはがゆさ、無念さをかみしめていたに違いない。K氏はそこで愕然としたと言う。

投書のその後の文は「……どうしてその日に決ったのでしょうか」と尋ねていたようだが、たぶん祝賀会の日日は事務的に決ったのでしょう。

政治の気くばりが必要と言えば簡単ですが、民主主義の多数派、少数派の論理の中で、見落す事の出来ない、ショックを受ける話でした。



## ある女の不幸感

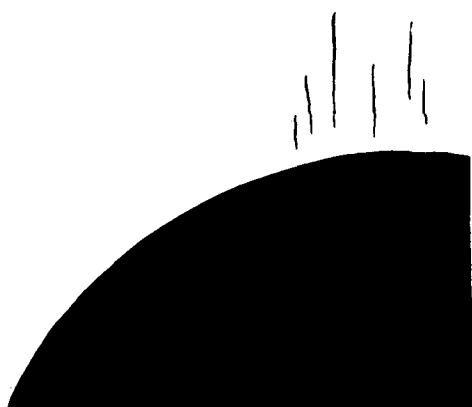
神奈川県川崎市

田中恵子

五十九年度の国家予算がいよいよ決まります。このとしになる迄国の予算などに殆んど興味を持たなかったのに、何を思ったかが然興味シンシンで、新聞の切り抜きやら何やかで、このところ私は忙しかったのです。この私め、十五年間の共働きで、雨の日は左手に傘、右手にハンドル、荷台には子供を自転車に乗つけて、サーカスの網渡りのような生活をしながら、それでもせつと税金を納めてきたけなげな女なのです。

このけなげな女が去年納めた税金は所得税で三十五万円、県市民税として五十万円の大台にバッチリ乗ってしまったのです。私達サラリーマンの税金は運悪く毎月会社から自動天引きされるので、給与明細の額面と手取りの

差を見て、「チェッ」と舌打ちして一時暗い気持になるが、あとは案外にアッサリしてしまいがちです。身近なことにはネチネチ陰険、決して単純に忘れはしないネクラ型の私にしてから、源泉所得税という名で出てゆくこの大金にはトント忘却の彼方だったのです。もしかが夫が五十万円のお金を使途不明とばかりわけのわからない使い方をしていたら、むこう三年間、一切口をきかない自信が私にはあるのです。この私が、十五年間も税金という名のお金に無関心だったなんて子育てで忙しかったといえ、地団太踏む思いです。このオン念をこめて、五十九年度国家予算をながめたら素人ながら「中曽根さん、あんた何考えてんの!!」という気持で、この手の政府を持ってしまう





った私の不幸をしみじみ感じてしまったのです。今年末には百兆円以上の赤字を持つわが国の経済はわが家の家計と同じくウサンクサイですが、一般会計予算政府案の中で異常な突出と異常な落ち込みを示した予算について私の不快感の一端を皆様に伝えたいのです。

緊縮型と呼ばれている予算の中でエイトとばかり二〇%台の伸びを示している部門があるのです。何だと思われるですか？ 貴方はピンとききますね。防衛予算関係だなと。あったりーです。ロン・ヤスと愛称で呼びあう仲がわかりました。世界一お金持の国であるロンにこれまた有数のお金持の国の首相のヤスがバレンタインデーのチョコレートよろしく甘いプレゼント。在日米軍への「思いやり経費」は二〇・四%の増で八百八億円。このうち「提供施設整備費」というのがあってそれがその中でも二五%の伸び。

「提供施設整備費」。耳なれない言葉です。要約すると、日米安保条約によって日本の国は米軍に「I want this place」と言われれば「さようございますか。結構でござりまする」とばかり基地として提供しなければならぬいのですが、この狭い日本の国土をタダで貸し、そこで米軍が使う建物もハイよっぱかし建ててやり、この建物の整備費迄、日本国民の税金でという流れです。なかなか面倒みが良い政府で、感心します。

「グウク (book)」何の英語か御存知ですか？ アメリカの兵隊俗語のひとつだそうです。戦前、中国人をチャンコロと呼んだ類と思ってくだされば良いのです。海外にかり出される米海兵隊員達は訓練の中で「グウク (book)」「は人間じゃない。殺すのにためらうことはない」とたたきこまれるそうです。「グウク (book)」とはベトナム人、日本人、中国人などをさす蔑称







で「人間より劣った生きもの」を意味するのだそうです。広大な金網の米軍の基地の中で鉄砲やら戦車で完全武装のアメリカの男達が、素手で働く日本の女達のお金を浪費しながら何を考え生きていくのか知りたいものです。まあお互い、命を大切にしたいものです。

さて次に異常に落ちこんだ予算部門は「災害復旧事業費」で二七・五%のマイナス。大雨で河川が氾濫した、火山が爆発したような時に使われるお金だと思う。我が日本国は地震も少なく台風も少ないので国民の生活は自然の災害の前にビクともしないと判断なさったのでしょうか。いかにも地味なこの

部門。しかしテレビで時々見る天災の前に明日は我が身、わが身だったら一体どうしようと思わない母親は一人もいないと私には思えるのです。たった一度きりでもあつてしまえば、その後の人生は目茶苦茶というのは、何の為の税金かと思えます。この分野にも「思いやり経費」の大盤振舞を!!

以上、この二つの異常をちょっと見ても、米軍の為に暖かい春の風、地味で大人しい日本国民(私のことです)にはたそがれの秋の風。いや冬の風かな? 中年女のヒガミかしら? 日頃浅はかな私めも、この二つの異常な結果が五十兆円といわれるわが国の一般会計予算の一つの方向を示していると思えば、女の細腕で何とかせねばと思えてくるのです。

私のお金は、死ぬ為の準備にはなく、幾えにも花ひらく私達自身の美しい未来の為に使われねばならないと考えます。貴方はいかがお考えですか?

(え・万谷陽子)

## 「国籍」を考える

●土井たか子編 定価1,400円¥250

国籍をめぐる差別の実態を糾明!!

母が日本人でも日本人になれなかった子どもたち、国籍を口実に人生をゆがめられた人々。その法的・社会的問題点を明らかにし、ひらかれた社会へ向けて、真に人権を尊重する国籍法のあり方を提示する。



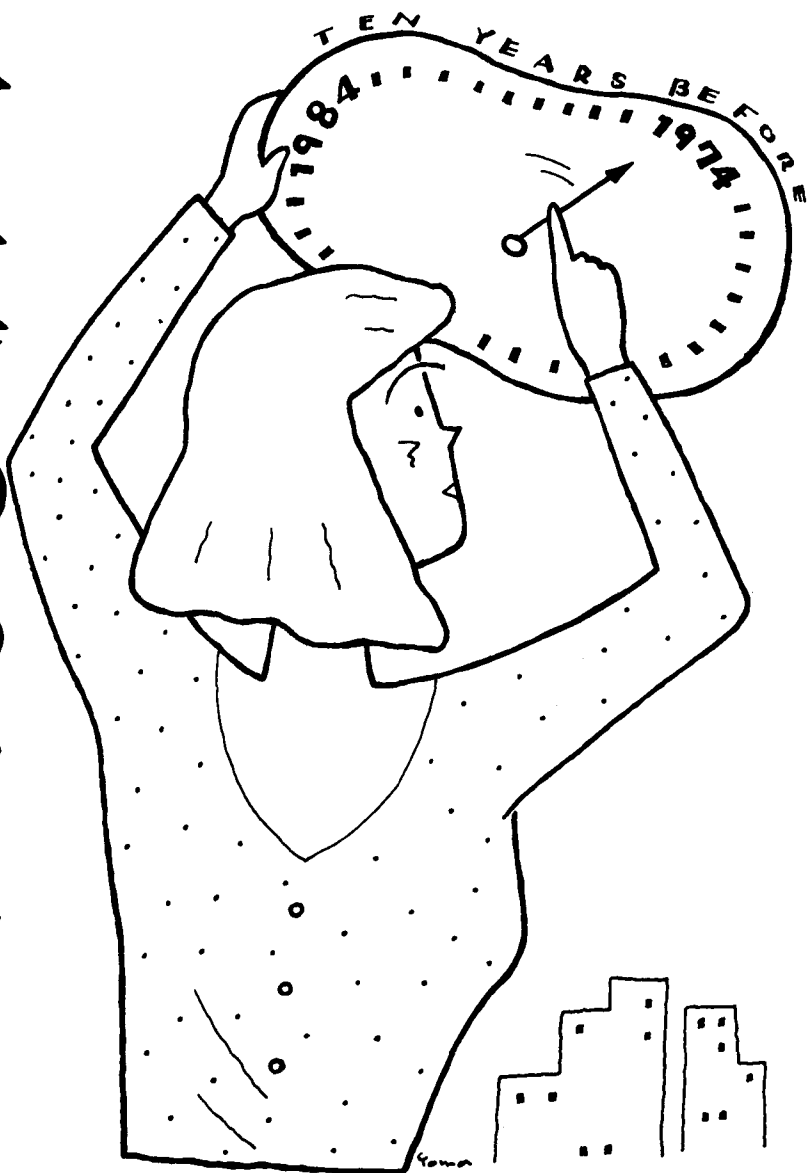
時事通信社

東京都千代田区日比谷公園1-3 ☎03(591)1111 振替東京4-85000



特集

# 十年前のわたし

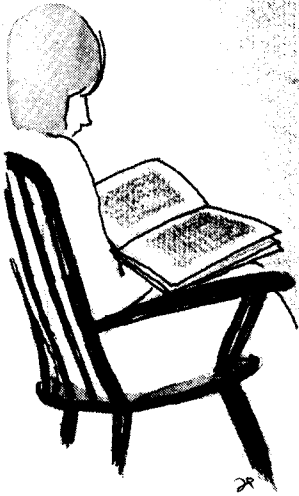




# 卒業アルバムを 見るたびに……

野村 尚子

千葉県 八千代市



売春の話もあった。行きずりの男性と寝た話も聞いた。私のいたのは今はやりの暴力校ではない。当時神奈川県では有名な方の進学校だった。

十年前の私、十六歳の高校一年。体重は今より重く、頭の中は今よりやや軽かったのではないかと思う。

人を好きになった経験なし、デートの経験なし。私はオクテだった。それでも学園ドラマに出てくる高校生のカップルには憧れていたし、男子生徒に興味がなかったわけではない。

女子の多かった私達の高校では年に一度、近くの高校とジョイント体育大会をした。近くの高校とは、県下有数の進学校で男子生徒が多いときてゐるから、ボーイハントのチャンスでもあった。学校側もすべておぜんだてしているようなところがあって、「フォークダンスの時は、男子は、いいと思う女子をパートナーにすること」なんて決まっていた。



一年の春入学間もないころ、第一回の体育大会がひらかれた。会場は相手校だった。私達女生徒は、メンドリよろしく会場に入っていた。

すべての日程をおえたあと、フォークダンスが始まった。音楽が校庭に響いて、空はしだいに暗くなった。電灯がついてムード満点。明るくさわやかに高校生のカップルは踊り始めた……と思いきや、踊っているのはごく一部。大多数の生徒は、慣れない場所に来たように校庭のすみっこに数人ずつかたまっていた。女生徒をさそえ、って言ったって、そう簡単にできはしない。結局最初に踊っていたのは先生達と、公認カップル数人だった。

このままウジウジとシラけた生徒がたくさんいれば、この日は私にこんなにも思ひ出深くならなかった。にもかかわらず、キャンプファイヤの火がもえ、空がすっかり星に満ちると、妙に力づいた男子生徒が女子をさそいだし

たのだ。みんな踊りたい気持ちは強いから、アレヨアレヨという間にカップルができて、フォークダンスの輪は広がった。当然、校庭のすみっこにいる人数は減っていった。

私は、といえば、仲良しだったA子ちゃんとしっかり手をくんで、「だれか今に来るぞ」と期待しながらまっていた。「でも、もし私をさそいに来たら、どうしよう、A子ちゃん一人にしちゃっていいかしら」と、かってに悩んでもいた。オクラホマミキサーの音は高くなり、熱気がムンムンしているというのに、A子ちゃんと私のまわりはシラけきつてるではないか。

「誰もこないね。こんなすみっこにいるからわからないんだよ。もっと輪の方にいこ」二人は、こんな会話をしながら、歩き始めた。

「誰かさそってよ」声がしだいに真剣になった。前を歩いてくる男子生徒にスルドイ視線を向ける。男子生徒はサ





ッと目線をはずし、スルリと体をかわしてしまふ。

「こんなはずじゃないのにね。誰もさそってくれないのって、もしかしたら私たちだけじゃないの」

事実、踊りの輪に入っていない女子って私達だけになっていた。

「でもいいよね。ここに二人いるっていうことは、さそれなかったのは一人じゃないっていう証明だもンネ」

「そうよ、そうよ、もういいから帰ろう」

こういいかけたとたん、一人の男子生徒が私達の方に向かってきた。

「僕と踊ってください」

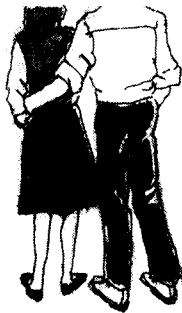
「えっ」と思わず頭をあげると、その男子生徒はA子ちゃんの方を見ていた。

「僕といっしょに輪に入って下さい」

はにかみながら言っているその顔は、いっこうに私の方をみない。明らかにA子ちゃんをさそっているのだ。その男の子は一人だった。

そしてA子ちゃんをつれていこうとしている。

私は思わず頭がゴチャゴチャになって心に大きなショックを受けた。そのショックが今でも胸の中心部にあって、こんな思い出話を書かせているのだが、気がついた時、私はおぼの部屋にいた。「尚ちゃん、それはきつと、あんたが可愛かったからよ。その男の子は、あんたには決まった子がいると思って、A子ちゃんのほうを選んだんじゃないの。A子ちゃんはいかにも男の子に縁のなさそうな顔してたんじゃないの」それから十年。卒業アルバムを見るたびに考える。本当に私のほうが可愛かったのかしら、でももしかしたら、あの夜私は学校一みじめな女の子だったのね。



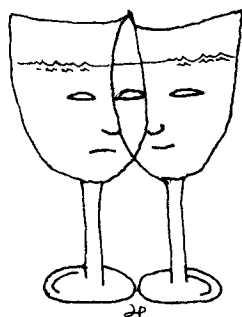


# 歲月の重み

長縄

幸子

愛知県犬山市



一九七四年（昭和四十九年）春、私は大きなお腹を抱え、生後八カ月の長男の育児をしながら、週一回、ささやかな英語塾をひらいていた。結婚二年目、お腹の中には、妊娠七カ月目の次男がいた。住居は借家住まい。夫は、半年前に、自営業から会社員に転職したばかりだった。

夫と私は、好きで一緒になったものの、お互いの育った環境の差や性格の強さから、よくけんかをした。口げんかといった、可愛らしいけんかではなく、近所の人がびっくりするくらい大声の、激しいものだった。夫の激怒で家具が壊れ、無理して買った婚約指輪も、私が何度か投げたために、傷だらけになった。近所の人からは、「お宅は、英語で夫婦げんかをするんですか」といやみを言われた。

それ以上に私の心を塞いでいたのは、結婚直後、交通事故に遇ってきた、顔面の傷痕だった。私は自分の顔を見



るのが辛く、毎日鏡を見ては泣いていた。長男出産後は、育児で気もまぎれ、忘れることが多かったが、しかし、八百屋と、長男を抱いて散歩に行く以外、めったに外出することはなかった。八百屋へさえ、人の目を気にして、行くのがいやだった。

もちろん、相談する人などいなかった。いたとしても、私自身の心が閉じられていたので、たぶん誰にもしなかったであろう。夫とけんかをしながらも、私が口を開き、自分自身を語る相手は、夫しかいなかったのである。

私が今まで生きてきた中で、一番はじめな時代であった。

「早くこの顔を直し、働きたい。夫とは別れてもよい」

そんなことを毎日考え暮していた。

次男出産直前に、家賃が当時、二百百円という公営アパートに移った。夫が転職し、収入が少なかったために入

れたのである。そのアパートは下町にあり、住人たちは、前の借家の近くの人に比べると、嘘のように人の良い人々であった。私はこの人たちによって、どれ程救われたかしない。しかし、生活するには、そこはあまりに狭すぎた。二K、フロなし、という間取りだった。

毎日の生活は規則正しいものだった。年子の息子二人をアパートの前の公園で、午前中たっぷり遊ばせ、午後からは、二人を連れて銭湯に行き、帰りにスーパーに寄った。帰ってから昼寝をさせると、もう日が暮れかかっていた。夕ごはんの用意が終る頃、夫が帰宅し、昼寝から覚めた子どもも加わって、四人で食卓をかこんだ。

私と夫との間は、借家当時に比べると、段々、落着いてきてはいたが、手間のかかる年子を抱え、やはり、時々けんかした。

子どもが小さい間は我慢せよ、とい

う男の意見と、何年も何年も我慢なんかしていられないという、私の意見が衝突したのである。けんかをすると、当然のように家を出ていく夫の背中を見つめながら、

「いつか必ず、子どもが大きくなり、私が稼ぐようになったら、あんたなんかと、離婚してやる」

と呪文のように、つぶやいていた。顔の傷痕のことは、育児の忙しさで忘れることが多くなった。

この十年の中で、私の心の中に革命を起こさせたのは、あの「国際婦人年」である。子育てに追われながらも、新聞の家庭欄だけは、毎日くまなく目を通していた私は、女性の権利が国際的行事に取り上げられるという、その記事を見た時、思わず、自分の体の中の血が騒ぐのを感じたのである。

私が何度も夫と衝突をくり返し、そのために、心の中に大きな悲しみを抱

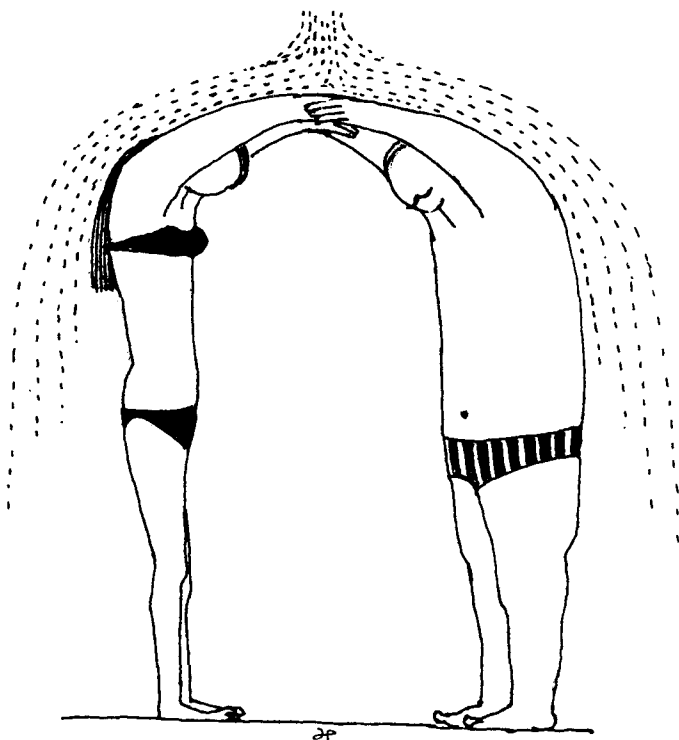


きつつ、言い続けてきたことは、まさに、

「あなたと、私は、平等なのだ」ということだったのである。

その記事をきっかけにして、私は久々にペンを取り、「私の熱い思い」と題して、密室保育状況の自分を語り、新聞に投稿した。私の文は新聞に載り、何と十二人もの人々から手紙をいただいた。皆、同じ思いをしている人々であった。今から考えると、この投稿が私を社会へ出してくれるバネとなったようだ。なぜなら、その投稿した、たった一つの文が縁で、いろいろな人たちと知り合いになれたからである。

その十二人の手紙を新聞社に送ることによって、まず第一に、女性新聞記者と知り合った。彼女を知った時、私は国際婦人年を知った時のような衝撃に襲われた。今から考えれば、大げさのようにも思われるが、しかし当時、彼女のように第一線でバリバリ働く女





性を身近で見たことがなかったのである。彼女は私にとって、とても、まぶしく見えた。

その後、わいふを知り、あごらを知り、あいちの会を知り、ウイを知り、いろいろな人々に出会った。皆、素晴しかった。主婦プラス何かをしている人々であった。その人たちの存在が、ともすると、孤独感にさいなまれがちな私を救ってくれた。

それが約五年前の私である。その後、今の家を新築して転居。転居して間もなく、二人の息子を保育園に入れると、大学の障害児の専門課程に一年間通い、その後四年間、講師として働いた。年収は多い時で三百万弱、少ない時で百五十万円くらいだった。初月給をもらった時の嬉しさは、今も生々しく記憶に残っている。

十年前、私が決心したように、今、私は食べていけるだけの収入を得るこ

とができる。昨年末には「主婦の再就職セミナー」で講師役もやらせてもらった。息子たちは大きくなり、今年、五年生と四年生になる。時々、私の方が息子達から注意される程、彼らは成長した。二年前には、息子二人を夫と親類に託し、自分の稼いだ金で、ヨーロッパを二十五日間まわった。今年は、アメリカに行く予定である。

夫との関係は、今はとても安定している。夫と徹底的にやり合ったことは、お互いを理解するために役立ったらしい。夫と私は強い信頼で結ばれており、もちろん二人の間は、同等である。

先日、家族で、以前住んでいた、あの借家の前を通ってみた。そこに、家はなかった。さら地になっていたのである。もうすっかり中年のおばさんになってしまった、隣の奥さんが玄関をはいっていた。

「お宅は、英語でけんかをするんですか」

ときいた女の人は、今、どんな夫婦関係を結んでいるのだろうか。彼女と夫は同等であろうか、子どもたちは素直に育ったのだろうか。

今、私はまた、次のステップを考えている。そのために、この一月から仕事を止め、今はカルチャーセンターに通い、自分をみがいている。四月からは英語塾をやるつもりである。また、元に戻ってしまった感じだが、でも、十年前の私とは決定的に違う。

私には、平等な家庭があり、囲りには、様々な形で関っている人々がいる。そして何より、いつでも稼げるという自信がある。

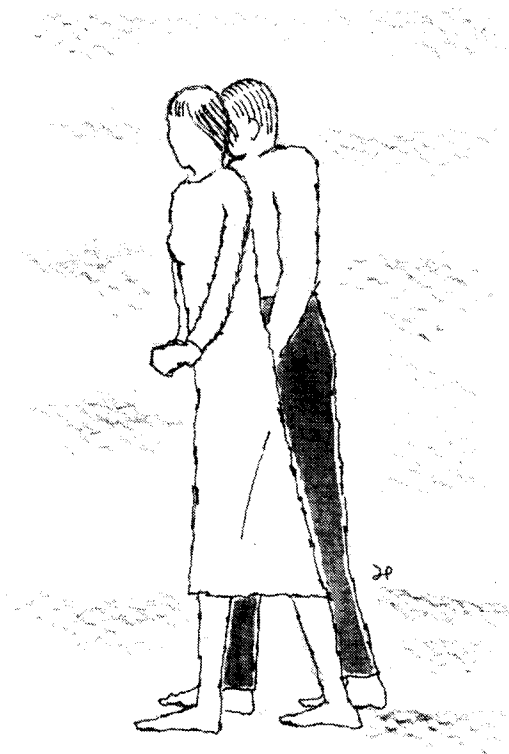
顔の傷痕は、完全には消えない。たぶん、私が灰となるまで、つき合わねばならないだろう。しかし歳月は心の傷をいやしてくれる。完全には失くらないけれど、薄くはしてくる。

十年後の私は……。何事にも疑い深



い私には、十年後の自分を想像することとはできない。常に私には今日があり、明日は今日の続きであった。今日やらなければ、明日にだって、できないの

だ。そんな思いで日々を過ごした。しかし、ただ一っだけ、未来の展望として自分に言い聞かせてきたことがある。子供は巣立つ存在であるという



こと。これは、これから変わらないだろう。彼らの巣立ちの足かせには、絶対なってはならないのだと、彼らが生まれた瞬間から思い続けている。

彼らのためにも、自分自身のためにも、やはり仕事を確立しておかねばならないようである。家事も子育ても、私を助けはしないだろう。

十年後、もし私が生きていたら、やはり、そこに大きな努力の結晶ができていてほしいと思う。

十年前に、産後の肥立が悪く、亡くなってしまった、高校時代の親友の山田啓子さん。私は今、生きています。もしかしたら、あなたが私の生きる原動力になったかも。あなたは、私の心の中で生きています。あなたのお子さんも、さぞ大きくなられたことでしょう。



# 四十歳の出産

友沢 昌子

千葉県市川市



今から十年前、私は四十歳、何と次男を出産した年なのです。オフィス生活が長く三十二歳の晩婚でしたが、翌年長男が生まれ、子どもは四人位欲しいと言っていた主人には申し訳ないことに、六年間長男一人だけだったので、それが舎弟のピンチヒッターで主人とテニスをやり、ずっと教えてもらうハメになったら、スポーツをやったことのないからだの方がビックリしたのでしょうか、次男を授かることになりました。自宅で英文タイプの内職をしながら、ルンルン気分で一人っ子を育てていた私にとっては晴天のヘキレキ、ちょっと悩みました。

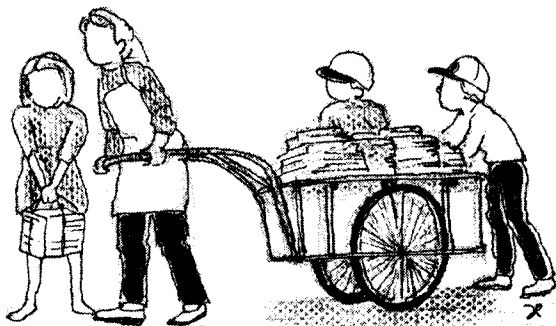
とにかく四十歳の出産、子育ては疲れしました。加えて出産の際の輸血で血清肝炎になり、入院するのしないの大騒ぎ、あわや家庭崩壊かと思われましたが、通院二年で肝炎もおさまり、正に四十九年は忘れられない年です。

その次男も今は小学四年生、「中曾



根さんを泣かそーね」などと学校での流行言葉を披露して家族を笑わせる我が家の準エースに成長しました。

それからの四年間は育児に専念、五



年目から地域の子ども会育成会にたずさわり、子どもってすばらしい存在だと言うことに気が付きました。自主性のない今の子ども達が何とか自分達で運営出来る子ども会になるよう、野外活動や廃品回収、町内清掃と週末はボランティアに充てています。この奉仕を通して沢山のすばらしい人々に出会い、教えられ、私の心の財産がふえました。

そろそろまた英文タイプの内職を、と思っていた三年前から、主人が家で仕事を始めました。書類を打つのに必要なので、今度は和文タイプをならい(二カ月の特訓コース)、これは五十の手習いで大変でした。しかし私と結婚する時、「将来事業をやる時の助手にと思った」という主人の期待に答えなければならず、ガンバリました。今は電話の交換手兼営業事務兼和文タイプスト兼主人の迷秘書兼お使いおばさんと五役をこなし??主婦業とボラン

ティアを何とか一生懸命やっています。でも老いはソロソロと私にせまり、「五十歳なんだ」と思わざるを得ない時があります。あと十年六十歳迄、最も苦手なお料理を少しずつ改善し、忘れてしまった英会話をなんとかカセットでフレッシュアップしたいと思っています(語学はボケない最も良い武器のようですので)そして六十歳の時、またその先の十年を張切って考えられるようガンバッテ生きたいと思っています。またボランティアを生活の一部と考えるのが、私の生きがいのように思います。奉仕によってとてもいろいろのことが学べるからです。育成会をやめたら、英検を生かして恵まれない子や行きづまってしまった中学生に、初歩の英語のおもしろさを教えてあげたいと思います(その機会があれば)。

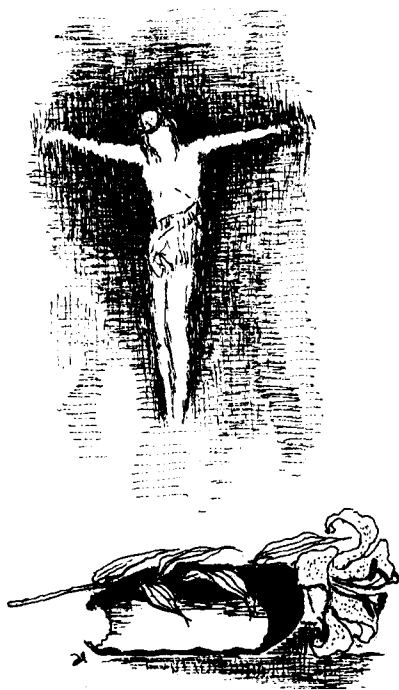
夢と情熱があふれすぎてあと十年どうなることやら!!



# キリスト教に出合つて

酒井千恵子(53歳)

神奈川県横浜市



十年前の昭和四十九年、日本は石油ショックに見舞われて各地でトイレットペーパー騒ぎが起きた年でした。

当時、私は四十三歳、家庭の主婦として、妻、母、仕事と一人何役も引き受け、ただ毎日をこの世的な事柄に追いまくられていて、大切な人間はいかに生きるべきか、何の目的で、どうしてなど、深く考える余裕もないままいたずらに馬齢を重ね、まして他人を思いやることなど考えることもしなかったのです。自分の家庭さえうまくやればいいと思っていたのです。

思えば敗戦の混乱がやっと治まった昭和二十六年に二十一歳で結婚、三人の子持ちとなり、とにかく親として子ども達を一人前に育てねばと夢中で、時々これでいいのか、子供が飛び立った後の生きがいは、と迷いなやみながら、現実の生活に目を奪われていました。

教育の真最中、食べ盛りで、長女が



京都に下宿していることもあって、月五万円は送金しなければならず、教育費、食費の家計に占める割合は年毎に大きくなり重くのしかかって来ました。主人は中堅サラリーマンとして一生懸命家族のために働いて、その給料の大半は私に手渡ししてくれましたが、手許にあたためる間もなくどこかに消えてゆきました。

私も安閑として主婦業に専念していたわけではなく、結婚前の英文タイピストの腕を生かして船会社関係の仕事に出掛け、家計の足しにしていました。このアルバイト体験は、娘時代の気ままな稼業と違って本当にシビアでお金の尊さを教えてくれました。だんだん年のせいでしょうか、タイプを打っていますと、小さな横文字がかすんで来て、だからだか分からなくなり、老眼鏡のお世話になったのもこのころです。更年期と重なって神経的にも肉体的にもかなり参って来ました。主人のもう

女じゃなくなるのかと冗談にからかう言葉は私の心にとげのようにささって苦しみました。

子ども達は、疲れている私とは反比例して成長し、それぞれの道を見つけて、長女は高校の養護教員に、長男は水産大から水産会社に、末娘は警察官にと歩みはじめました。このことは、真に喜ばしいのですが、子育ての生きがいをもぎとられた空しさが私の心をおおい、それを払おうと文化教室に通ったり、英語を勉強したりしましたが、どれも淋しさをふさぐことは出来ませんでした。

四十歳もすぎ去ろうとしていた昭和五十五年でした、私がキリスト教に合ったのは。若い一時期、教会と交わりを持ったこともありましたが、主人の母がクリスチャンのこともあってそういう雰囲気にはなじんでいたのですが、決定的に私にショックをあたえたのは、近くで開かれた家庭集会に参加

した時からでした。

牧師を囲んでの二十人ほどの婦人の集まりでした。初めて出席した私のために牧師先生は聖書を通して神の愛をお話し下さいました。会の終りにある婦人の感謝の祈りを聞いた時、何か打たれるものがありました。自分がないものをこの方達はもっておられる。柔和さ、おだやかさ、けんきよな心、何もかも新鮮に見えました。

家に帰ってソファに座った時、あくせく暮して来た自分が、ひどくみじめで恥ずかしく思われて来て、涙があふれて来ました、ぬぐってもぬぐっても。目からうろこが落ちるとはこういうことでしょうか。泣き止んだ時、私は不思議にも静かな気持ちに満たされ、身体の内部から教会へ行こうという気が起きました。

次の日曜からです。主人の許しを得て教会に通い始めたのは。夢中になって聖書をよみ始め、むさぼるように説



教を聞きました。それはいずれも私の心の持ち方を変えるものでした。それまでの私は、いつも自分が自分と自己を前面におし出し自己中心的でしたが、それからは神が第一に来るのです。それになぜか人様を氣遣う氣持になっ

て来ました。

神がこの世の万物を創造し、罪深くなった人間を救うために、神の御一人子イエスキリストをこの世に送り、十字架にかけ、私共の罪のあがないの聖なる捧げ物になされたこと、イエスキ

リストがとりなしの神であること、信じる者には、死んでも復活があることを知りました。聖書も旧約、新約を通読、くり返し読む度にその奥深さ、ありがたさで、私の心の栄養となりました。荒涼とした砂漠でオアシスにめぐ





りあえた心地でした。

## 詩篇 23 篇

一主はわたしの牧者であって、

わたしには乏しいことがない。

二主はわたしを緑の牧場に伏させ、

いこいのみぎわに伴われる。

三主はわたしの魂をいきかえらせ、

み名のためにわたしを正しい道に導かれる。

四たといわたしは死の陰の谷を歩むとも

わざわいを恐れませんか。

キリスト教では罪、罪というけど、どんな罪と人に聞かれますが、自分で感じた罪ももちろん、知らないで人を傷つけていることもふくむのです。私も傲慢にもいまだかつて人を傷つけていないと思っていました。ある日の礼拝説教で、誰でも罪人ではないといきれないと先生に言われた時、私は初めて自分の罪の重大さに気付きました。それは大東亜戦争中、いかにその体制

からぬけ出せなかったとはいえ、学徒動員で陸軍兵器補給廠で、戦いの勝利を信じて敗戦のその日まで、来る日も来る日も弾丸を作っていました。

そのことを思い起こす時、私達の作った、手りゅう弾、九二歩兵砲、高射砲等々で、どれほど、敵も味方も死なせ、その家族を悲しませ、いまだに後遺症で苦しんでいる人がいるかと思うと、心が痛みます。先生にいわれるまで戦争中のことだから仕方がなかったと後めたくは思いながら罪の意識がなかったのです。気が付いた時、私は泣いて悔いて神に許しを乞いました。自分を愛するように隣人を愛せよ（ルカ、十一・一七）のみことは胸に、昭和五十六年クリスマス、信仰告白をして日本キリスト教団横浜菊名教会で洗礼をうけました。五十一歳の時です。この日を境に私は霊的に生まれ替わりました。ハレルヤ。それからだんだんと私の目は社会に拡がって行き

ました。ある時、区の公報で視覚障害者のためのボランティア活動があることを知り、仲間に加えていただきしました。公報の録音テープ作りです。仲間と手分けして公報のテープを障害者に送るのです。

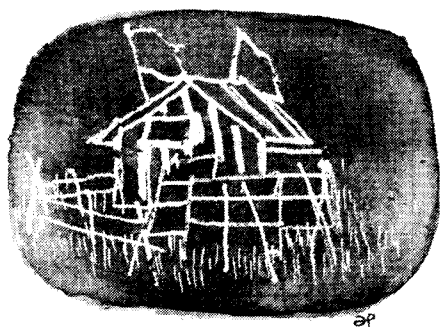
どなたが私の声を聞いて下さるのかと思うだけでもうれしくて、心がはずみます。また、近くの市立盲学校で対面朗読の奉仕に出掛けます。学校の図書室に白い杖をたよりに、心を輝かせて「おはさん、これよんで」と来る子ども達、童話や物語に私までひきこまれます。それに中途失明の方たちにもと、こんな小さなことが役に立てるなんてと私はとてもうれしいのです。この十年間に起った私の心の変化、いつか迎える終りの日まで、「信仰と希望と愛」とを胸に、精一杯生きようと思います。



# 処女を捨てた二十九歳

関根 洋子

千葉県 千葉市



十年前、私は三十歳だった。まだ独身で、結婚をあせってきりきりしていた。Kと夜をともしたのは、まだ二十九歳の時だった。

人間、四十歳にもなると、自分の限界が見えてくる。若い頃私は、自分は有名な作家になって不朽の名作を書くのだ、と何の根拠もなく信じこんでいた。少女時代から作文は上手だった。

さまざまな空想が次から次へと浮かんできて、物語のイメージは豊かにふくらんでいた。といって、実際にペンをとって書いたことは、数回もない。一人よがりの作家志望者だった。

四十歳。もう人生は半分しか残されていない。この半分以上はどう生きるのか。どうやって小説を書き、作家になってゆくのか。あせっている。自信もない。三十代で、だんだん自信を喪失してきたのだ。

結婚したのは三十三歳の時だった。それでやっとハイミスのあせりからは



解放されたのだが、結婚生活が幸せとは言いがたい。結婚相談所で、四歳の男児のいる父子家庭の父親と知りあって、結婚したが、生さぬ仲の息子との苦勞もしたし、夫ともうまくいかなかった。夫は自分は君を好きだと言ってくれたけれど、考え方も平凡で、本も読まない、無趣味でユーモアも解さない夫が、私には、つまらぬ男に見えてしかたがない。性生活も、想像していたよりつまらなく、味気なかった。

それでも、どうにかこの七年、離婚もせずに生きてきた。これから、この状態を続けながら、ぶつぶつ文句を言いながら生きていくのだろう。

現在では、キャリアウーマンの社会進出もあって、結婚しないで生きる女の生き方も女性誌をにぎわすトピックとなったが、十年前は様子が違っていた。

女は結婚するのが当たり前、結婚できない女はヒステリーのオールドミス、

という考え方が社会全体をおおっていた。そんななかで、私はハイミス性メランコリーとも言うべき病にかかっていて、自分が結婚に恵まれないことをくよくよ悩み、ゆううつに沈んでいた。暗い性格にかたよっていて、そのため見合いらしても不調に終わることが多かったのだが。悪循環だった。暗いからうまくいかず、うまくいかないからさらに暗くなる……。

もう一つ。私は二十代の頃、ずっと過激派の運動にかかわっていて、政治的な生き方をしていた。今思えば、内ゲバをしたりいたずらに過激化したりする連中と、なぜ十年間もつきあっていたのか、おろかだったとは思うけれど、その頃の私にはそれが人生だった。

反戦青年委員会というのがあって、私もその一員だった。会の中の若い女性闘士、A子とS子を指導する役割、ということになっていて、特にS子とよく気があって、いつも一緒にいて、

S子の恋愛についていつも相談を受けていた。

S子が街頭で三里塚闘争のカンパ活動をしていた学生を、好きになったという。でも、名前も知らないし、どこへ行ってしまったのかも分からないし、探しようがないという。

そう相談されても答えようがなかったが、「二人で三里塚で手助けをしてくるように」という指令が出て、S子と共に三里塚の団結小屋へ行ったら、そこにいる学生たちの中に、S子が見染めたKがいたのだった。

Kは小ぶりの丸頭の、人なつっこい善良な青年だった。Kを好きになったS子の気持ちがよく分かった。S子とKとの恋——それは、さまざまな紆余曲折を経ながら、続いていった。

そのことを私はよく知っていたし、温かいほえましいカップルだと思っていた。年下のKに、私が恋愛感情を抱いたわけではない。



問題は、Kがつぶれてしまつて、闘争に出て来なくなつた時からだった。

「機動隊に、『なんだ○○大なんて三流大学じゃないか』って言われてくやしいなんて嘆いているのよ。自分も一流会社に就職したいって、そんなことを言うのよ。三里塚でやってた頃のあの人は、大違いなの」と言うS子は、

次第にKから離れて行つた。ほかの活動家の青年に近づくようになって、Kとのことを避け始めた。

その頃、私もまた反戦青年委員会から離れ始めていた。いつまでも内ゲバに狂乱する連中の仲間入りはしていられなかった。

S子も政治運動より恋愛それ自体に

熱中するようになり、私もS子も組織

を離れて、よく電話して話しあう毎日だった。S子の恋愛の話などよく聞いて、長電話でしゃべりあっていた。

S子に棄てられて自暴自棄になっているというKに、電話した。Kの下宿まで行つて、いろいろと話をした。

Kはマルクス主義の本などたくさん買いこんで、読書に熱中していた。内ゲバの反対派である○○派のことともくわしく知りたいと言っていた。

私とKは意気投合して、私が自分のアパートにKを招いたのだった。

二十九歳の私は、あせりにあせっていた。このまま処女のままで三十になるのだろうか。三十歳の処女なんて、自分がみじめでならなかった。涙が出るほどせつなかつた。

アパートでKのために夕食を作つてやり、寝床を共にした。

「わあい、これで大人になったぞ」と彼は喜んだ。



29



私はひどく冷めた目で、そんな彼を見ていた。童貞を棄てたことに歓喜している彼。快感もなく、冷めている私——。

その夜は、そのまま眠った。翌朝彼は帰ったのに、夕方になるとまた電話がかかってきた。君の家へ行きたいと言う。何か話が



あるらしい。

夕食を作っているとやって来て、食べもせずに話だけした。

セックスがむなしかったと言う。愛のない性はむなし……。自分には郷里に将来を誓いあった少女がいて、その彼女と会いたい、とか……。とつとつとそれだけ語って、帰って行った。

ことの次第を電話で告げた私に、S子はこう言った。

「いなかに女友達がいるなんて、おかしいわ。私にはそんなこと言わなかったもん」

そう、恋人といえば、S子が恋人だったはずなのだ……。

今も、Kがなんでああ言ったのか、私にはよく分からない。きつと、郷里に女友達がいるにはいたが、あれはそれほど深刻な話ではなかったのだろう。男心は複雑で、つかみにくい。

Kとは、それっきり会わなかった。私はほかの恋に夢中になって、Kのことも、反戦派の活動のことも、考えなかった。

処女のまま三十歳になる、などという恐ろしい事態にはならず済んだ。そのことで私は重苦しい気持ちから解放されたし、それはそれで良かったと、今でも思っている。



# オー・マイ・ドーター

鈴木 桂子

千葉県松戸市



今年になって、十年一昔”という言葉  
葉を幾度も噛みしめ、そのほろ苦い味  
を反すうしている。

十年前、私は満三十四歳と十五日で  
長女を産んだ。今年と同じ雪の多い冬  
の二月二日だった。結婚して七年、二  
度の流、早産の後、ようやくにして授  
かった子供であった。

この子に、希（のぞみ）”という名  
をつけ、自分の未来をすべて賭けると  
いう心境であった。ということとは、こ  
の子のために私はそれまで築いてきた  
”すべて”を捨てたということでもあ  
った。

大学を出た昭和三十七年は景気が下  
降し、四年制大卒の女子の就職は実に  
狭き門だった。すべり止めに受けてい  
た東京都に合格していたことが唯一の  
就職口となり、他はすべて不合格であ  
った。

その東京都に勤めて十一年目、三十  
三歳で三度目の妊娠をした。前回の早



産から五年も経っていて、もはや子供は授けられないとあきらめて、女一人自立の道を選ぶつもりだった。

前回、男児を七カ月で早産して以来、夫の家族（姑と小姑）にきびしく責任を追及され、「あなたの曲った根性が子供を死なせた」とののしられ、夫との間も気まづくなっていた。

公務員として経済的には自立できるが、職場結婚だったので、離婚後の影響も考え、夫と関係ない他の部局への配転を秘かに考えていた矢先の妊娠で、運命とは皮肉なものであった。前回も前々回も三カ月頃から切迫流産で、薬と安静で妊娠の継続を図ったが、失敗に終わっていた。今回もまた切迫流産の徴候がみられるという医師の診断に、私の、離婚して子供を産み、一人で育てる、という決意はゆらいだ。子供を無事に産むためには、夫に扶養してもらわなければならないハメに陥っていたので、とりあえず離婚の話は切り出

さないことにした。

夫は私が離婚を真剣に考え始めた一年位前から、何となく私の様子にただならぬ気配を感じたのか、急に私にやさしくなっていた。私はどうせ他人になる人という考えで、夫に逆らうこともせず、心を開いた話もせず、一見平穩無事に過ごしていた。勿論離婚を口にすることはしなかった。準備が整ったら即別居し、一気に離婚に踏み切るつもりでいた。そうしないと、マザコン夫、姑、ハイミスの小姑とのすさまじい葛藤の渦にまきこまれてしまうのは目に見えていた。

子を産む最後のチャンスと思い、東京都を退職した。三十三歳という年齢を考えれば、再就職はバートしかないと思い、社会的存在としての自分はこれで消滅するのだと思うと涙があふれてきたことを思い出す。

無事に子供を産むことだけを考えると九カ月を過ごし、ようやく三千八百

グラムの女児を自然分娩で出産した。

輝くような歓喜の日々も長くは続かなかった。出産三日目に四十度近い高熱を出し、保育器に入れられた娘は、その後もお乳をほんの少ししか飲まなくなってしまった。そのうち上手に飲むようになり出すという医師の言葉を信じて退院したが、相変らずの細い飲みっぷりと頑固な便秘が気になって小児科へ行くと、心臓に異常があるから早速精密検査を受けるようにといわれ、市立病院心臓外科への紹介状を手渡された。

放心した私は買ったばかりのベビーカーに娘を乗せ、小児科医の言葉が誤りであってくれることのみを考えて家に帰ってきた。

夫に休んでもらい、朝八時から午後三時迄の長い長い精密検査の結果は、心房・中隔欠損症ということで、心房のしきりの膜に穴があいているということだった。心室中隔欠損症の場合は、罹患率



も多く自然治癒の例も稀にあるが、心  
房の場合は手術による方法以外はない  
といわれた。娘の大きな腫が、光の工  
合で深い藍色に見えることに気づか  
なかつたわけではなかつた。日本人離  
れしているといわれた透きとおるよう  
な白い肌も、フランス人形のようにど  
いわれたブルーの腫も、すべて、心房  
中隔欠損症の表れだったのだ。

私にも夫にも似てない、天使のよう  
な娘に有頂天になつていた自分の愚  
かさが悔まれた。

風邪をこじらせても生命があぶない  
といわれた娘を無事に三歳まで育て、  
手術に耐えられる体力をつけることが  
私の使命になつた。

一回に二十〜四十ccしかミルクを飲  
まない娘に一日十八回授乳し、夜中に  
寝汗で下着がぐっしりぬれるために  
三時間ごとに起きて着がえをさせ、発  
汗したため水をほしがるチャンスを見  
せず、湯ざましの後にミルクを飲ませ

るといふ生活を六カ月続けた。二時間  
ごとの小きざまな睡眠も、合計で六  
七時間とれば良いほうだった。

夫の家族には知られたくないと願っ  
ていた娘の病気が、人の好い舅にうっ  
かり夫が話したことから、姑、小姑の  
耳に入り、待つてましたとばかりの  
・忠告・、助言・がくり返されること  
になつた。娘が生れてから退院の日一  
回初孫の顔を見に來ただけで、以來三  
カ月、一度も顔を見せたことのなかつ  
た姑が、小姑を伴つてわざわざ嫁に忠  
告に來るようになった。來られない時  
は夜九時〜十一時の間に一時間以上の  
長電話による「アドバイス」になつた。  
夫の帰りが遅く、娘が寝入つてから  
やっと一人になつて体を休めることの  
出来る唯一の貴重な時間帯を、あなた  
のご先祖の悪事のむくいでカタワの子  
が生れたのだの、今から心を入れか  
えなければ、子供は絶対死ぬのだと  
いわれ、何の反論もできず（もし反論

したら一時間が二〜三時間に延びるか  
ら）、こちらから電話を切ることもで  
きず、耳をふさいで相づちだけを打つ  
て耐える生活が続き、ノイローゼにな  
りかけた。

思いあまつて夫に話すと、姑、小姑  
は揃つて、「そんな事実はない、嫁の  
つくり話だ。よくよく根性の曲つた嫁  
だ」といわれたといつて帰つてから烈  
火のごとく怒り出した。

考えてみれば、姑は夫が居る時は絶  
対私にいやがらせをしないのだった。  
最初に夫の不在を確認してから始め、  
夫がいるというとすぐに夫に替つてく  
れといつて、孫の安否を気づかうやさ  
しい祖母として話をして、早々に切つ  
てしまふのだった。

娘を丈夫に成長させるためには、ど  
んなにつらくとも離婚はできなかった。  
こんなに手のかかる心臓病の子供を保  
育園に預けられないし、預かつてくれ  
る他人もいないとなれば、再就職はあ



きらめなければならなかった。

「娘を育てるために、住込みの無給家政婦になったつもりで辛抱しよう」と決心しても、誰一人自分を理解し、味方になってくれる者は居ないという思いが、私の心を冷たく固くさせていた。

夫は私と娘が産院から退院した日、一日だけ三人で一つ部屋に寝てくれたが、翌日から「夜中に泣かれると仕事に差し支えるから」といって自分だけ別室で寝ていた。急な発熱で娘がむずかり、一晩中抱いて起きていたことがたびたびあっても、夫は全く気づかないし、私も危険な状態でない限り夫に話さなかった。

二十一歳で実母に死別し、二人いた兄達は、戦争中十分な医療も栄養も与えられない環境で、あっけなく幼い命を亡くしていた。老いて高血圧と糖尿病を病んでいる父に心配かけたくなかった。後添えに来てくれた義母に何かと遠慮している父である。私が娘を

つれて父のもとにころがり込むことは不可能だった。「何が何でも私一人で娘を育てなければ……。私が倒れたら娘も生きられないのだから——」こう思いつつ、歯をくいしばって過ごした

日々であった。ゆっくりと鏡を見る暇もない毎日であったが、*「鬼女」*の面そのまの顔をしていたに違いないと思う。二年前まで一緒に働いていた同僚が私を訪ねてきてくれた時、あまり



28



の変りように一瞬人違いかと思ったと言った。

娘が二歳になった時、主治医は「奇跡みたいだ」といって何度も何度も娘のレントゲン写真をみつめ、それでも納得できないというように看護婦に初診時からのすべてのレントゲン写真を持ってこさせ、一枚一枚確認した上で「最初、写真の名前の書き違いかと思いました。信じられない位心臓の穴は小さくなって、機能的にも正常に近くなっています。多分、手術をしないで治るでしょう」といつてくれた。

娘をつれて家へ帰る時、暑かったのか寒かったのか全く覚えていない。ただ目に映るすべての物がすばらしく輝いていて、大学時代から否定しつつづけていた、神々が大空の彼方からやさしく微笑んでいるような、大きな安らぎと温かさに包まれている自分と娘の存在を肌で感じていた。

子供を一人産んで育てたという女と

して当り前のことをしたにすぎないのに、娘の成長は私に対する偉大な教育でもあった。妊娠から出産、育児を通しての三年間、私はたくましく、したたかな女へと変身していった。

人の心の裏も、みにくさも理解し、そして「それが人間」といった諦観と包容力も身についた。娘を育てるためという大義名分による夫との同居生活も、本質を見つめる時期に來たことを悟ったのもこのころであり、「わいふ」の読者になったのも同じ時期であった。「わいふ」によって子育て主婦の悩みを知り、柏サークルで共に語り合うことが、孤独な子育て期にどんなに力強いなぐさめになったかわからない。ヤケを起すことなく、一步一步足もとから築いていこうと決心したのも「わいふ」を知ったお陰かもしれない。失ったものの大きさを思い起して後悔していたのを止め、ゼロからやり直そうと、先ず家の外へ出ることから始



めた。地域の児童文庫、PTA、パールの仕事、フルタイムの仕事と、この数年間つぎつぎに活動の場を変えてきた。四十四歳で自活できるかをテーマに、自力で生きていく底力を身につけるのが目標である。ずるくなった四十女は、自分の自活の条件が整うまで、うかつに離婚はしないつもりである。



# 可愛げのない高校生だった

T  
H



引詰めの髪と度の強い眼鏡がトレードマーク。十年前の私は、おそろしく可愛げのない高校生だった。当時、東大文Ⅲをめざして、受験勉強に励んでいた。

脳目もふらずとは、あのことなのだろうか。受験に不必要と思われるものは、ことごとく切り捨てる。友情さえも。決められた行事への参加はサボル。(黙認されていた節もある)家事は手伝った記憶がない。家庭科の宿題は母のするものであった。

受験勉強を、一つの自己鍛練の手段としてとらえ、それ程の苦痛は感じなかった。むしろ、目標にむけてコツコツ努力することは、喜びであり、そんな自分を肯定しえた。(とはいえ、しなければならぬことが手つかずになっている時など、受験間近に一科目目仕上っていないという同一パターンの夢を、今だに必ずみるのは、どうしてだろうか。やはり、過去は、美化されるのだ



るうか)

今、振り返れば、自分のたてた勉強スケジュールにだけ従って日を送る生活は、明快でむしろ安易であった。エンドレスともいえる家事・育児の合間に得られるちょっとした自由裁量の時間を、自律的、かつ有意義に過ごすことの困難さを、痛感している。

当時の所感ノートを繰ってみると、

「我が理想主義……」「……べきである」等の言葉が、散見される。「あるべき姿」と「あるがままの姿」に引き裂かれている、若者特有の姿が浮かび上がってくる。それに比べると、今はいい意味でも、悪い意味でも、「今、ここに」密着して生きている、と思う。

もともと、男性依存願望があったのだらうか。大学に入学した年に、四歳年上の現在の夫と知り合い、ごく早期に、結婚を意識した交際が始まった。高校時代、異性には全く興味をもって

いなかった私にとっては、まさにコペルニクスの転回であった。(牛乳瓶の底のような眼鏡は、既にコンタクトにとりかえていたけれど)おそらく、両親に代わる保護者を必要としていたのだらう。あるいは、無意識に描いていた、理想の結婚相手のイメージに近かったのかもしれない。

親元を離れた解放感も手伝って、自分にかけていた、たがが、一挙にゆるんだ感があった。いわば、私にとっては、「べき」からの解放であった、ともいえよう。田舎から出てきた者にとっては、東京には見るべき物が多く、劇場・映画館・美術館を歩き回った。おのずと、学校での勉強は二の次となり、一口でいえば美的生活に流れた学生時代であった。

「せっかく東大を卒業したんだから、学んだことを社会に還元せねば」人には、よく言われたが、就職活動は、初めから行なわなかった。卒業後、すぐ

結婚することが決まっている以上、就職すれば、企業の迷惑になる、という父の意見をのみ、同級生が、東奔西走している有様を、呑気に眺めていた。が、この時点で就職しなかったことが、後悔のタネとなる。

結婚して一週間目、家事がそれ程嫌いではない自分を発見したのは、愉快な驚きだった。しかし、自分の人生がこの繰り返しだけで終ってよいのか、こんなことはしてられない、といきりたち始めた。

おりから、主婦の就職が盛んになり始め、専業主婦Ⅱ落ちこぼれ、といった論調の記事が、新聞にも見受けられる時であった。

それから、私の職探しが始まる。送った履歴書、二十数通、主婦の就職(とりわけ夫が転勤族の場合)が、思っていた程、容易ではない現実にあふれた。結局、英会話を武器に、塾講師を一年間勤めた。



そこで認識したのは、時間売って、賃金を得ている夫の切なさ、苦勞と、何でもいい、とにかくもっと勉強したいという自分の欲望であった。人間は、その時々自分の分をつくさなければならぬものである。思い返せば、原書一冊すら完読しなかった学生時代であった。しかし、勉強したい、という内発的な気持ちが生じてきた時から、本当の勉強が始まるのかもしれない。

その直後、ある文学教室へ通い始めた。主婦が物をかく時流にのった形ではあったが、今度は物をかくことで、自分をきたえたい、と思ったのだ。そこには、どうしても書かねばならない切実なものをもった仲間がいたし、あらゆる差別と闘う市民運動家がいた。従来自分と等身大の人間としかつき合いのなかった私にとって、老若男女、様々の背景をもつ人々のこのあつまりこそ、学校であった。文章技法以前に、自分の知らなかった社会の現実を知る



ことが出来たのは収穫であった。書くことによって、自分自身との、また他人との関係、ひいては、社会との関係を変えていくことが出来たら、と考えていた。

結婚後、三年目に妊娠。五十七年春、男児出産、それは、思いもよらなかったような、深い感動体験であった。産後間もない二人の部屋の中は、新生児の甘い呼吸でやさしく充たされていくようであった。そんな母と子のいわば蜜月状態も、子供の行動半径がひろがり、目が離せなくなるにつれて、変化していった。

子育て期Ⅱ準備期間としてとらえ、その後何をすべきか、自分なりに、方向は見定めているつもりではあった。しかし、現実とは、といえは、日々の日課をこなすのが精一杯、手すきの時間は、ボウーとして自己回復をまつという調子である。(十年前の私であれば、



何かに挑戦する姿勢を失くした、今の私の生き方を、価値のないものと、唾棄するであらうか)

こうした日々を重ねる内、最近では、他人と話していても、すぐに話題にと欠き、言葉が出てなくなってしまう。そんなことが度重なると、話す前から、気おくれを感じ、しだいに自分の内へ内へと、めくれこんでいく。社会的に活躍している親友の訪問は、刺激的ではあるが、より一層の焦燥感をおよびます。

片言しか話せない、子供相手だけの毎日を送っているから、こうした退行がおこったのだと、長い間思いこんでいた。けれども、今ようやく思い至った。大学入学後の、目的意識をもたぬ生き方のツケが、今頃になって全部まわってきたのだと。

そして、今再び、書くことによって、自分を取り戻そうと、考えている。

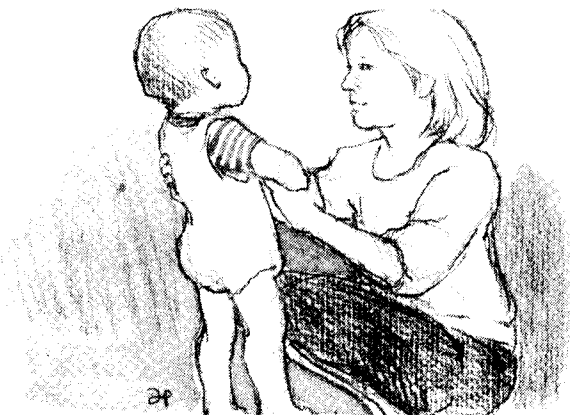
(この文章を書きながら、高校生最後

のクラスルームで、「十年後の私」というタイトルの作文を書いたことを思い出した。一種のタイムカプセルとして、十年後の再会を期しながら、書いたものだ。たしか、私ののは、主婦になって、その片手間に小説を書いているという内容だったと思う。いささか、自嘲的な気分で書いていた記憶があるが、実は、自分の将来を見越していたのかもしれない。漠然と、将来、職業婦人になっているだろう、という予感があったけれど、明確な職業観は、当時も、もっていなかったようである)

今は、全力疾走の充足感は味わうべくもない。けれども、ゆっくり歩くことで、まるで生き急いでいたかのような当時には、目にとまらなかったものが、見えているのではないか、と思う。人の心の優しさとか、自然の微妙な移ろいの姿とか。また、子供の目の高さで、物事を見ようと努めることで、更

に、もう一つの視界を得ることができのではないかと、期待している。  
十年前の私に会ってみたい。けれども、あの頃にもどりたい、とは決して思わない私である。

(え・早乙女光子)





# 栄養価の高い冷凍野菜

新潟県新津市 柳本 綸子

冷凍したものは、栄養的に生のものよりも価値が低いのではないかと思われるがちですが、私達の手に入る生の野菜はほとんど新しいとはいえず、生産者は、なるべく出荷してから長持ちするようにということが目標になります。

冷凍野菜の多くは輸入品です。特にグリーンピースや人参、九州、四国などからきていますし、たとえば、レタスなどの一部はアメリカからきているものもあります。

とってから早く処理してしまいう冷凍野菜のほうが、ビタミン

などが多いということになります。また冷凍してあると、ビタミンの減りはあまりありません。新鮮な間に冷凍し、それが減らないのですから、生の野菜を食べるよりいろいろの栄養成分が多いということができます。

冷凍野菜の多くは輸入品です。特にグリーンピースや人参、九州、四国などからきていますし、たとえば、レタスなどの一部はアメリカからきているものもあります。

とってから早く処理してしまいう冷凍野菜のほうが、ビタミン

# 女性と法

法学セミナー増刊・総合特集シリーズ25

1300円

男女平等の実現という観点から、女性をとりまく状況とそのあり方を、家庭、雇用、教育、性など、おもに法的側面からアプローチする。男女がともに、個性をもち自立した人間としての生き方を志す人々に贈る。

男女平等への世界的潮流

女性差別撤廃条約

平等とは何か

（座談会）近未来、男と女のかかわり方——男女平等を語る

鍛冶千鶴子・鎮目恭夫・山田卓生・淡谷まり子・金城清子

I 雇用問題と女性 中島通子・林 弘子・寺沢勝子・大脇雅子

II 家族（家庭）問題と女性 久留都茂子・人見康子・小林赫子

III 教育問題と女性 利谷信義・安江とも子・星野澄子

IV 社会保障と女性 小川政亮・磯崎淑子・石川 稔

V 女性と性 井田恵子・金住典子

VI 外国における女性と法 アメリカ／イギリス／フランス／スエーデン

●女性と法／いま、これだけは知っておきたい基礎13講

法律が眼に見えない…… 小田 実

妻たちは心に飢えている…… 斎藤 茂男

（エッセイ）いま、女性はいま…… 沼田福次郎・寿岳章子・我妻 洋

佐々木静子・坂本福子・神田道子・樋口恵子・半田たつ子・森 大輔

東京都新宿区須賀町14 ☎ 341-6161

日本評論社



# の女たち

小西 綾





# この十年

対談 駒尺 喜美





編集部 この十年、ずいぶんいろんなことが変わりました。十年一昔というけれど、とくに女の状況はどことがどう変わったか、どうしてそうなったのか、そのへんをお二人で自由に話していただきたいと思います。

駒尺 この十年という少しずれるけど、やっぱり変化したのは「ポスト全共闘」、六十八年のあとの状況ということでしょうね。

編集部 あの全共闘運動は、世界中でおこったわけです。一体何で世界中があんな騒ぎになったのか……。

小西 全体について考え直してみないといけないんじゃないですか。私たちの考えはやっぱり外部の影響をものすごく受けているんですよ。

どうして、あんな風に世界中が一緒に騒ぐときは騒ぐのかと思うけど、やっぱりそう考えるのは近視眼的なんや。世界中は、騒ぐときは騒ぐ。盛り上るときは盛り上ってくる。沈滞するとき

は沈滞する。

前から不思議だなあ、不思議だなあと思ってるね、よくよく考えてみると、今までは、日本なら日本だけ、フランスならフランスだけ、アメリカならアメリカだけという風に考えていたけど、それはどうもまちがいだったなあ、今になって思うようになったんですよ。だから、あらゆるものが影響しあって進んでいくんやということを前提に考えていかないと、男と女の問題も具合悪いんじゃないやろかと、やっと、思えるようになったんです。

駒尺 そういう風に全体が影響しあう中で、一番のポイントというか、全体

## 流れを変えた全共闘世代

駒尺 よく全共闘を一つの区切りとするけれど、全共闘を動かしたものをずーっと考えていくと、それまでは勝敗の歴史ですよ。国にすれば亡ぼすか亡ぼされるかという……。それが十五、

を動かす核になるものは何だと思う？  
小西 そらやっぱり、難しいいうで簡単なことや。食って生きるということと違いますか。食って生きていくことができるかできないか、それがすべてのもことや。

女でも自分一人で食って生きられるようになったら、何も言うことないですよ。食って生きられないから、いろんなこと言われて、それが女の美德やと思うて心を慰めて、それに従ってみたり、いやそんなことない、女も人間ですよと言われて、そうだそうだと言ってみたり、そうなるんじゃないですか。

六年前でしょうね。全共闘を含めてその辺から動きが変わったというか、全体としては変わってないけど、変わるきっかけみたいなものができたんですね。  
小西 幸いなことに、私たちはそれを



見せてもらえる時期に生きたということですよ。そういうの見られない時期もありますわね、戦前なんかもうだった。

駒尺 強い人が弱い人を征服していくというパターンの流れがちょっと変わった、そのきっかけは、何かしらね。

小西 やっぱ兵器やな。

駒尺 いや、ベトナム戦争じゃないかな。

小西 そりゃベトナム戦争やけど、全共闘の人たちというのは、民主教育を受けて大きくなってきたでしょう。生れながらにして、民主的な生活の中で生きているわけです。

編集部 全共闘の学生達というのは、昭和二十二、三年生れですね。いわゆる団塊の世代といわれている……。

駒尺 あの辺の人たちが、ファッションでも変えてると言われたでしょう。それまでは結婚すればおかみさんのものなんて買わないのが普通の生活だったの

たのが、団塊の世代が主婦になって、主婦だろうが買いたいものは買うという風になったんですね。喫茶店なんかも、所帯もちになると入ったりしないのが、平気で買物に行ってコーヒー飲んだり……そういうことをじゃんじゃんやる。

ファッションでも、ミニならミニがどーっとはやってたのが、この世代になって、ミニもはくけど、ジーパンも好きだし、何々も着るという、個性化してきたんですね。デパートなんかでも専門店を入れないと売れないみたいなね、そういう世代の落差が目にしたところですね。

編集部 それは個人主義の定着ということかしら。

駒尺 いや、いつも小西さんの言っている、"社会状態、経済状態がそれを支える"ということでしょう。

小西 高度成長で、家庭でも、言えば一億総中産階級でね、戦前やなんかと

違って、割合にのんびりした生活さしてもらってますわね。学校では男女共学でしょう。そしてきょうだいが少ないから、昔に比べて、何でも好きなようにできますよね。

私たちの世代はきょうだい五人が普通でした。だから、五人に好きなもの、買ってやろうと思ったら、よっぽどお金ないとできないですものね。

うちの父親なんかは下級官吏でしたから、一人子供を女学校にやったら、次のはもうやれない。上の子が卒業するぐらいになって、やっとその次がやれるという……。上の方から働かなかったらやっていかれない。戦前はどこの家もそうやったわけです。ところが今は、子どもが二人や三人になったから、できますもんね。

駒尺 二人か一人よ、今は。(笑い)編集部 一億総中産階級なんて言っても、今でも子供五人いたら、十分なことできませんものね。



## 高度成長は女の味方



駒尺 高度成長は悪玉みたいに言われているけど、女の状況でいうと、私の時代だと女の子が一人、家を飛び出して自分で働いて食べていくというのは難しかったですよ。

ところが今は、大都会だけですけれどね、とにかく部屋を一人で借りて、どこかへ勤めて、結構やってますよね、一人で。そういう状況ができたっていうことです。これがなかったら無理でしょうね、意識だけをどうこういって

も。

どん底でどうしようもなくなったら、生活保護で餓死しない程度なのは保証されているとか、母子家庭は多少にしろ住いなんか優遇されとかね、とにかく最低のものが保証されているという社会状況は大きいですね。小西 だから、すべての状況は食っていけるということに支えられているんですね。そのもとには、もう戦争が起きなくなったということがある。

さっきの核兵器のことだけど、結論的にいうと、アメリカが「力の政策」言うてますが、もうそれはできないんですよ。力の政策というのは、ブーメランみたいなもので、向こうへ放ったら自分の頭へ返ってくるんです。

核兵器がやっぱり一番大きな力やけど、ソ連にもあるからね、多少技術が遅れてるといっても、自分だけが相手をやっつけて、安穩に生きられる状況というのは、もうないんですよ。

うっかりしたら、まだまだ作る国が出てきますわ。何ぼでも、それ、どうするんですか。抑えられないでしょう、理屈はわかってしまってるんだから。

いま、アメリカで、ミサイルを撃ち落とす人工衛星みたいなもの作るいうて必死になっているんです。今はまだ失敗してますけど、万一できたとしてミサイル落としたりどこへ落ちるんですか。(笑) 我々の上へも落ちてくるんですしよ。ミサイルなんてそんなもの消



えるんじゃないんですよ、うち落としても。

駒尺 向こうも、そういうもの作る。

小西 だんだん日がたったら、作るからね。それとも一つ、私はね、米ソが対立してるとわあつと言われているのにね、のせられたらいかんと思うんです。裏では手を握ってるんですよ。

編集部 どういう意味で？

小西 経済の問題です。だから対立してやつつけおうて向こうを皆殺しにするなんて、あり得ることじゃないんです。

駒尺 経済というたとえは？

小西 小麦やとうもろこしですよ。アメリカの小麦やとうもろこしをあれだけ大量に買いつけてくれる国はソ連の他にないんですよ。

アフガニスタンにソ連が侵入したから、制裁しなきゃいかん、いうてね、小麦の輸出止めたでしょ。ソ連が頭下げてると思ったわけ。そしたら、ア

ルゼンチン、フランス、ドイツ、オランダ、カナダ、みんながソ連へ、買ってくれいって持っていくんですよ。

(笑) ソ連は金払うんですから。

アメリカは制裁したつもりが逆ですよ。売るとこなくなっただけです。困ったのはアメリカの方。だから、もう一度契約してくれいってやかましう言うていってやっと再契約ができた。(笑) 編集部 その一方で、レーガンはソ連はけしからんというのを大いに打ちだしているわけだから、困っちゃいますね。(笑)

小西 だから私は、それをみんなが考

えなきゃいかんと思うんです。なぜ、そういうことを言うかというと、票かせぎですよ。ソ連に小麦を買ってもらわなきゃ困るみたいなこと言ったら、国民が票をくれないと思うてる。アメリカは世界で一番強大な国なんだから、押えてやれるんだというところを見せてやらないと票くれないんです。

それで言うてるんだから、私たちがそれを知らない、ええ具合にのせられてしまう。いつでも、ソ連は怖いぞー、怖いぞー、何するかわからんぞ言われて本当だと思ったら大変なことになる。





## 変ってきた男の顔つき

編集部 この十年、そういう国際情勢の中で、みんなが食えるようになった、じゃあその中で、女の状況はどう変ったんでしょか。

駒尺 あんな大国に勝てっこないと思う弱者のベトナムが、とにかくアメリカを追いかけたという、それがね、弱者は必ず強者にやられるんだという論理をひっくり返したんですね。こういうこともあるんだ、逆転もあり得るんだということが全体を勇気づけたんですね。その波及で、弱いものもいろいろと芽を出してきて、それが「国際婦人年」とか「身障者年」とかに現れてきてますね。

弱い人の立場にたちましようとか、強者も弱者も対等なんだと言うのはモラルとしては正しいけれども、言うだけではそうはならないですよ。現実

は、残念ながら力の論理で動いてきた。それが、このところへきて、強者も弱者を無視してはやっていけないという状況がやってきたんです。

男と女の関係で言えば、この頃変わってきたなあと思うのは、スーパーへ買物に行く男の人の顔つきが違うのよね。体の姿勢がちがうというのかな、不思議なもんですよ。

小西 以前やったら、何となく女の人の中へ入って買うのが面はゆいみたいな、体のつきがそういう風な感じなんですね。(笑)

ちょっと後ろの方から覗いてみたり、そうかと思うと妙にぐっと前へ出ていたり、(笑) そういう入がものすごく多かったのに、この頃は男女とも同じ所に立って自然なかんじで買うようになったんですね。ここ一、二年

のことやね。人間ほど顔やら姿勢に気持が正直に出るものないですからね。

駒尺 本場に男の人の顔や表情が、女の人の買物する顔つきと同じになってきたわ。(笑) 今までは、女房が病気だから買いにきています、いう感じだったでしょう。

若い夫婦なんか、一緒についてきててもね、買ってる本人はこの女なんですよ、みたいな顔だったのが、ここんとこ、もう買物かごばつとさげて、物でも見比べてこっち行ってみたり、ぱっと私と顔がまともにあっても、何の抵抗もない自然な顔つきになりましたね。まったくこれは変ってきましたよ。(笑)

それからテレビ。テレビも害ばっかりじゃないと思う。テレビなんかで、本当は家ではしてないんだろうけど、(笑) 男の子がサロンエプロンして皿洗ったり、料理したり……。ああいうのを見せられるというのは、男が台所



## 主体的人間の出現

へ行くことを抵抗なくすることなんです。説教も何もしなくても、ビジュ

小西 こういうことは個人が変わるとい  
うことが大きな力にもなるけど、やっ  
ぱり大きな組織で大きく動かしていく  
ことと両方がないとね、だめなんやな  
いかと思う。国連の婦人年なんかでお  
尻をたたかれて動いてきている面も非  
常にあるわけですね。

それと、今の全共闘世代やもうちょ  
っと遅れた世代が漫画で育ったのは、  
大変よかったなあと思うんです。(笑)  
なぜかというと、漫画で育った子は自  
分でマンガかくんですよ。それは自分  
が、「参加者」作る人間になるという  
こと、つまり主体性をもつ人間になる  
ということです。

人が作ったものを見せてもらって、  
感心したり応援したり批判したりする

ンで見せるというのはすごいんです。  
十年前とは、全然違ってきました。

だけやなしに、自分が作る人間になっ  
てるんですね、今の若い人は。これは  
大きいと思いますね。

駒尺 それがね、全体を動かすのね。

自分が作る側に立つ、人が作ったのを  
見たり聞いたりするだけでなく。

小西 受身ですね、そういうのは。

駒尺 楽器の一つや二つは今の子では

## 杓子定規も悪くない!?

駒尺 何といっても、この十年の一番  
大きいのは、私ら女にとっては女性解  
放運動でしょう。ウーマンリブが日本  
に入ってきて、日本にも前からあった  
けど、世界的な動きとともに一時高ま  
りましたね。それが、今は運動として

きるし、歌でも自分で作詞作曲すると  
か、そんなのわりと平気でやるでしょ  
う。そういう底辺がざあっと大きくな  
ってきた。

小西 それが「主体的人間」ですよ。  
編集部 おもしろい！ 初めて聞いま  
した。

駒尺 私なんか全然音符も読めないし  
楽器もひけないし、音痴だし。だけど  
いろんな人が作詞したり、作曲したり  
そういうのを見ると、何となく自分も  
やれるんじゃないかという気になっ  
てくるんですよ。

は停滞してますよね。

だけど、さっき言ったように、じわ  
っと底上げされてきて、男の買物とか  
料理とか、いわゆる役割の固定化が動  
くような芽が、目に見えるような形で  
出てきているということです。それ



が、リブは嫌いだと言っている女の人や男の人も動かしているだろうと思うんです。全体として動いてる、たてまえとしても動いてるし。

お役所へ行ってわかるんですけど、この十年は、本音は動いてないんだけど、たてまえが動いたんですね。お役所のたてまえが動くということの意味はすごいですよ。

編集部 家庭責任を男も女も——あれは合意がたしかにあるのね。

駒尺 たとえてまえてだけでも、男女の役割固定化を打破しなければとか言う。あれは十年前にはなかったですよ。たとえば部落解放運動とかは、現実にはなかなか動かないけれど、たてまえは前からあったんです。

ただど女の運動は、たてまえすら通らなかったですよ。男の役割、女の役割それそのものが不平等なんだということは、たてまえが認めてなかったでしょ？ ところが今はたてまえが認

めたんですね。これはやっぱり大きいね。小西 それはえらいもんでっせ。役所の杓子定規のいいところなんです。杓子定規は悪い悪い言うけど、いいときもある。みんな一斉に動くから。

どんなことでもプラスとマイナスが裏腹にあるんですよ。ひつついてるんです。何かの目的でマイナスばかり宣伝されるでしょう、それにのってしまっわけよね。よくみれば片一方にね、プラスになるとあるわけですね。そこをうまく活用するのが、知恵ですよ。駒尺 やたら、役所がやることはと言っけれど、国際婦人年でも何でも、役所がやったからここまで浸透したんだと思うんだよね。もちろん小さいリブ



運動とか、目に見えないところでやっている人達が動かしただんだと思いますよ。国際情勢自体をね。それは忘れてはいけないけれど、そうかといって役所だけを目の敵にしないで、小西さんが言うように自分もそこへ入ってでも利用すべきですね。大きい力を持っていますよ、役所は。

小西 それと、はね上り、はね上り言いますやろ。そやけどはね上る段階通らなかったら、はね上って同じところこないんですよ。

駒尺 はね上る人がいたから全体も動いてきたんでね。



## 処女膜尊重から処女膜放棄へ

もう一つ、女の状況で動いたなあと思うのは、性モラルですね。これはやっぱりすごいわね。

もう、はっきり十年前は、いわゆる  
“女の貞操”でしょ、言ってみれば“貞操尊重モラル”。それがこの十年で、ひっくり返りましたね。もう、貞操なんて言っているのは、かって悪いという時代でしょ。前は処女膜尊重モラル、今は処女膜放棄モラルですね。(笑)  
これはすごいですよ、非行とかじゃなくて、普通の女性が、それこそ数を

こなさないとかっこ悪いとかいう、やっぱりこれはすごい。(笑)  
小西 まあ、その意味で対等になってきましたね、男の人と。そうなくてはいいかんし……。

今まで社会の構造は、タテ構造だった。タテだから、弱肉強食みたいになるでしょう。ずうっと何千年もの間、下のものが出てきては、上のものをたたき落していく。そのくり返しです。  
結局いつでも強いやつが上になる。あんまり同じことをくり返しているん

じゃあ、人間として恥ずかしいんじゃないかなあ。それがわからんといかんのじゃないかしら……。

横には並べないのか、どうしてもタテでないと生きられないのか、これから私たちが一番考えていかなくてはならんのは、こういうことやろうね。

(まとめ・山本雅美)





投稿ホットライン——笑う門には福来たる

# ファミリー・イン・ブルー

知に働けば角が立つ。情に棹させば——ああしんど！

## 核家族こそ最高

N・M



心に溜めて溜めて溜め込んでの生活、吐き出す場がないので少々疲れが出て来たようだ。まわりにいる誰もが幸福そうで楽しそうに見える……。『みんな同じよ、苦勞つてあるものよ』なんて言うけれど、実に甘っちょろいと思は思ってしまう。出来る事なら、三人の子どもを連れて、今すぐにでもこの村からこの家から飛び出したい心境だ。さすがに実行までには至らないが、毎日言いたい事の半分も言えず、持ち前以上の努力の連続の生活、ただ子どもと自分の事だけを考える、そんな生活がしてみたい。

何も考えなしに、田舎のふるくさいしきたりの残るこの土地に入ったのが、そもその間違い（とは思いたくないけれど）のようだ。わいふ片手にまる七年、「これでもか！これでもか！」と、泣き虫でがまんなんて出来る性格でない私の、必死の努力だったのでは……。ノイローゼ風になり、姑に勤め



をとりあえず休んでもらい、しばらくは私がアルバイトに出させてもらった事もあった……が、義姉・妹の「おかあさんたちが幼い子どものお守りは大変、大変よ」とそればかりで、かえってこちらが気がひけるばかりだった。

「保育所に入れる」と私が提案すれば、姑の孫可愛さに「そんなにしてまで働きたいのか」とののしられる。姑と何度口論したかわからないが、やはりい子ぶる性格は変わらず、反対してまではないれられないと思い断念した。

私は子どものことは親が見るほうがより良いとは思っているが、それよりも、舅と朝から晩まで生活をともしているのが重荷だった。六十五歳という若さで、これと言った趣味もなく、食べるだけが大好きな人なので、うっとうしい存在だ。それに、根本的に尊敬できない考え方を持っている。主人は結婚当初から、長期の出張で月に二、三回しか帰らない。

私は今、三人目の長女を出産と同時に、家事、育児に専念している。また、姑のほうは勤めに出ている。思いきり思う存分に勤めに出られる姑と、思う存分に育児ができる私は、他から見ると理想にうつるらしい。事実、お盆、お正月と、のんびり過ぎ義姉妹たちからは、何も言われなくなった。ただ「今後は働きに出る必要がない」「四人目など産んだら、父、母がいつまでもゆっくり出来ない……」と言う。

口論したら、おしまいと思っている私だが、「やるだけの事は全部しているのだから、口出してはしくない」とはっきり言える、悪っぽい（私から見ると）女性になりたいものだ。時々、テレビドラマだったら、この辺で爆発して、木枯しの吹きすさぶ中を、子ども三人連れて飛び出して行くだろうと苦笑しているが。こんな時はこの家の長男であり、私の主人である人が期待されるところだが、最近は大変評価し

ている事がわかった。信頼はしているが、私の切実な悩みは、主人の悩みにはならないようだ。

外で大いに発散してくる姑とは、特別な事以外は、口論もなく、ありきたりの平和な会話をしている。

私は子どもが一番可愛い。舅、姑もまた、血のつながっている孫たちが可愛い。唯一の救いが子どもだ。これじゃなかったら、とっくの昔に自由にこの家を飛び出しているだろう。性格の違う、年代も違う人たちが、同じ屋根の下で毎日生活をともにしているのだから、意見の相違があっても当然だが、自分の一生、自分の思うままに歩んでみたかった。勉強、勉強と思っではいる、経験しない人より、少しは成長の糧になるとも思っている。それでも、核家族は最高だ、とこれが私の本音なのだ。

（え・万谷陽子）



投稿ホットライン——可愛さ余って憎さ百倍

# うちの悪ガキ

うちの子に限って！の大集合。汝の敵を愛すべからず……

## ハンバーグおじさん

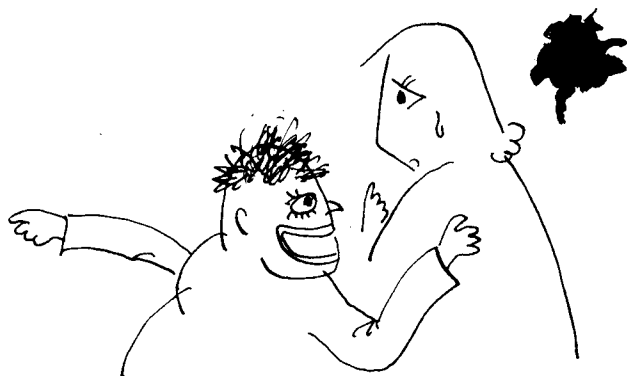
T・Y

久しぶりに長男と一緒に電車でデパートに買い物に出かけた。五歳の息子は特にわがままもいわずよく歩いてくれた。いまは怪獣の玩具を胸に抱き、電車の座席に腰をおろしておとなしくしている。

この地方の私鉄は窓を背にして座る型式が多い。所謂通勤用車輦である。

立っている人もまばらで静かな車内。ふと長男が言った。「あのおじさんハンバーグみたいな顔をしている」

長男の視線を目で追うと、ななめ向かいの席にまさにハンバーグそのものの、こげ茶色の皮膚にブツブツとした穴、おまけに頭にはえんじ色のハンチングをかぶった六十歳くらいのおじさんが





いた。おそらくその帽子は、あたかもハンバーグの上にかけてケチャップのごとく、子どもの目にうつったにちがいない。

まさにハンバーグそのものだ、と感心していると、またもや長男は大きな声を張り上げた。「ハンバーグみたいな顔でしょう、お母さん」

子どもをおもちの人なら誰しも、こんな恥ずかしい思いをしたことが、一度や二度はあるだろう。そして多くの場合、親が何か返事をしなければ、くどいほど同じ言葉をくり返す。我が子も例外ではない。ハンバーグおじさんにしっかり聞こえる声で、四、五回言っただろうか。

周囲の人全部が私たち親子に注目しているのがわかる。隣の女子高校生はうつむきクスクス笑っている。

（一度目の時、小さく返事をしてあげばよかった）後悔しても遅い。子どもの声が際限なく大きくなるのを懸念し

た私は、意を決して口を開いた。喉がカラカラに渴いている。

「そうね、本当にハンバーグみたいね」  
勿論、子どもだけに聞こえる小さな声で。

緊張感はいっきにとけたが、今度はハンバーグおじさんの反応が気になる。ただとても彼を見る勇氣はない。腋の下を汗が一筋流れた。私たちが降りる駅まではまだ十以上の駅に停止しなければならぬ。

（私たちより早く彼が降りてくれますように）心の中で祈りながら、石のようにジツとしていた。幸いなことに彼は私たちより先に降りた。子どもの顔をジツと見つめて……。

「おじさんの顔はそんなにうまそうか」ということばを残して。

ハンバーグをつくる度にあのときの光景を思い出す。

（え・万谷陽子）





春が待ち遠しい。今日はこちらか

四人分向い合わせの座席が、いかにも遠く  
らしくて心が浮き立つ。四十五分ほど、中

若木  
菊枝

☎ 0466(22)8114





# 子連れ遊

学の修学旅行で見た大船観音が見えてきた。あと五分で藤沢駅。ここからは小田急に乗りかえて、終点の片瀬江の島駅で降りてみる。

ア、海が見える。広いな。子育てに追われる我身には何ともいいようのない解放感。まだ二月だというのに、サーフボードで波乗りに興じるヤングが結構いる。元氣いいな。我々親子は、砂浜をはだして散歩。気持ちいい。国道の向こう側に江の島水族館がある。入ってみよう。入園料が少々高いなア。でも今日はフンバツノ

うす暗い水族館に入って、子供達はびっくり。大きな海ガメが水槽を泳いでいる。

次はマリンランド。体長七メートルのシャチが、飼育係の人にタワシでゴシゴシ体を洗われていた。気持ちいいのか、頭の上にある穴が開いて、ゴーというなり声？（クジラなどについている塩吹き穴——実際は、人間の鼻にあたり、呼吸しているんだって）をたてている。

最後に、海の動物園。大きなアザラシのはくせい。すぐそばに、「赤ちゃん時代には、

哺乳動物用粉ミルクを、哺乳ビンで飲ませて大きくしたアザラシもいる」と書いてある。ショーを見て、三館の移動を含めて二時間程度で見て回れる。

帰りは江の電に乗って、鎌倉から帰ることしよう。

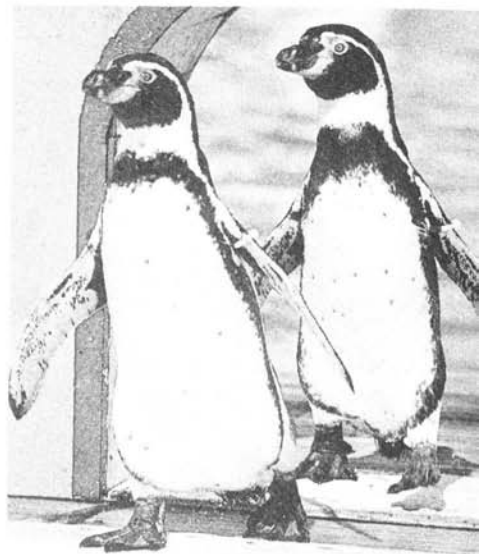
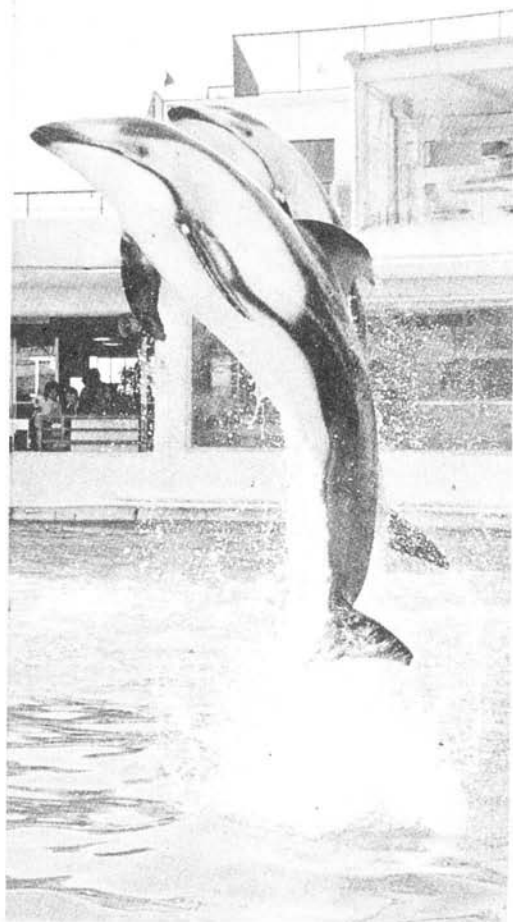
タクシーで江の電江の島へ。子供が大きければ、ブラブラ散歩もいい感じの所だ。

江の電、昔なつかしい都電型電車。二両編成で、路線は確保されているから結構早い。海が見えたかと思うと、今度は民家の庭の中間を走っているような錯覚におちいる。沿線の民家の低い塀すれすれに走り、電車の両脇から庭木が迫る。かと思うと、今度はトンネルだ。

いろいろと変わる車窓に見入っていたら、二十五分の脱都会の旅も、たちまち終点を迎え、江の電鎌倉に到着。

娘達よ、大きくなったら、鎌倉周辺も一緒に歩いてみたいネ。





## ●江の島水族館の案内

所在地

神奈川県藤沢市片瀬海岸二

一七一二五

電話番号

〇四六六(二二)八一二

入園料

大人・千四百円 中学生・千

百七十円 小学生・七百元

三歳以上の幼児・五百円 そ

れ以下・無料

休園日

十二月三十一日以外無休

開園時間

九時三十分～五時三十分。た

だし冬期は五時閉園。

駐車場

専用はなし。近くに二時間ま

で四百円程度の駐車場あり。

交通

小田急線片瀬江の島駅から徒

歩三分。江の電江の島駅から

徒歩十五分。湘南モノレール

湘南江の島駅から徒歩十八分。

見学できるもの 水族館で魚のショー、

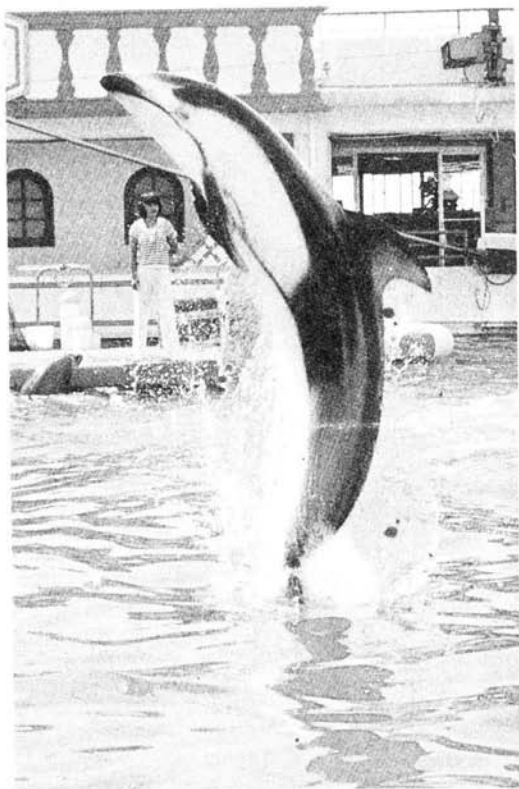
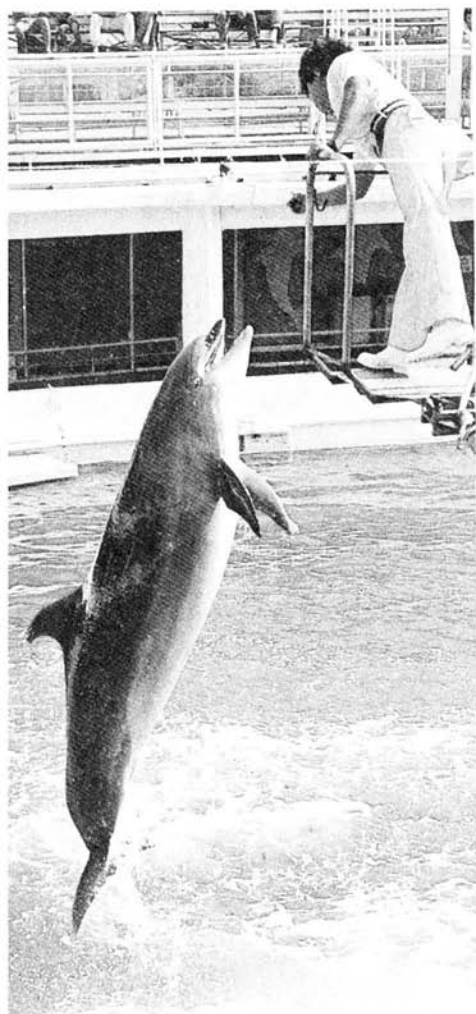
マリナランドでイルカショー、

海の動物園でペンギンとアシ

カのショー。時間が決まっ

ているので、入口で調べるこ





#### 季節

館内見学だけなら四季いつでも。すぐ目の前が湘南海岸なので、水遊び後寄るなら夏期。都会から離れて、目の前に海がある解放感。

#### 子の楽しみ

水槽やさぐが低いので、真近に本物の海の動物が見られること。(手が届くので注意も必要)

#### 食事

マリナランドに喫茶室、食堂がある。各館見学後、外に出られるので、館外でもOK。三館それぞれに一、二カ所あるが、赤ちゃん用のベッドがあるトイレは一つもない。

#### トイレ

困ったこと 三館が離れているので、小さい子はおんぶかベビーカー利用がよいかもしれない。

ショーは楽しいが、よほど動物好きでなければ小学生以下には不向き。三館の料金がセットされているので、見たくない所がある場合、もったいない。



投稿ホットライン——三度のメシより本が好き

# 生きてます 活字人間

——目の鱗、落としてますか？

## 「女の立場から医療を問う」

子宮をとりたがる産婦人科医たち

中村智子 著

東京都多摩市 原田 静枝

子宮筋腫がにぎりこぶし大、小児頭大になっていた、という話を聞いたことはあったが、子宮のどこがどんな状態になるのか、恥ずかしながらこの本を読むまで知らなかった。友人たちにこの話をしてみると、「へえ、筋腫ができた子宮全部の大きさをいうの？」などと驚いていたから、どうも無知なのは私だけではないらしい。

子宮筋腫は女性の十人に一人ぐらゐの割合で発生し、四十代で発見される人が半数、次が三十代、

閉経するのとまって小さくなるといわれている。ところが、にぎりこぶし大、以上の子宮筋腫は無症状でも手術する、四十歳代なら筋腫手術といっしょに卵巣もとる、というのが産婦人科医の常識だという。なぜならば、子どもを生み終えた子宮は不用のもの、なまじ体内に存在するがためにがんの心配がおこると彼らはいう。そう産婦人科医の大半は男性なのだ。

過多月経、月経痛、貧血などの症状がひどければ手術もやむをえないが、子宮筋腫は子宮がんと直接結びつかない。はやまるな、と教えてくれるこの本の著者中村さんは、地域の子宮がん集団検診で子宮筋腫をチェックされ、A病院長から「すぐ手術しなさい」と言われた。しかし運よくB病院を紹介されて、結果的には子宮摘出をまぬがれたが、その間に経験した



医師への疑惑、家庭医学書に対する不満・不信から、「患者の立場で勉強して子宮筋腫の本を書こうとおもった」という。

実体験をふまえてのルポは充実し、不明の点が次々と解き明かされていく。それが中村さんの足をアメリカで開かれた国際産婦人科学会にまで運ばせ、もちろんあの富士見産婦人科事件にも目を向けさせる。

彼女の子宮を守った医師はこう言っている。「子宮がん予防のために子宮をとってしまえ、というのは、胃がん予防のために胃をとってしまえ、という議論と同じなのだ」と。

また富士見事件を支援している一女医は、「子宮筋腫をそのままにしておいたらどうなるか、いまのところまったく研究がなされていない。男に子宮筋腫があったと

したら、もっといろんな研究をやって、すぐとれ、なんていうことにはならなかったと思う。私もいままで手術の適応基準について、男の考え方でめりこんでやってきたけれど、あらためて考えてギョツとした」と語っている。

出産数が減って産婦人科医の経営は苦しい。高価な超音波断層装置を使って診断し、患者のためを思ったらとらなくてもいい子宮をとって、手術の数をふやしている。そのための後遺症など、彼らにとっては痛くもかゆくもない。

「子宮は女性のシンボルだって？」と嘲笑する医師の多いなかで、女のための医療を日夜考え続けている良医がいる、とわかったことは本当にうれしい。

余談になるが、私は取材先で偶然この本を見つけて読んだ。これにせひ、WIFEの読者に知ら

## 中村智子 女の立場から 医療を問う

子宮をとりたがる産婦人科医たち

子宮筋腫は35歳以上の女性の五人に一人といわれ、生みかえた女の子宮・卵巣は、いつか、がん予防のためにとつてあける（ある家庭医学書の著者八井の語句のこぼれ）と、医師といふは手術をせよ、せよの常論とされている。そこには、手術後の後遺症への配慮も研究も、ない。子宮がん集団検診の日から始まる「子宮・卵巣全摘」手術の体験を通じて、富士見産婦人科事件を生んだ産婦人科医のあり方、女の立場から徹底的に問う。注目書！

せよう、とこれを書いているとき知人からの電話が鳴った。「おなか痛むので病院にいったら子宮筋腫だったの」という。驚いた。まさかこんなに早く役に立つとは思ってもいなかった。もちろんすぐ手渡した。

知人は徹夜でこれを読み、翌日中村さんが「信頼する名医」と書いておられるB病院に飛んでいき診察を受けたという。いま彼女は

そこに入院し、数日後に受ける手術に備えて体調を整えている。彼女いわく、「突然の宣告は非常なショックだったけれど、この本を読んで子宮筋腫がわかったし、何より素晴らしい先生に執刀していただける幸運にめぐり合えて」と、とても喜んでいる。

田畑書店 一五〇〇円



# 「南フランス中学校日記」

鹿住釈子著

東京都町田市 宮前 和

十日前に「ママのわがまま留学」(冬樹社)を図書館のそばの古本屋で買った。

食へ終えるのが惜しいお菓子のようにかじりかじり読んだのに、一冊はすぐに終わってしまった。

続篇があるときいて、事あるごとに本屋をのぞき、やっと手に入れたのが昨日、この本である。通勤のラッシュにも負けずにひらき、駅のホームで待つ間にも頁を繰って読み終えた。面白かった。

自称くたびれた中年の主婦である著者が、「およそ二十年間の潜在的脱出志向と自由への尽きぬ憧

れ」を抱いて、南仏に渡るまでの経過は圧巻である。

十六年勤めた教職を退き、バセドー氏病が完治しないまま、当時九歳だった息子、卓君をつれて留学にふみきるくだりは感慨無量である。

思えば私たちにもこんな気持はなかったか。日々の暮らしに埋没してはいるが、「手に入らないものに片っぱしから憧れ、縁もゆかりもない境遇を夢見るのは、あながちだっつ子気質とも、またロマンチストとも限らない。現在ある自分に自信が持てない時、ふんだ

## 南フランス 中学校日記

鹿住釈子



んの夢でガードを固めて何とか生きていく」ことはないだろうか。人なら誰しも抱くであろう夢と希望を、著者は見事に現実にも引きおろして、自分の体内にとりこんでいる。小学校を三年生で休学させた卓君を、「緊張とも恐怖ともつかぬものが身体中を貫き、涙がこぼれそう」になりながら、一緒に連れて行ってしまおう。

そして、フランスに着いてからは彼の思わぬ大活躍がはじまる。小学校、遊び仲間、子どもたちの暮らしふりをとおして、著者は驚きと発見の連続である。私たちが抱いていたフランスのイメージが崩れ去り、しだいにフランス人の生活観、人生観があらわになっていく。

そこで著者はハタと考えこんで



しまうのだ。なぜ日本とフランスでかくも違いがあるのか。

はからずも卓君はブリズムの役目をはたしている。様々に屈折する光を受けとめて、著者は自問自答する。そのつづきやきは、私たち日本の主婦に共通の切実な問題である。

用心棒兼友だちとして犬を飼い、息子の学校をとおして知人を作り、生活圏をひろげ、自分の生きる道を模索していくこの本は、一人の女の深い旅立ちであると共に、すぐれた教育論・文明批評となっている。

著者の専攻するフランス中世文学とのかかわりには言及されていないが、次のステップへの期待を持たされる。

「ママのわがまま留学」とあわせて、ぜひぜひ一読をすすめたい。

毎日新聞社 一二〇〇円

## 「主婦的話法」

伊藤雅子著

宮城県仙台市 大島 真理

日常のさりげない暮らしの中から、宝石を沢山拾ったような言葉を残してくれる本である。女の自立、心のあり方を、大上段に構えた本

ではない。筆者は、自然と心に沿う文章で、それらを言う。自立と孤立とは違うこと。「自立する力というのは、人をた

っぷり愛することのできる力であり、ひとつの優しさだとも言えるでしょう。か。相手を自由に解き放ち、伸ばし、その関係を築くことのできる人間の力量、そういう力を養っていくのが、自立をめざすことだと思うのです」

『主婦的話法』というタイトルは、主婦のおかれた社会的に貧しい状況が、言葉をも規定し、ひいてはそれが、思考までも限定していくことへの問題提起であるという。この状況を回復してゆくのは、豊かな人間関係を持ち、互いに培ってゆく心の結びつきであることを、この本は教えてくれる。

心の行き届いた贈り物をしてくれる友人、悪口美人の友人、様々の心配りが、その人たちの話す言葉が、生への大きな力になってくれる。ちょうど読んだ田辺聖子さんの「ダンスと空想」にも、仕事

を持ち、素敵な心意気を持った神戸の女たちが描かれてくる。共通していたのは、人間を豊かにするのは、やはり関わる人、人間の豊かさだと思う。

老いのことでも、ボーヴォワールの『老い』からの引用があって、今を生き得なければ、貯蓄や、隠居所や趣味は、何の役にも立たないだろうと。結婚する以前の生を、飯のように思っている人が、いい結婚生活、ひいては充実した人生を送れないのと同じように、今を生き急いで、老後の心配をしたとて、いい老年を迎えられない。女の置かれている状況を考えるのに、とてもいい本だと思う。

未来社 一三〇〇円



# 「竹の家の人々」

木村梢著

東京都世田谷区 和田 好子

「おせん」「お伝地獄」「歌麿をめぐる女達」など、江戸時代に材をとった艶麗な大衆小説で、一世をふうびした邦枝完二。この大流行作家は、今では忘れられているように見えるけれども、五十歳以上の人の心には、美しい幻想を残しているはずである。

この作家には二人の娘がいて、長女の梢さんがこの本の著者なのだが、彼女は人も知る俳優木村功氏の夫人、亡き夫君の思い出を書いた、「功、大好き」はベストセラーとなった。幼いころから作文がとくいで、父完二氏から作家に

なれとはげまされていたという。しかし文化学院美術部を卒業、結婚生活に入ってその道を歩むことはなかったのだが、夫と父というもっとも身近かな男性の生き方を書いて、今や親ゆずりの才能を発揮しつつあるようだ。

・竹の家の人々・は、はなやかな流行作家の私生活を描いて、同時に現在にもあてはまる、男と女の結婚の実像……依存する女のよわさ、支配する男の強さ身勝手さ、そしてその強い男もまた傷ついていくという、悲しい実態を浮かび上がらせていく。社会的に許容さ

れている一夫多妻。赤坂の芸者を囲い、熱烈な恋愛結婚をした美しい妻を、狂乱におとし入れる夫。しだいに常軌を逸していきながら離婚は考えられない、生活力のない妻。争いのはざまで娘もまた、心の痛みにぜん息の発作をくり返す。しかしこの夫婦は、美男美女の外見はつり合っていたが、そもそも心のつながりのない、相互理

解を欠く間柄なのである。なぜ二人は恋におち、結婚したのだろうか……愛とは？ 結婚とは？ 古くて新しい問題提起をしている一方、戦争ですべてが破壊される以前の、江戸文化のなごりをとどめた東京の生活が、美しい夢のように描写されていて、古い映画を見る楽しさだ。

リビングマガジン 一二〇〇円



木村梢

父母の葛藤。

『功、大好き』

瀬戸内寂聴

氏絶賛！ 生涯の念入  
木村功の別れの境  
作家の魂を揺るがす  
に挑み、必死の書  
今初めて取り返す。竹  
の家の争い時代。



# 『人間』をさがす旅

青木悦著

東京都新宿区 丸山友岐子

昨年二月、中学生たちがいわゆる「浮浪者」と呼ばれる人びとを「面白半分」に襲い、殴り殺すという事件があった。

『婦人民主新聞』の教育担当記者だった青木悦さんは、ちょうど事件の起こった日、別の取材のために寿町を訪れていてこの事件を知り、からだがふるえるようなショックを受けたという。

青木さんの「人間」を探す旅がはじまる。彼女は、自分の仕事を離れて、しばしば寿町をおとずれ、事件の「現場」を歩き廻り、いたるところで「人間の匂い」に出合う。この「匂い」は必ずしも嗅覚に「快い」「匂いとはいえない」

汗とはこりと風呂に入らない男たちの集団が発する「匂い」は、防臭剤によって、ありとあらゆる「匂い」を消してきた彼女の日常とくらしのありようを考えさせる。

戦後に生まれ、日本の経済復興と高度成長の歴史とともに生き、家庭を持ち、一児の母となった青木さんは「豊かで清潔なくらし」こそ、人間的な生活なのだ、としらずしらずのうちに受け入れ、防臭剤で匂いを消す暮らしのように疑問を抱いたことはなかった。生き物として人間が自然に発する匂いすら「くさい、キタナイ」と排除してきた日常性のなかに、こういう「事件」を起こさせる「根」が

胚胎しているのでは……と彼女は考え始める。

そして一年。このほど民衆社から中学生向けシリーズの一冊として出版された『「人間」をさがす旅』は、中学生の「浮浪者殺傷事件」とはいつた何だったのか——という問いかけからはじまる、著者自身のすぐれた心象の記録でもある。

著者の「眼」と「感性」を通して、わたしたちはもう一度、一年前の事件に出会い、新聞報道だけでは知りえなかった「事件」の現場へと連れて行かれる。事件を起こした中学生たちは、果たして「特別の」少年たちだったのだろうか？ 学校は？ 家庭は？ なぜこの豊かな日本に、寒空で野宿しなければならぬ人びとがいるのか？ それはどういう人びとなのか？

中学生たちの集団的な暴力行為は、便利で清潔で豊かな生活を追及するあまり、わたしたちがこそげ落としてきたものの投影にほかならない。

淡淡とした平易な語り口で、著者は力んだり論評したりはしない。ごく普通のひとりの働く女であり、主婦であり、母親でもある女が、なぜ、中学生が浮浪者を……という疑問から出発して、初めはおらずと寿町に足を運び、そこでいろいろな人びとと会い、語り、見、感じるなかで、新たな自分自身とも出会うのである。著者は、この事件の追及を、しらずしらずのうちに喪失させられていた自分の「内」なる「人間」を探す旅だったという。

民衆社 九五〇円



# オットどい

粗大ゴミ予備車の生態記録をとろう！

## 夫の存在と読書の関係について

F・M

まず前提として家庭の現況を述べる。結婚歴二十五年目、夫と二人の年齢合計が百歳になるところ。子ども二人は学生で共に下宿し週末になると現れる。

もともと本は一人で読むものにきまっています、考えの流れとか連想とか、感動の程度とかも一人のものだ。だから一人で落着いて家に居る時間があれば何も問題はない。ところが私はそういう時間がみつけれない。

夫は職住接近で朝は割合ゆっくりだし、昼食には原則として家へ戻ってくる。私は自分の小遣いのため午後半日働いているから、午前中に全部つめこんであるのだ。たとえ形ばかりでも、掃除、せんたく、買い出し、ご近所との間で生ずる最小限の用事、趣味の集まり、歯科医の予約……等々。だから本を開こうと思うと、夕食の後片づけがすんでからとい

うことになる。ところがこれが読みにくいのだ。

夫は音楽ファンでたいてい何か鳴っている。広い家でもないから隅の方で読んでも音楽は聞えるわけだ。それに夫が話しかけるのだ。それもさしたる用事でもないと思うのに。返事をしようとするれば本はおるすになる。また、背表紙をのぞきこんだり、何を読んでいるかたずねることもある。トイレから戻ってくると、夫が私の読みさしの本をひっくり返しているのはしょっちゅうだ。こうした振舞いが気になりだすつくづく読みにくいと思ってしまう。それでつい記事の短い雑誌、あるいは短篇集、さもないければよほど牽引力のあるミステリーを選ぶがちになる。

多分私はもう少し平然と夫の面前で本を読みさえすればいいのだろう。きらいなことはいやだと相手に言えはいいのだろう。たとえば夫に経済的に依存しているとしても、心の奥底まで明け渡す約束をしたわけではないのだから。それにしても日常的に「突っ張って」暮そうとするとシンドイだろうなと思う。



## テーマ原稿募集

●一八八号の特集テーマは「私の育児ノイロ―ゼ」に決まりました。埼玉県のある公民館で、一月ほど前、ゼロ歳から三歳までの子を持つ若いお母さんに、しつけについてのアンケートをとったところ、三歳児の母親では「諦めている」と答えた人が最多数だったそうです。三歳にしてもはや、自分の手におえなくなつた、という実感らしく、これにはびっくり仰天ですが、逆にいえば、現代の母たちはそれほど孤立無援、なすすべもなく子供と二人、家の中に閉じこめられているわけです。

昨年秋に予告した「働く母の捨て身の子育て」の懸賞論文には、三月十五日現在、ついに一通の応募ありませんでした。へいわふVとしては無い袖を振って懸賞金を出す覚悟をしましたのに、何ということ、しかし裏を返せばこのことは、自分の子育てを語るほどの自信のある母親は一人もないという

ことなのかもしれません。

この反対に、ノイローゼ的育児をしているママはどうも大変多いらしいのです。

ずいぶん前に、横浜の井上桂子さんの双子の子育て記録「さくらんぼの歌」が大きな反響をよびましたが、みなさんそれぞれ、苦しかった子育ての記録を心の中にお持ちと思います。どうかふるってご投稿下さい。

枚数は十五枚から二十枚。(それ以上ですと持込み原稿扱いになります) 締切は四月二十七日です。

### お友達に(わいふ)を

### おすすめ下さい

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。

(六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります)

### わいふバックナンバー

- 174号 主婦の再就職四五〇円以下同じ
- 175号 子どもたちの心がこわれてゆく
- 176号 わたしの恋愛体験
- 177号 肉親の老いを見つめる
- 178号 女・からだの履歴書
- 179号 成功したしつけ・失敗したしつけ
- 180号 父親はほんとうに必要なか
- 181号 PTA・その苦しみと楽しみ
- 182号 家においてできる仕事
- 183号 女の言いたい放題
- 184号 私の災害体験
- 185号 私の親ばなれ闘争記
- 186号 お医者さんを診断する

送料は一冊二〇〇円、二冊三冊二五〇円、四冊六冊三〇〇円、七冊九冊まで三五〇円です。十冊以上は編集部で負担致します。ご注文は編集部へどうぞ。

(〇三) 二六〇一四七七



私立高校あらかると

# 独立王国の二年間

—— 聖パウロ学園高等学校（東京・八王子） ——

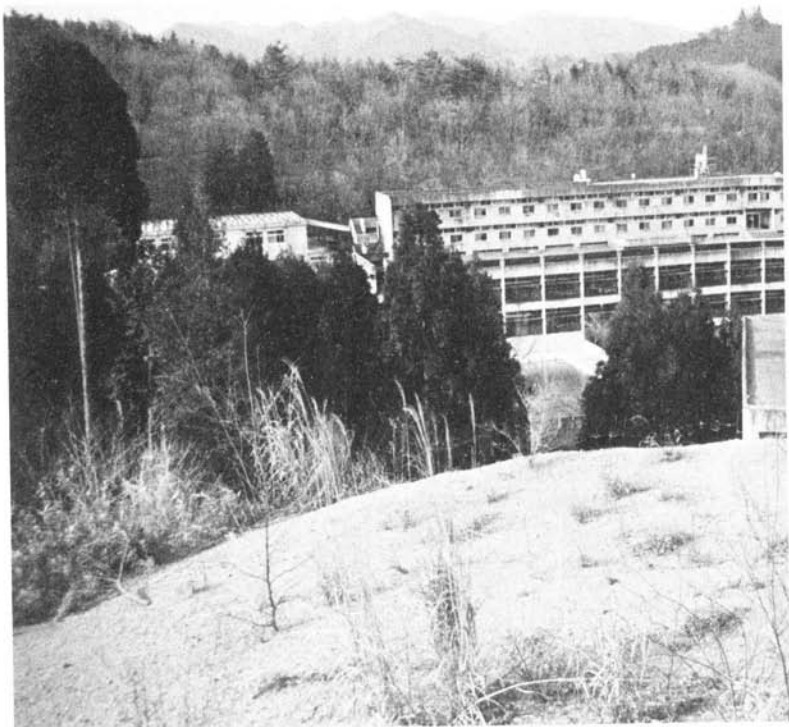
文・早川 裕子

写真・長野早紀子

東京都の西のはずれ、高尾山と陣馬山の間の山林を切り拓いた広大な敷地の中に、ユニークな全寮制の男子校があることは、あまり知られていない。







山の中に姿を見せる聖パウロ学園



学園の山道に立つマリア像

その名の示す通り、昭和二十三年に赤坂に創立した当時は、修道会に入る神父たちを養成する目的だったこの高校は、三十五・六年から一般生も受け入れるようになり、十二年前にこちらへ移転して、全寮制学園として新発足。今や大部分が一般生で、その全員が大学進学希望者である。

いまも、各学年四、五人の修道会志願者がいて、そばに併設されている修道院に寝泊りし、その印刷工場で働くなどの任務を課されているが、大多数の一般生にとって、ここは何とも行き届いた勉学の場なのだ。



## 学校イコール寮

この学園のユニークさは、まず、寮と校舎がいっしょになっていて、学校生活すなわち寮生活となっていることであろう。

五階建の建物は、一階が職員室や事務室、二階は食堂、三階が教室、四、五階が寮という構造で、生徒たちは一日のうち何度も自分の部屋と教室の間を行き来している。こんな構造も、校長先生にとっては修道院と同じで何の不思議もないそうだが、教頭先生以下は、信者でもない、若い先生が多い。

職員室の構造も変っていて、まん中が広いロビーのようになっており、その周りを先生方の個室が囲んでいる。そのロビー式職員室は明るく解放的で、半てん姿までまじった、さまざまな服装の生徒たちが自由に出入りしている。彼らは、若い、これまたラフな身なり

の先生たちと並んでソファアーにすわったりしているの、一見、先生と生徒の見分けがつかないほどである。

訪れた日の昼休み、この職員室では先生方が輪になって、卒業式にうたう歌の練習が行われていた。

## ベルのならない授業

全寮制の学校のメリット、それは、イギリスのチューター制のように、徹底した少人数教育で、時間を有効に使って行き届いた面倒が見られることであらう。

この学園では、一学年五十四名を三つに分けたクラスで授業。海外帰国子弟も多いので、そのニーズに合せて、十年ほど前から英、数、国は習熟度別授業を行なっている。といっても、学校側が生徒の能力を測ってクラスを分けるようなやり方ばかりではなく、生徒の希望によって、自分に合った講座

を自由に選ばせる方式もとっている。生徒に任せても、結局妥当な線に落ち着くということだ。

ホームルームに当るものは、ファミリーと称して、各学年四、五名ずつのたて割りで作られている。そのファミリーに一人ずつのチューター（先生）がつき、学業から生活面まで、細かい指導に当たっている。

どの科目も毎時間小テストをして、それは、職員室前にズラリと並んだチェックボックスに、細かく分類して保管されている。チューターはそういった資料に目を通して、自分のファミリーの生徒たちに勉強のアドバイスをしたり、生徒に日程表をつけさせて日常生活面にも気を配ったりしているわけである。

午前中は普通教科だけで、午後は、体育、芸術、実験、ゼミなどがたっぷり時間をかけて行われ、終業のベルは鳴らない。四時から六時までに自由に





渡り廊下



先生方は合唱の練習に忙しい



職員室（左から二番目が生徒、あとは先生）

## 食事は制服で

入浴し、夜や早朝の時間を利用して、補講や受験指導が行われることもある。

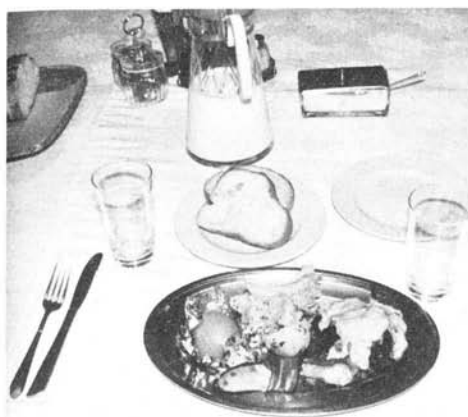
ふだんは全く自由な服装の生徒たちも、食事の時は三回とも、制服を着用しなければならない。昼食時にちよつとのぞいてみたら、何とみんな赤いワイシャツに黒のブレザーであった。髪形などはうるさくいわれないので、長髪の子も多く、一見女の子みたいに見える子が何人か目につく。

この日のメニューは、生鮭のペーコン巻ソテーにホワイトソースをかけたもの、つけ合せはほうれん草のソテーとポテト、缶詰の桃、それにパンに牛乳と、食事もしっかり洋風だが、今の若者たちにはすなりと受け入れられているようで、静かで和やかな雰囲気の中でナイフとフォークをせっせと動かしていた。食事の時はファミリー単





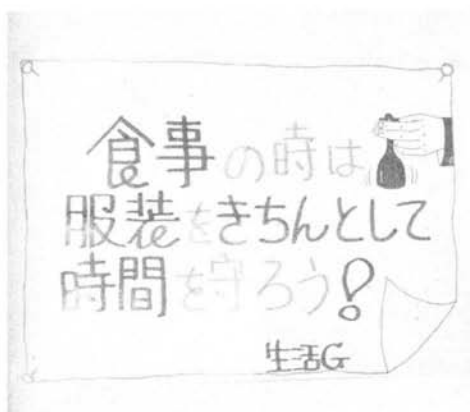
昼食中の生徒たち



ある日の昼食

位で席につくのだそうだ。育ち盛りの子どもたちには、このメニューでは少なめのようなが、夕食はもっとボリュームが増えるということだ。

ところで、なぜ儀式のときのみならず、三度の食事のときにも制服を着なければならぬのか？ この部分はどうか、食事を一種の儀式として盛装して摂った、修道会の伝統が守られて



食堂の廊下のはり紙

いるらしい。もちろん、先生方も食事時はネクタイ着用でなければならぬが、ネクタイ嫌いの教頭先生は、近くの御自宅に食事をしにお帰りになるそう。こんな一面が、修道院のついた学校というイメージからちょっとずれた、明るい爽やかさをこの学校に吹き込んでいるようだ。



## ラジオも漫画も禁止

こんな恵まれた環境の生徒たちにも不満はある。間食が一切禁止、ラジオやカセット、漫画、週刊誌の持ち込みすべてダメという規則である。音楽室でならレコードをきいてよいそうだが、一台のステレオでは順番待ちになる。

何しろ人里離れた山の中腹に建っている学校である。校舎を一步出れば、小川の流れた森の小道が続き、或いは道なき道をよじ登ってやっと校舎の上方の台地なる運動場にたどり着くという具合。空気はあくまでも澄み、環境は抜群ともいえる。だが、この中でずっと暮らしていて、部屋の中でラジオも週刊誌もダメとなると、ちと世情にうとくなりはいないかという老婆心から、その辺の事情をたずねてみた。

副校長は、こういうものを認めだすと歯止めがなくなり、寮の中に貧富の差

ができてしまふとおっしゃり、教頭先生は、物質万能の世の中に対する批判の意味でも、ここではこの生き方を強要したいというお考えであった。

なるほど全寮制なるがゆえに、引いておかねばならぬ一線とも考えられるし、こういう環境の全寮制校だからこそ、こんな生き方を押し通すことができるともいえよう。

ともあれ、生徒たちの表情を見てみよう。みんなにこやかでさわやか。くつたなく、さりげない挨拶をかわしていく。その中の一団にきいてみると、最初のうちは不満だったが、そのうちに慣れて、何とも思わなくなるといふ。

娯楽室には玉突き台とテレビ、囲碁、将棋だけが置いてあった。ファミリー単位で碁や将棋の試合も行われ、ファミリー毎にしまった棚には、小さなカップやトロフィーが並んでいた。

が、どこを歩いてもピカピカで、きれいに掃除された学舎の中で、一カ所

だけ違った印象を受けた部屋があった。それは「スナック」と書かれた部屋で、週末だけあけられて、生徒たちがものを食べてもよい所だそう。簡単な調理設備や椅子などがそなえてあるのだが、カウンターのの上にラーメンの丼が洗わぬまま積まれ、くずかごは、スナック類やラーメンの袋で溢れかえってとり散らかっていた。きけば、日曜日の午後だけ外出していいので、生徒が買ってくるのだそう。生徒たちの、日頃の不満のはけ口を見る思いで、何となくホッとしたもの、を心の片すみに感じながら、その部屋を出た。

## 全寮制の教育

寮の中をのぞいてみよう。部屋は学年別になっており、一年生は十六人、二年生は六人、三年生は四人ずつの部屋になっている。たゞ部屋のな一年生部屋から、学年が進むにつれて、だん





さまざまな服装の子どもたち

だん書齊らしくなっていく。着がえなどが乱雑にちらかっている部屋もあれば、きちんと片付いている部屋もあるのは、住む人の性格であろう。

壁にはカワイ子ちゃんのピンナップやポスターが結構張ってある。ここは先生も生徒も男性ばかり。「せめて、魅力的な若い女の先生でもいらっしやれば、彼らの女性観の形成に役立つでしょうに……」と言ってみたら、確かにそうだろうし、そういう要望が先生方の間にもあるのだが、まだ実現しないとのこと。この男世帯を補う意味でも、週末にはファミリーのメンバーが、チューターの家庭に食事に招ばれて、先生の奥さんに接する機会が多いそうだ。他にわずかに看護婦さんや事務員さんの中に女性は見られるものの、長期休暇で帰宅する時以外は、あたら青春時代の三年間を、同じ年頃の女の子をまるで見ることもなく過すわけである。せめてベッドのそばの壁にぐらい、女

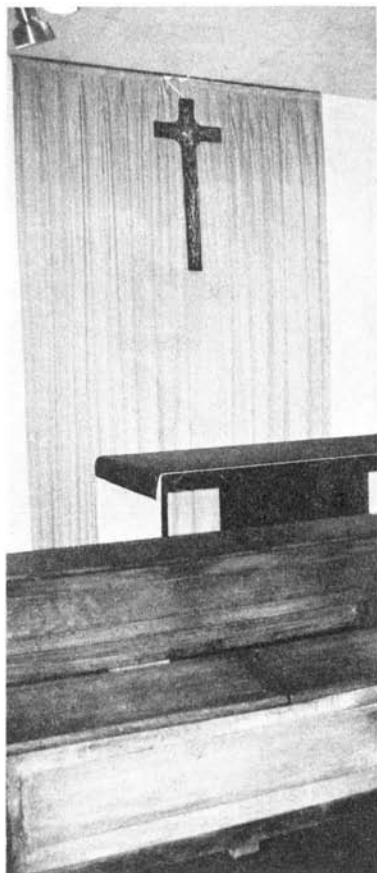
っ気のコピーでも欲しいだろうナと、いたく同情して、それらを見やっただであった。

が、それはそれとして、この生徒たちは、友だちといっしょに寝起きできることが一番楽しいと、全寮制の良さを語っていた。長野県から来ているという子もいて、東京近辺のみならず、地方出身者や両親が外国に滞在する子どもたちもかなり多いようだ。

自分たちの部屋の掃除は生徒に任されているようだが、教室や廊下などはすべて三人の用務員さんの手で清掃され、洗たくも、箱の中に汚れものをポイポイ入れておけば、おばさん達がきれいにして、各自の棚に入れておいてくれる。食事もあるだけである。

せっかく親もと離れて暮しているのだ。男の子でも、身の雑用をさりげなくこなしていく能力を養う絶好の機会なのに、惜しいなあ、と思うのは私だけだろうか。夏休みの登山にそなえ





黙想室



僕の部屋見せます

て、山登りの訓練などはなされている  
そうだが、日常生活の訓練の方はいい  
のかな、とふと「スナック」の部屋の  
光景が頭をかすめたりする。しかし、  
大部分の親は、高い経費を払ってもい  
いから、子供には勉強一筋を望んでい  
るのだろうか。

こうした私の疑問に対して、教頭先  
生からはこんな答えがかえってきた。  
「この時期の子どもたちには、もっと  
大切なことを与えてやりたいのです。  
雑事に煩わされないで、自分を見つめ

たり、存分に思索や読書をして自分の  
生き方を考えさせる場として、この学  
園を置いているんです。

確かに上げ膳すえ膳のくらしではあ  
りますが、自分たちのために働いてく  
れる人たちに、どういう配慮ができる  
かということは考えさせています」

この考えには、カトリック修道会の  
伝統が、息づいているようだ。

至るところに応接セットが置いてあ  
るし、各教室によって机や椅子の形も  
違っていたりで、設備もなかなかのも  
なので、学費は確かに高い。入学時  
納入金百万近く、月づき十万円という  
お金を差し出せる親は、残念ながら多  
くはないだろう。

親の負担もさることながら、学校か  
ら十分以内の所に住むよう義務づけら  
れ、残業手当もなく長い勤務時間を提  
供する先生がたの努力が、この行き届  
いた全寮制教育を支えているといえよ  
うか。



投稿ホットライン——ずっとこけた・ぶったまげた・頭にきた・ジーンときた

# エッセイスト・クラブ

あの日のこと、この日のこと、つれづれなるままに……書いてみよう。  
読んで面白い、読ませて喜ばれる、大傑作集

## 女と焼きナス

東京都世田谷区

庄田 博子

私が、小学校の教師としてチョークの粉と運動場の砂にまみれていたころの話。

四十にさしかかった位の女先生、べ

テランで、授業もスバルタ、なんといつも学級経営のド迫力はいつも学年随一という人がいた。

丁先生である。

小柄でグラマー、酒豪で、奔放、その彼女が、未婚であることは確かだけれど、まだまだカケダシの若輩者の私、彼女のプライバシーを聞き出すは



どのチャンスにも出会わず、その上、  
当の本人は自分のことをほとんど話した  
がらなかったために、そのスジの情  
報は耳に入らない。

ただ、それでも、同棲をしているだ  
の、愛人がいるのだといった、PTA  
にはちょっと聞かせたくないウワサだ  
けは流れていた。

そのT先生が、どういうわけか、あ  
る日、フイと年休をとって休んだので  
ある。

年休というのは学校の場合、普段の  
日に、病気や事故や、その他もろもろ  
の事情があつて、クラスを休むこと。  
大抵の場合、わりと重大なことでもな  
い限り学級の授業を休むわけにはいか  
ないけれど、中には、ちょっとサボリ  
心でつい休むとか、私用で失礼という  
人もいることは確か。しかも、私の経  
験からいうと、一般の会社よりもゆる  
やかであることは間違いない。

——勿論、頭痛や風邪という理由づ  
けだけは忘れない。

そんな中で、T先生だけは、そんな  
半端なことなんかする人ではないから、  
このフイの年休に、職員室ではまたま  
た、どうしたのだろうとウワサ話もひ  
としきり。

次の日、T先生は出勤してきた。

きのう流れた話も、本人が出て来た  
ところで再現というわけにはいかない。  
ヘタな詮索や、憶測などは、教師とし  
てもってのほか。

そんなこんなで、朝礼の始まる前の  
十分間あれやこれやの雑談の時、T先  
生がポツリポツリと話しはじめた。

いつもは、タテ板に水、学校一の大  
声、ツバの飛ばし具合も超一流という  
程の女傑でとおる人である。この沈み  
具合に、まわりの注目が集まる。

「私、きのう一日中うちにいたのよね。  
NHKの『きょうの料理』なんか見ち

やって。

普通の奥さんって、あんなことしっ  
かりやってんだなあって、しみじみ見  
たのね。

焼きナスあるでしょ。

あれね、焼いたあと、皮むくの大変  
でしょ。

私これまで別に工夫したりもしない  
で、ただ熱い熱いって指をフウフウや  
りながら、指でムいてたのね。うまく  
むけないの。

それが、テレビではスイスイうまー  
くやつつけちゃうわけ。

サッと冷水をくぐらせて——長い間つ  
けちゃあいけないんだって、味がヌケ  
るから。あとオハシを皮と中味の間に  
さしこんでスーッと引っ張るわけ、う  
すーくうまーくムケんのよね。

世の中の家にいる奥さん達ってあん  
な番組を毎日見てて、いろんな知恵を  
いっぱい持ってて、家事をホントに、  
スイスイやってんでしょよね。感心し





ちゃった。

私そんなことなんにも知らないで、  
この年になっちゃった」

超ベテランで、独身貴族、キャリア  
ウーマンで、素晴らしい先生と評判の  
高いT先生の言葉の淋しさ、アンバラ  
ンスがまわりをシンとさせてしまった。

おなかに四カ月の子供を妊て、先  
行き、教師をやめようか、続けようか  
と迷いに迷っていた私には、なんだか  
とてもショックだった。

そして彼女は、「彼に買ってもらっ  
た着物ね、高いものだと思うわ、断ち  
バサミで、ジョキジョキ切っちゃった。  
せいせいしちゃった」と付け加えた。

四十女にしては、派手な事やるなあ  
と思ったのが正直な気持ち。

別れの一コマだったのか、心機一転  
の一日だったのか、T先生は、その後  
一度もその事には触れなかった。

仕事を一層しっかり続けて、家庭の  
人におさまらなかったことは事実であ



新刊

# 1930年代を生きる

牧瀬菊枝

1600円

なだれうつファシズムの時代に、岩波の編集者として野上弥生子・宮本百合子に励まされまた予防拘禁で獄中にあった夫に支えられて生きた、時代の記録。

## ばあば

今井美沙子

1400円

幕末の激動期、かくれキリシタンの島五島に取締の侍と信者の間に「めおと双子」の片われとして生まれた主人公の数奇な運命を描くノンフィクションノベル。

## 貝がらの町

小林トミ

1500円

少女時代を暮らした浦安で出会った人々を、連作童話風につづった好古の読み物。60年安保闘争の中で生まれた「声なき声の会」を支える著者の原点を示す。

## 女性と天皇制

加納実紀代編

1700円

世代、職業、暮らす地域の異なる女性たちが自分の生活をのぞきこむようにして記した本書は、深層に浸透してしまつた天皇制に新たな視点を提供する。

思想の科学社

東京都文京区後楽2-16-2  
TEL.03(813)1745

る。  
キャリアアウーマンの中にも、仕事を超一流にこなしながら淋しい人がいる。専業主婦達の中には、キャリアアウーマンがうらやましくて、  
「何でこんな面白くない主婦業に明け暮れてんのかしら」と不満を漏らす人もいる。  
両方を立派にこなしているという人達には障害も多いはずである。  
「仕事を続けるか、家庭に入るか、両方半々にするか」こんな瀬戸際、こんな選択の世界、男には理解できないにちがいない。

ほかにもないとはいわないけれど、学校の教師という立場は、男も女も同じ給料をもらって同じ仕事をする。当然責任も同じだけついてまわる。休みもあるし、他の企業より少しぬるま湯かもしれないが、ある日突然、女には選択の時が来る。  
育児よりも、仕事優先、クラス経営の素晴らしい女先生の中には、他人の子供を育て教えていながら、自分の子供のことは、保育園にまかせっきり、離乳食も、オシメのとり方(オシッコのシツケ)も、  
「保育園でやってくれたから、やり方

わかんないのよね。孫の世話するころになつても、何も出来やしないわね」と苦笑。  
世の母親に、女先生に受け持たれたらたまらない、とか私事が顔に出るからかなわない、などとかげでささやかれながら、それならなおさらと、ガンバル女先生。  
実際、教職を続ける人達にも悩みやトラブルは山ほどある。  
私は結局、その時は子育てを選んだ。ただのお母さんであることを選んだ。選んでいながら、物足りなさをいっぱい感じていることも事実である。  
(元・松本をきえ)



# 対話のページ

## 幼稚園問題について

私も一言

神奈川県横浜市 武田 睦

一八五号の森本さん、一八六号の橋本さんの記事を読み、特に森本さんの、よく幼稚園事情について精通していられる文に対して、素人目と思う事を書きます。

まず、森本さんの文でハッと読んだのは、“愛人”という言葉の大字。尼になるための資格は分かりませんが、なぜ愛人ではないけないのでしょうか。法律婚をした夫婦ならよいのでしょうか。愛しあっている人が一つの仕事をするのはすばらしいし、十代から奉公に出されている人ならなおよいかもしれない。森本さんは“資格”にこだわっていますが、

勉強することは勿論大切です。しかし資格とは結局、国が認めるかどうかの問題で、決定権を国にゆだねることです。誰が教師としての資格を云々できるのでしょいか。

また、小学校、中学校などの義務教育機関は、地域差や、公立、私立の差はあるにしても、文部省の基準にそったある一定のレベルなり、何らかの共通項はある、とありますが、文部省の基準は正しいのでしょうか。文部省の基準、教育方針はどう決められていますか。幼稚園教育に関しては、六領域という大ざっぱなものがあるだけで、内容はかなり自由です。行事追随教育をするのも可、自由遊び、たてわり教育するのも可。むしろ学校教育の管理化問題の叫ばれる中で、幼稚園こそ最後のとりで、この自由さこそ守らなくてはと

思います。

親にこびへつらうという文がありますが、確かに今、子供数の減少で幼稚園の経営がむずかしく、一見、園長がもみ手で……という姿勢もあります。でも、それすらしいことなのです。親がもみ手で園に接しなくてはならないとしたら……。園側がこちらのごきげんを伺うなら結構。こちらの意向が入りこむすきまがあるということなのですから、こちらの希望を堂々とのべて、こうすれば、入園者が増えるということを示せばよいのです。それには親側もしっかり、幼稚園について、子供の教育について学ばねばなりません。鼓笛隊に熱心なのが希望なのか、四・五歳児に整列させて国旗掲揚をさせたいのか、親達がしっかり考えなくては。

残念なことにその辺になると私も気持ちがめげるのです。多くの人が選択したものが正しいとは限らないことは歴史をみても分かるのです。

でも、基本的には幼稚園自体がいろいろな内容を選択し、入園する側も園を選べる方向



が大切で、たとえ入園者が少なくとも充分経営できるバック（助成金）の問題。やはり、ことは、幼稚園問題一つにしても、国民一人一人がどういう政治を選び、許すかという問題にぶつかるのです。

私も子供二人を入園させる前は、行事を追わない所、空箱や廃物利用の保育をなど夢をえがいていました。名簿が男女別で、男子が先というのも気に入らないし、女の子はスカート、男の子はズボンという制服もいや。運動会で男は組み立て体操、女はダンスも意にそいません。そんな園に入れました。

でも今は、「子供が楽しければまず充分」とかなり譲歩してしまっています。親同士の懇談会が園主催で無いのならば、自分達で連絡しあって、勝手に我が家でクラスの懇談会を開き、とにかく親同士の顔合わせをしました。私は、親同士の関係さえつけば、子供同士の問題の八〇％は解決すると思っています。それで今、親同士がまるで自分達が幼稚園生活しているように楽しくなりました。子供にとっても、親が生き生きと親同士また、園と

関わっているのは楽しいはず。

森本さんのおっしゃる幼稚園のえらび方は確かに一つ一つ正しいと思います。ただもう一つ子供にとって大きなことは、子供集団の力です。極端に言えば、幼稚園は少々気に入らなくても、そこで良い友達にめぐり会い、また遊べる場であればと思うのです。できるだけ隣近所の子供が行っている所、近くて、交通の便のよい所、そして親自身が隣近所との、交流をもつこと。もしその園が少しおかしいと思ったら、親同士手をつないで園を変えてゆけたらと思います。



わいふよお前もか

福島県いわき市 大川原みち子

わいふ一八五号を見て、びっくりしたこと、裏表紙に台所用合成洗剤の広告があったことです。私は十年近く合洗追放運動をやっている、新聞でも多く書かれていたのに、良識あるわいふ諸氏にしてこれかと落胆したところです。

私は十年前には手荒れがひどくストッキングは手袋をはめてはかないと、靴をはく前には伝線という状態だったし、ボタンをかけるにも何分もかかる程で、白木綿の手袋を常時しているようでした。それが石けんに切替えて直ったのです。

合成洗剤は海や川を汚し魚資源を脅かしています。私の住んでいる町の近くでも、赤潮などによって臭くて食べられない魚が増えていきます。アメリカの穀物輸出が止まって肉類の蛋白質が取れなくなった時、貴重な魚資源がなくて何とするのでしょうか。

合洗追放運動を始めてから私は意識が変り



ました。危険な化学薬品を練り合せただけのお化粧をやめ、流行を追っかけてタンスの中に服を増やして行くのを止め、その分を全部読書にまわしました。その結果、今迄見えなかったものが見えて来たのです。

かなりのインテリでもメイクアップをしています。更にこっけいなのは、そんな人が「私は自然主義運動をやっています」ということです。私の知っている若者は、私の所へ粉石けんを買いに来て知り合った人ですが、髪を腰迄たらし、わらで束ねて山の中の一軒家で自給自足の生活をし、買うのは塩と石けんだけという頼もしさでした。

これからは自分で自分の食物を作り、欲望をコントロールできる子どもたちを作らねば、キャッシュカード、コンピュータの時代に入ると、自分を見失って行ってしまうのではと不安です。前述の若者など

「私たちは時計もカレンダーも必要ないです。夜明けと共に起き、日が沈むと寝るのです」といった言葉が印象的でした。時計にコントロールされるのでなく、時間を人間が主体的

に使うのです。そして川の水を水車でまわし、電気を作って、ラジオを聞いていました。

ここ迄徹底的にやらなくても、もっと毎日の生活を主体的に生きねば、人間として生れて来た甲斐がないというものです。ある若者が「女は男の奴隷です。そしてその男もまた、会社に身も心もからめ取られた奴隷です」といった言葉を毎日反すうしています。

情報が、いつも送り手側から受け手に流されていて、受け手の側が主体的に情報を作り出し選択して行かねば、わいふを作った意味がないし、ミニコミだけではできない役割の重さがわいふにはあると思ったのです。

## 淋しいのはお前だけじゃない

埼玉県越谷市 高木八重子

感想が遅れました。一八五号のマンウォッチング「口説かれても楽しくない」のY・S様、お元気ですか？

書きにくい事を勇気をもって書かれたなあ、と、感心しています。無神経なやり方で好意

を示す男の人が、本当に多いですね。結婚していても、子供がいても、異性の魅力には敏感でいたいと、常々私も思っています。だってそのほうが楽しいですものネ。

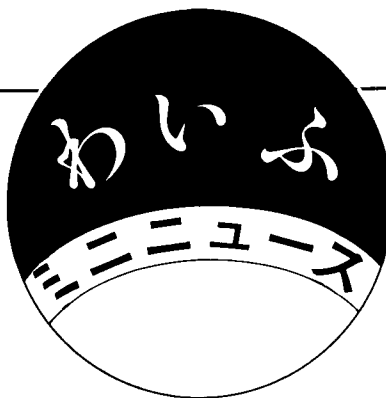
魅力的な人と会ったら、さりとて好意を示せて、楽しくおつきあいができたら、生活も生き生きして来ると思っています。世の男性諸氏も、内心そう思っている事でしよう。

長い間仕事場で男の人達を見ていると、仕事事で息もつけず、疲れきった人が多いようです。ちょっとした親切に、子供のようにすがって来る上司もいました。(五十歳近い温厚な人ですよ)あなたが孤独を感じている時、不安や淋しさを覚えている男性も、また多いと思います。

お書きになったような、チョツと不快な(そしてほんのチョッピリはうれしい?)出来事にメゲず、たくさんの方々とおつきあいされて、心からうちとけられる人と出会えるよう、願っております。

こういう私も、良い人(女性・男性を問わず)と出会いたいと、いつも思っています。





新聞やテレビに最近、よく登場する「男女雇用平等法」——

ああ、日本も、一歩ずつ進んでいるのだと、私は単純に喜んでいたので……。

私たちの男女雇用平等法をつくる会、日本婦人会議の共催である。

会場は開会前から熱気に満ち、広いホールの席が見る見る埋まっていく。

オープニングは、昨年行なわれた、平等法実現をめざしての女たちのマラソンの様子のビデオ上映。

明るくなって、場内を見回すと、いつのまにか、座り切れず立っている人がたくさんいる。四百名をこえたという主催者の報告がある。

二月二十五日、お茶の水の総評会館で、企業の平等法くずしを許すな／＼・二五集会が開かれた。国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会、

「試案」は、①女子の募集・採用の段階の平等は事業主の努力

義務とする。②職場での配置から昇進、昇格、退職までの雇用の管理の差別は禁止規定とする。

③労働基準法的女子保護規定から、深夜業・時間外労働の制限と生理休暇を廃止する。以上三点が主内容である。

問題は、募集・採用の平等が、企業の努力義務、つまり努力することを願うにすぎなく、②で入社後の差別を禁止しても、雇用の入口の差別が禁止されていくとは、採用のときにきちんと差別しておきなさいと企業に奨励しているようなものであること。

また③は、女性の保護規定は不足ではなく、男性も人間らしい生活が送れるよう、男性の労働時間短縮をこそめざす方

向に進むべきとのこと。

「女性にとって、本場に必要ない平等法を作らせるためには、タイムリミットはない。ごまかしでない真の平等法実現のために、みんなで努力したい」と中島さんは熱弁を結んだ。

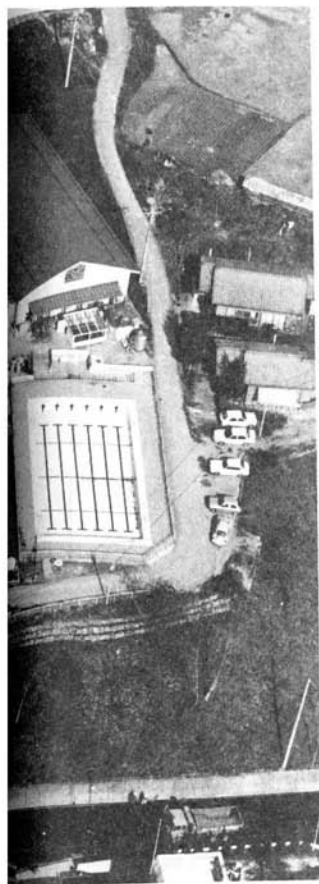
次に社会党の土井たか子議員の、平等法はこれからの女性の生き方を左右するので、妥協せず頑張ろうとの力強いアピールがあり、会場からの発言に移る。十二年六カ月の定年差別を聞いた日産プリンスの中本さん、「私たちの就職手帖」編集長新井ひふみさん……次から次へと元気な声が続いた。老若男女の熱気にあふれた会であった。

(文・山本 雅美)



母親から見た山村留学の記録（その二 八坂へ）文・こくぶんひろこ

# 智<sup>とも</sup>よ、自然に学べ

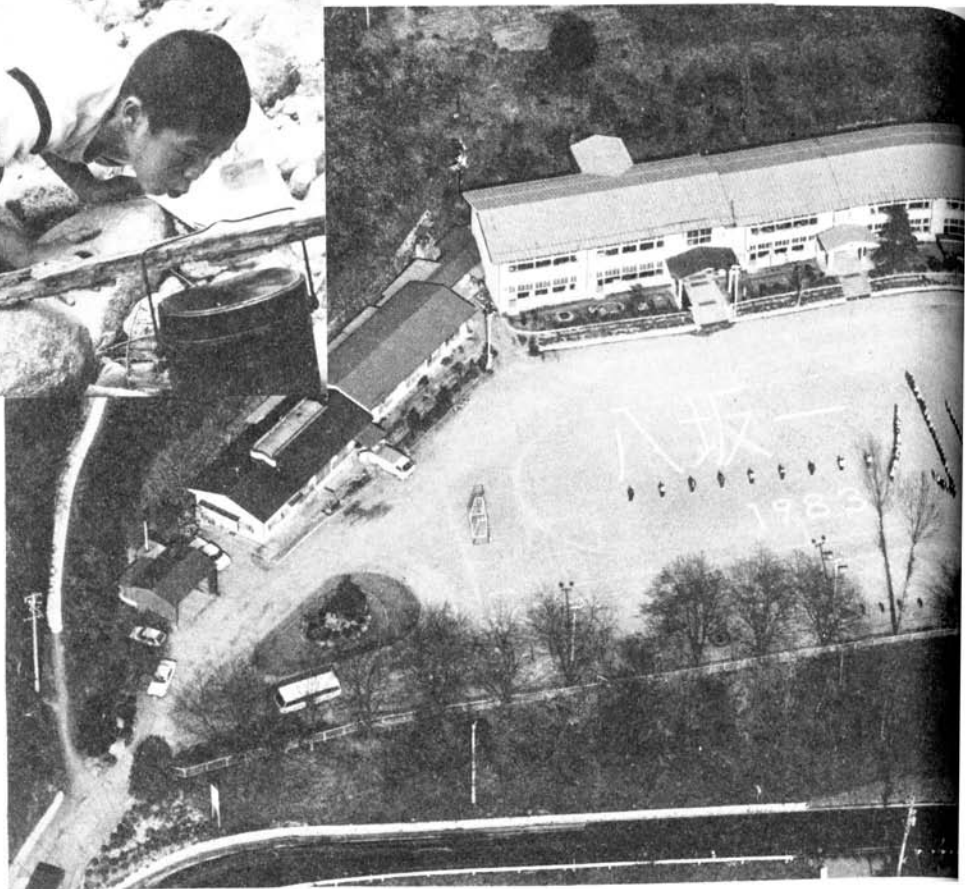


## まんさくの花の入園式

「お母さん、少しはでじゃないの。八坂へ行くときは、田舎らしくしなくちゃいけないだよ」

出発の朝、山へ行く服装をしようか、式があるのだから、やっぱりちゃんと





しなければいけないかしら……と、さんざん迷った末、黒のスーツを着こんだ私に、智がいった。

本人は、秋に八坂へ行った時、男の子たちがみんな着ていた上下のトレーナーを着たかったのに、とブツブツいいながら、紺色のしまのトレーナーシャツを着、紺のスボンをはいていた。

午前九時、従兄のお兄ちゃんと、以前、隣に住んでいたお姉さんに送られて、新宿駅を出発。ところが私は、こんなだいたい日にもドジをして、息子に叱られてしまった。

午後二時、現地集合、三時から入園式というのに、接続時間を見違えたのか、信濃大町に着くのが二時近くなのだ。

二時をだいぶまわって野外活動センターにつくと、一階には、送られた大きな荷物がちらばり、人声でざわめいていた。

出合いがしらに、ぶつかりそうにな



ったのが、せりちゃん。もう帰ってしまつたらうと寂しく思っていたのに、彼女は三年目を八坂で過ごすのだ。

二階の広間にはすでに入園式の準備が整えられ、TBS・テレビポートの取材班がカメラとマイクのセットをしていた。この人たちは一年間、随時子どもたちを取材して、放送するという。

式が始まった。在園生が新入生にまんさくの枝をくばり、真中のテーブルに置かれた大きなスキー靴にみんなで活ける。まんさくはこの季節にいちばん先に咲く春を呼ぶ花。みんなで心をひとつにして、これから一年をがんばりましょうという恒例の行事なのだろうだ。

スキー靴にまんさくの花。なんと山の学園らしい取り合わせだろう。

続いて子どもたちがひとりひとり立ち上がって、この一年への抱負を述べる。智は二番目に、びっくりするほど大きな声でいった。

「僕は八坂で畑をたがやしたり、お米をつくったりしたいです」

先生や農家代表の方の歓迎の言葉は、子どもたちにも、私たち父母にも、温かいものだった。まず理事長の青木先生が、ゆっくりとおだやかな声で語りかける。

「中学校は八キロ、小学校は四キロの道を毎日歩いてください。食べものは自分たちでつくり、山で取ったものをついばい食べ、お金を使わずにがんばろう。留学はつらいことがいっぱいあるが、後には楽しみがたくさんある。そして、大人になったら、アルプスのような大きな人間になってください。農家の優しい心をおみやげに持ってかえってください」

人格者と評判の高い八坂小学校長 幅先生は、

「八坂の自然をいっぱい探検してください。村の人たちは、親切な人ばかり。聞けばなんでも教えてくれます。素晴

らしい声で、大きな声でだれにでも挨拶してください」と子どもたちに呼びかけたが、四月から大町小学校に転任とのお話は、この先生に大きな期待をよせていた私には残念なことだった。そして、農家代表、諏訪義十さんの、率直な心のこもった言葉。

「農家はすべての子どもたちに責任を持ち、一体となって預かっています。父母の皆さま、安心してお預けください」

私の中の不安はもう消えていた。

## 親たちの願い

入園式のあとは、六時夕食。八時から父母懇談会がある。それまでの数時間、母親たちはそれぞれ在園生の母親を囲んで情報を仕入れるのに必死だ。三年目のせりちゃんの母、斎藤藍子さんが、子どもへの手紙の書き方、農家



への心づかいなどこまごまと話してくれる。夕食後も三階の部屋でひとしきりその話にきき入りながら、荷物はいつあけるのかしら、送るのに間にあわず持ってきた布団カバーを掛けてやらなくては……ど気にしていると、入ってきたひとりのお母さんが、

「子どもたち、布団を敷き始めたわよ」  
大変！ とあわてて飛び出そうとする私に、

「だめ！ お母さん、いま行っちゃだめ」

と斎藤さんのきびしい声。

「子どもたち、なんとか自分でやるわよ。カバーなんて、一晩ぐらいたくたっていいじゃない。ここにきたら子どもに手は貸さないのよ」

またしても私の親バカぶり。考えるより先に体が動いていたのだから恥ずかしい。やはり腰を浮かせていた他のお母さんたちと顔を見合わせて苦笑してしまった。

十五分ほどすると、センターの母親役である児玉先生が上がってきて、ニコニコしながらいう。

「ご安心ください。子どもたち、何とか布団を出して自分で敷きましたよ」  
八時から、学年順にすべての父母がならび、懇談会が始まった。ほとんど両親そろっての参加で、祖父母も何人かいる。

青木先生が学園規則を説明したあと、親たちがひとりずつ、職業や入園の動機などを語る。会社員、自営業、教員、共働きの人……さまざまだ。隣にすわった二年生と五年生の男の子二人を入園させた稲葉敬子さんは、雑誌の編集者。社は私の家にも近く、懇談会の前にすっかり意気投合してしまっていた。どの親の動機も子どもを自然の中で育てたい、という強い願いに支えられていた。

「頭で考えずに、体で考える子にしたい」

これは、もとグランプリ・レーサー、瀧進太郎さんの言葉。ご自身も幼小の頃、山奥での厳しい生活を体験しているという。

「ひとりっ子だからきょうだい体験をさせたい」「末っ子で甘やかしすぎた、という反省から」という人もいた。

「子どもは親とは別の人格なのだから、一度親から離して、自分でものを考えさせたい」と熱をこめて語るお母さんもいる。

「自分が職業についてみて、大切なのは学歴よりも、体力とやる気だと実感したのです」これは、看護婦さんから編集者に転身し、取材活動に飛びまわる稲葉さんの言葉だ。

また、会の行事に参加しているうちに、子どもがどうしても……という人も多かった。

「私は反対だったのに、女房と子どもが決めたちゃったんです。八坂に子どもを取られたような気がしますねえ」





新入生四人の入学式

子ばんのうそうなお父さんの言葉も実感がこもっていてほほえましい。そして、

「私は子どもに最高のぜいたくをさせているのだと思います」と静かにいった斉藤さんの言葉が心に残っている。

そうだ。もう若くない私は、できるうちに子どもに最高のぜいたくをさせてやるのだ。美しい山、清らかな水と空気、過疎化の中で、この自然を守り、闘っている人たちとの暮らし……。智、お母さんがさせてあげるこのぜいたくを、体いっぱい受けとめてきてほしい。

## 八坂第一小学校

四月一日。朝から小雨。朝食前に、子どもたちは裏山にきのこの植菌に出かけ、親たちは近くの鷹狩山に登った。「君たちがきのう食べたしいたけは、

三年前にお兄さんやお姉さんたちが植菌してできたものなんだよ。これから八坂にくる人たちのために、君たちもちゃんとやろうね」

ラジオ体操の後で青木先生がいつていた。こんな風にして子どもたちは、物の成りたちを知り、他人のありがたさ、他人への思いやりを知っていくのだろう。

三／四十分、息を切らして登った鷹狩山の眺めは、一瞬言葉も出ないほどだった。北アルプス連峰をはじめ、三百六十度、雪をいただいた山々。点在する村落があり、その向こうに人家の重なった町も見える。

山村留学は、親たちにもこんな充足を与えてくれる！

七時過ぎ、子どもたちの初登校。親たちが食堂でのんびりしている間に、もう下の坂道を駆け下りていた。小さい子が小走りで大きい子を追いかけ、大きい子は時折、立ち止まって追いつ





もう村の子だ 八坂小の二年生

くのを待っている。女の子は小さい子を囲むようにして、いくつかのグループにまとまって歩いていた。

午後、私たちも先生たちとの懇談会に出かけた。八坂第一小学校。広い校庭に青い屋根の校舎と緑の屋根の体育館。立派なプールもある。過疎のすずむ前は数百人の子どもがいたのだろうが、いまは留学生二十五名を含めて全校で六十三名。村にはもうひとつ第二小学校があるが、こちらは三十数名だという。中へ入ると、廊下はピカピカ。お手洗いは清潔。掃除は一年生から六年生まで、全員が縦割りするそうだ。

新しい校長先生は実直そうなおだやかな方であった。気骨のありそうな教頭先生と各担任。二年の担任はまアなんと初々しい、この春、信州大学を卒業したという少年のような先生だった。就職第一日に、テレビカメラがまわり、都会の親たちに囲まれてしまったのだから、さぞかし上がってしまったのだ

ろう。教室で私たちと懇談したときも、終始うつ向いたまま。時折、まだ終わらないかなあ、というようにチラチラと時計を見上げるのだ。しかし二年生のクラスは村の子六人、留学生四人。ひとりひとりに体当りで接して行くというこの先生に、心算しく子をゆだねる思いだった。

翌日、入学式にも出席させてもらったが、新入生はわずか四人。在校生の「歓びの歌」の合奏（これは素晴らしかった）に迎えられて、広い体育館の後ろからチョコチョコと入って来た時は、都会の親たちの間に嘆息がもれた。そして、「○○ちゃん、あなたは折紙が上手なんだってね」などと、ひとりひとりにシュプレヒコールで呼かけた歓迎の言葉に思わず目頭を熱くしてしまった。まさに、手づくりの教育を感じさせるひとコマであった。



## 涙が落っこちちゃうよ

四月二日、子どもたちと別れの朝。前夜、先生や父母たちと遅くまで酒を飲みかわしてしまっただので、起きるのがつらい。必要な話し合いが終わればお酒も出て来るセンターの夜の雰囲気は、飲んべえの私にはうれしい限りである。

さて、いっしょに朝食をとり、学校へ行く子どもたちを見送れば、親たちは八坂を離れなくてはならない。子どもたちはセンター入りをしてからは、親とは別行動をしていたけれど、ときどき何か理由を見つけては、ひとり、ふたりと親のところへやってくる。みんな元気にさわいではいたけれど、心の中は寂しさや不安が渦巻いているのだらう。

体も小さく、来た時からいちばん心細げな顔をしていた二年生の洋平ちゃん

んが、ごはんを食べながら、しきりと上を向いている。下を向くと涙が茶碗の中に落ちてしまうのだ。

「あの子はお兄ちゃんにひきずられるようにして来てしまったから……。正直いって、こんなにつらいなんて思わなかったわ」

遠くに洋平ちゃんを見ながら、お母さんがいう。この人は、書道用品の老舗の奥さん。とても理知的でしとやかな人。五年生のお兄ちゃんが、本の虫で、まったく体を動かさないことを案じての留学だったという。

彼女が涙ぐみそうになった時、うしろで、青木先生がいった。

「お母さん、ああいう子こそ、順応が早いんですよ」

子供との別れは一瞬だった。智は、自分でおさえているのか、私をまともに見ようとせず、「じゃあね、行ってきまーす」と走って行ってしまった。母親たちの「いってらっしゃーい」

「がんばってね」の聲が飛び交い、あまりかねて、二階に駆け上がってしまった人もいる。

静かになった食堂でお茶を飲みながら、斉藤さんがいった。

「こんなに素晴らしい所に残していくのに、こんなにつらいんですもの、戦地に子どもを送ったお母さんはどんな気持ちだったでしょうねえ」

戦争を知らないお母さんたちも、一瞬シンとする言葉だった。

## 仮病と集団風邪と

「おかあさん。お元気ですか。ぼくは元気です。学校へ行くにも四キロあるので、まい日つかれます。それから、ちかみちをとるのが、こわいのでいやです。」

それに、ぼくをいじめる人がいます。名前は〇〇くん。××くん。名前のわ



からない人もいます。

おかさんも二十四日までに手がみをだしてください。まっています。国分智より」

子どもから初めて届いたハガキだ。夏の行事での体験がものをいって、今度の私はニヤリとしただけですんだ。

そうよ、智、たくさんいじめられていらっしやい。お兄ちゃんというのは、いじめながら、可愛がり、かばってくれるものですよ。

実際、後で聞いてみると、このとき名前をあげた子がいちばん好きなお兄ちゃんになったようだ。

「毎日、子どもたちが春の花を食堂に飾ってくれています。子どもたちが書いてくれる自然のたよりは話題でいっぱいです。入園式からはや二十日、子どもたちは八坂の自然にとけこみ、春の芽ぶきとともに躍動しています。

親たちの一回目の訪問、これから一年お世話になる農家との対面の日程を

知らせるセンターからの手紙はこんな

言葉で始まっていた。しかし、後になつて届いたガリ版刷り生活記録「山なみ」四月号には、子どもたちの動揺と先生たちの苦闘の日記が綴られていた。

「四月十二日 今朝は冷たい雨が降り、どの子も出かけるときぐずっていたが、強引に学校へ追い出した。護人と尚美を病院へ連れていったが、二人とも元気なので、学校へつれていく。夕方、体の具合が悪い子が続出。純次、一久、洋子、敬子、伸之介、せり……と食欲がすすまない」

「四月十三日 朝になって熱が出て起き上がれない子が続出。食事をしている子も元気がない。女の子などはひとりで休むとつぎつぎと連鎖反応。何と八坂第一小へ通う二十五人のうち十八人が登校しなかった。中には仮病くさいのがかなりおり、全員診療所につれて行き、元気そうなのは途中から学校へ向かわせた。学校へ行くとまた気分が

悪いといって、連れに行った子も出て、センターの車は一日中、動きっぱなしであった。センターに帰ると急に元気になり、はしゃぐ子ども多く、精神的なものが大きく作用しているのは確かであった。

四月十五日 昨日より人数が減る。

風邪は峠を越えたようである。しかし、女子の七人はちょっと問題が残る。朝は気分よく起きられるのに、食事を食べ終わると、やれ腹がいたい、熱が出てきた、せきが出る、と訴えてくる。

何やら登校拒否児に似てきているみたいだ……」

こんなことが、そのとき知らされていたら、親たちはどんなだったろう。しかし、一カ月後に私たちが会ったのは、まさに春の芽ぶきが躍動する子どもたちであった。





ヤッタゾ、いよいよ農家入り

## 母さんって呼んじやった

「あら、尚美がいる。智くんもいるわ」

母親の中でもいちばん元気のいい外尾松子さんのはずんだ声が響いた。

坂道を下った木の下で智がこっちを見ている。一年間のきょうだいになった六年生の永島由貴ちゃん、木村洋子ちゃん、二年生の稲葉伸之介くんもいた。

四月三十日。昨夜、センターに来た私たちは、授業参観に行くために、子どもたちの登校時間にあわせて、山道を下ってきたのだった。

一カ月の活動のせいか、風邪のためか、智はぜい肉がとれて、ずいぶん細くなった。それ以上にぶくぶくとしていた尚美ちゃんがスマートになったのに驚く。

照れているのか智は、私の顔をまともに見ようともしず、

「ねえ、マンガ、もってきてくれた？」  
センターでは、禁止されていることをいうと、やっぱりという顔で走って行ってしまった。

二年生の授業は、あの麻布小学校の整然とした授業からは想像もつかないすさまじいものだった。広い教室の真ん中に十の机が半円形に並び、先生はひとりひとりの机をまわって指導するのだが、子どもたちは一瞬たりともじっとしていない。声をふりしぼって、てんでに先生に呼びかけ、隣の子とつき合い、少年のような新人の先生はまさに汗みどろという感じで机から机をとびまわっている。しかも休み時間には、肩によじのぼられ、腰にまといつかれて、職員室にももどらずいっしょにあそんでいる。村の子は、女の子はおとなしかったが、将来の大物を思わせるような面白い男の子もいて、私たちは笑いの連続だった。でも、こんな授業を一年もつづけたら、東京へ帰



ってどうなるだろう、と内心、心配したのだが、先生は、

「そのうち、子どもたちをねじふせちゃいますからね」

と可愛い笑顔を見せていった。

午後、いよいよ農家訪問。前日、セクターに子どもたちの農家が発表されていたが、智は、セクターに近い切久保部落の勝野大（まさる）さんの家。この人は、若いときご主人を亡くし、八十になるおばあちゃんとともに、女手で農業を営み、二人の子を育てあげたという。里親はもう四年目で、子どもたちがこぞって行きたがる家のひとつだそう。

大さんの家は、百年以上も前に建てられたという、白い土蔵のある大きな農家だった。

小柄で、目の優しい母さんと、とても年には見えないシャンとしたおばあちゃん、全身に歓迎の意を見せて迎えてくれた。居間のテーブルには、大

皿に盛られたきゅうりの漬けもの、たくわん、手づくりのおかきに柏餅、蒔の煮もの、山盛りのなめこ……それにビールまであって、子どもたちが待ちかねたようにすわっていた。

「きょうだけは東京のお母さんが好きだって、みんなもう朝からソワソワして……。ふだんは、母さん、母さんって、わたしにあまえるんですけどねえ」

大さんが目が見えなくなるほどの笑顔でいう。

「智と伸之介は双子みたいにつもくっついててねえ。そうそう、智がいちばん先に『母さん』って呼んでくれました」

後になって智自身がいていた。

「農家人りの日ね、荷物を下ろすとき持てなかったんで、『母さん』って呼んじゃったんだ」

それにしても、漬けものや煮もののおいしかったこと！ 子どもたちのよく食べたこと！ 漬けものなどは、親

たち七人で大皿を二つも平らげ、おかわりをしてしまったほど。大さんは私たちと話をしながらもコマゴマと立ち働き、アツという間にタラの芽のおひたしをつくってくれたりした。

八畳の部屋に男の子、女の子、二人ずつ。立派な机も筆筒も与えられ、子どもたちはそのほかにいくつもある広い座敷を駆けまわって遊んでいた。ドタバタとあばれる二人のやんちゃ坊主を、おばあちゃんも目を細めて見ている。こんな農家に一年、私たちは何を心配することがあろう。

その夜はセクターに里親全員が集まり、なごやかな宴があった。父さんたちはお酒が強く、熱心山村留學と村の行く末を論じ、きれいな喉を聞かせ、十二時過ぎまで私たちと盃を汲みかわした。母さんたちも気さくで、温かです。山村の暮らしに耐える人の静かな強さがあった。私は、自分にも新しい両親ができたような気がした。



## 試練の一学期

「入園式、農家訪問、二度にわたり父母が八坂に来ました。その折、母親の涙を浮べた顔をいくつか見ました。そんなとき、親としての経験がない私は、どんな言葉をかけてあげたらよいかわからず、ただおろおろするばかりでした。」

子どもの前、そして人前では、『預けた以上は覚悟ができています』と平

然としている親であっても、内心は心配であり、我が子のことはひとときも離れない毎日なのだ、それが親なのだということもつくづく感じました。

一学期は、特別な事情がないかぎり、親子対面のチャンスはありません。一年目の親、特に母親は、針のむしろにすわった心境の毎日かもしれません、今までの我が子との生活を見つめ直すよいチャンスです」

東京に帰ってから届いた「山なみ」に、八坂での指導者、山本先生が書か

れた一文である。

五月、六月、七月……夏休みに帰ってくるまで、私たちは電話も許されな

い。

八坂から帰ってくる日、人のいない二階で、夕方までいてほしいとダダをこね、迎えに来たタクシーに乗り込む私にクルッと背を向けて、もう出てこなかった智だった。いま頃は、そんなことはすっかりわすれて、八坂のいちゃん美しい季節を楽しんでいるのだろうけど……。

あの日、五月一日、母さんたちの心づくしのお弁当を持って朝早くセンタ―にやってきた子どもたちと、山菜採りにでかけた。ニワトコ、タラの芽、ワサビ、土地の人がナマドウフと呼んでいる不思議な新芽……。わずか一カ月の間に子どもたちが山菜や花の名に精通しているのは驚くばかりだった。

こっちだよ、あっちだよ、親たちは子どもに引きまわされ、おいしい湧き

いいお米がみのりますように



水に感激し、センターでは餅つきまでして、これまでにないほどの充実した親子のひとときだった。

この日のことは、フジテレビも取材してくれて、帰った翌々日、農家での生活もあわせて三十分にもわたり放送された。

「あんなにへんびな所へ行っているのに、いちばんの文明の利器を使って子どもの様子が見られるんだもの、あなただけじゃない」と友だちがいつてくれたけれど、寂しさは、思いがけない時におそってくる。さそわれてお酒の場に行った時など、大変！ 今日はどこへあの子を預けたんだっけ……などと突如、思ったりするのだ。土曜日、なんととはなしに小学校に足が向き、もとのクラスメートの子に会って、気持ちがあんなこともあった。

それでも、私は本の出版を急ぐことになって、子どものいない間こそ頑張らなくては……と、かなりハードな期



限を切ったので、まだ気がまぎれていた。子どもがいらないのだから、と夜遅くまで会社に引きとめられる中で、帰ればすぐ、買ったばかりのワープロに向かい、土、日は、外出もせず書き続けた。五月の終わり、過労で目が開けられないようになり、一日倒れてしまったほどだ。

親どうしが電話をかけあって、子どもの話をしては気をまぎらわせることもあった。

「一年目はねえ、近所の人に『お子さ



三十九人、あっという間に田植えも終り

ん、どうしてる？」なんて聞かれて、『ちょっと急ぎますから』なんて、走って行って涙を拭いたこともあったわよ。二年目になると、もう、心配する張合いもなくて……と、六年生のお母さんがいつていた。

子どもがきょうだいなら、私たちは何になるのかしら、と親どうしの不思議な関係がすすみ、時には飲みに行くことも、仕事の協力をしあうこともあった。

母の日と父の日に、学校で書かせた





らしい手紙が来たきり、子どもからのたよりはとだえたけれど、この二つの手紙をなんどくり返し読んだことだろう。

「おかあさんへ」

まい日まい日しごとをして、すこししかねむらないで、ぼくを八坂にいかせてくれてありがとう。いえのことやしごとのことやねこのことや、いろいろ

ろあって大へんだと思いますけど、がんばってください。ぼくもがんばります。

ねこは、どんなようすですか。大きくなりましたか。子供をうんだらすぐおしえて下さい。なん月なん日に生れたかもおしえてください。ではお元気で さようなら

五月七日 土よう日

いつもありがとう」

父の日の手紙には「おかあさんはおとうさんのかわりもしてくれるね」とあった。

「ときにはゲンコツもくれますよ」と笑っていた大さんにも、同じことを思っただろうか。

ところで子どもたちはどうしていたのだろう。例年、五月頃には、ホームシックに耐えかねて脱走する子がいたというが、ことは全くなかったそう

だ。  
「三十九人という集団の力でしょうか

ねえ。多すぎるかと心配もしていたんですが、グループ・ダイナミズムというんでしょうか、ことしの子どもたちは迫力がありますよ」青木先生がいていた。

八坂の学校では、五月と十月の一週間、農繁休みがある。本来なら、忙しい田植え仕事を手伝うための休みだが、留学生たちはセンター活動をしてむしろお母さんたちの手を空けてあげるのだろう。

この一週間、子どもたちは、みその仕込みをし、しろかきや田植えをし、山奥の廃屋で自給自足の生活をした。テレビポートが三度目の取材をしてくれたので、私たちもこれらの活動の様子をかいま見ることができた。田んぼでは、裸になって泥をぶつけ合い、廃屋では、自分たちで探した露やわらびを料理して、みそと米しかもらえない生活をみごとに楽しんでいた。

六月は山菜採りに走りまわり、七月



は高瀬川で飯盒炊きさんもしたという。これはひとりひとり、飯盒をひとつ、米一合をもらい、自分で火を燃やして炊きあげるのだ。木が湿ってずいぶん苦労したそうだが、「自分で炊いたごはんは最高にうまかった」と子どもたちが日記に書いている。

智の日記に東京のことを書いたものはない。けんかや病気でつらさに耐えたことも多かったろうが、自然と集団の大きな力がそんなことを吹きとばしてしまったに違いない。

六月十二日の日記に、

「きょうは、ぼくのはんとうのお母さんのたんじょう日です」

と書かれた一行が胸にしみた。

## 東京はうるせえなあ

帰ってきた！ 子どもたちが帰ってきた！

七月三十日、夜七時近く、新宿駅の広場に降りてきた子どもたちは、どの子も大きなリュックを背負い、色は真っ黒。早くから待っていた親たちは、転がるようにして自分の子どもたちの側に駆け寄る。

背が高くなったこと！ もともと大きな子だったけれど、すっかり少年らしい体に引き締まって、とても二年生には見えないに違いない。それに伸之介くんも智も、クリクリの坊主頭。今朝出てくるとき、母さんが刈ってくれたという。入園式のとき泣いていた洋平ちゃんのはころぶような笑顔。彼は二年生で随一の水泳の名手だという。「頭がいたくなるほど重かったよう」と、リュックを下ろした智は、

「じゃがいもも、かぼちゃも、きゅうりもトマトも持ってきた。それに東京の水はまずいから、ホラ」と引張り出した水筒は、ズシリと重い。農家の裏の湧き水をつめてきたのだと

いう。

「冷蔵庫で冷やせばうまいよ。おかあさんへのおみやげだから、大事に飲んでよ」

稲葉さん一家といっしょにおすしをおなか一杯食べさせ、六本木に着いた智の第一声。

「東京はうるせえなあ。八坂じゃ夜なんか、シーンとしているよ。星なんか重なってるんだ」

部屋へ入ったときの第一声は「あれえ、うちってこんなにせまかったっけ」

猫や大好きな近所の人たちとの再会はほんとうにうれしかったらしく、夜遅くまで興奮して寝つけなかった。明日はだれちゃんに電話しよう、あそこに行きたい、ここに行きたい、と気持ちもう東京っ子だ。

八坂の夏休みは短い。十六日後には帰ってしまう。その間に、どんな生活を私に見せてくれるだろう。



- 104 -



# 情報 コーナー

## ●「家族を心理学する会」 へ参加しませんか!!

現在はさまざまな事件や問題がマスコミその他を賑わしており、根本にその人の生い立ち、

家族環境などが問

われる時でも  
あります。

家族の問

題を心

理学的

分析を試

みながら、

日常的に自分

の生き方に関わる

事柄として、学び考え

ていくグループです。

多数の方のご参加を待っています。

◆期間 四月十九日(木)～七月

五日(木) 第一・第三木曜日

◆場所 砧区民会館集会所(小田

急線成城学園下車そば)

但し、四月十九日のみ経堂婦人会館

◆参加費 五回分 一万円

◆講師 東京医科歯科大学講師

滝野功氏

◆問い合わせ先 Ⅷ二六〇一三六九  
七藤田(バンフレットも用意して

あります)

## ●思春期の子供をもつ

おかあ様へ

最近の若者向け雑誌には刺激的な写真や記事が多く、性非行の低年齢化も進み、親としてじっとしておれない気がしてきます。殊に思春期の子供をもつ母親の不安は大きく、先日「娘が初潮を迎えるの機会によく話し合いたい」という声を耳にして、私も気にかかって矢先、地域の集りでピッタリ

小冊子を紹介されました。大きさ

も手頃で構成・装丁が行き届いていて身体のしくみなどわかり易く、

これなら親子で楽しんで読むことができます。皆さんにもおすすめ

したく、一般には市販されていないとのことなので、このコーナー

を通してお知らせ致します。

辻浦知津代

◆「初潮を迎える娘をもつ母へ」

定価六八〇円

◆「ヤング・メモリー」

(毎月の生理を記録するノート、身体の変化を自己管理する習慣をつける事は大事。プレゼ

ントにも好適) 定価五〇〇円

◆「思春期の男の子をもつ母へ」

定価六八〇円

◆問い合わせ先 〒162新宿区市谷砂

土原町一ノ二 日本家族計画協

会Ⅷ〇三一二六九一二一〇一

三冊とも15×15センチ位の小冊子

ですが書籍小包扱いとなるため、グループで何冊かまとめて申し込んだ方が得です。





# サークル だより

## 丹沢サークル(仮称)便り

わいふ読者の皆さんお元気ですか。私達は神奈川県丹沢丘陵のすそ野、秦野を中心に、伊勢原、遠くは箱根まで仲間を持つ丹沢サークルです。

最初に仲間の集まりを持ったのは

四年前、五人からの出発

でした。伊勢原に住む

添田さんの呼びかけで

彼女の家に月一回集まり

(これは今も同じ)、おしゃべ

りをくり返すうち、彼女が仕事を

始められた関係から、場所を秦野

に移したのが三年程前、会員も徐

々に増えてゆきました。

そのうち「おしゃべりだけではも

の足りない」「会の発展のため、

もう少し学習の場が欲しい」など

の希望から、市の社会教育課が主

催している委託成人学級に入ろう  
ということになりました。これは

会員二十名以上、年八回、二十時

間以上の学習計画を持つサークル

に、助成金五万円を支給するとい

うものです。無理矢理十名ほどの

名前を借り集め、書類を提出した

のが二年前、この学級に入って二

年目が終わろうとしています。

私達のような小さなグループで五

万円の活動費があるということは、

大変な起動力につながります。講

師を呼んでの学習会も盛んになり

ました。

現在会員は二十二名、場所は私の

住む桜町で、町内会用に建てた十

畳和室三間が続く桜町会館を、一

回五百円の使用料を払って使用し

ています。年齢は二十代後半から

三十代がほとんどですから、赤ち

ゃんから幼児までも多数一緒に参

加です。幼稚園の弁当日(週二、



三回)に合わせることも大切な作  
業です(園児八名)。四十代の先  
輩には子育てや教育問題など、豊  
富な経験からいろいろアドバイス  
してもらい、とても貴重な存在な  
のです。

その時々により顔ぶれも変わるた  
め、出席できなかった会員にもや  
った内容がわかるよう、簡単な機  
関紙も出すようにいたしました。  
出産のためしばらく出席できなかった  
会員からは、この機関紙を楽  
しみにしているといううれしい知



# サークル だより

らせが届いております。  
今年度の主な活動を拾ってみます  
と

・「みちことオーサ」上映に協力  
・鑑賞・身障者問題を学ぶ。

・教育行政の問題を学  
ぶ 元市議会議員  
講師

・親子レク  
リエーション  
箱根小

・有機農法  
農園見学（現  
在ここから購入し  
ている人八名）

・映画会市川房枝「八十七歳の青  
春」 安楽いく氏講演  
・東城百合子氏講演 「健康と心  
を語る」

・「わいふ」編集長田中喜美子氏

を囲んで

などです。

そして何といっても今までの最大の  
の行事は市川房枝氏の映画会でした。  
秦野市文化会館ホールを借り  
「とんでもない計画をたてしま  
ったか？」と後悔しながらも、ポ  
スター、ビラ配り、整理券（三百  
円）の売り場に精を出しました。

映画は短縮版の一時、女性史研  
究家安楽いく氏との企画、内容も  
よかったです。結果は大成功、ア  
ンケートも三分の二が回収でき、  
そのほとんどが良かったという声も  
強く、私達に大きな自信を持たせ  
てくれました。保育費をうかすた  
め、とまどいながらも仲間が緊急  
保育を受け持ちましたが、疲れて  
も甲斐があったというものです。

最後の田中喜美子編集長との座談  
会は、私達の話し合いの中で、ス

タイトルの変わった雑誌に対する不

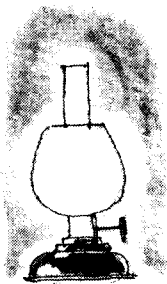
満の声が強く、「編集部と意見の  
交換がしたい」「裏話も聞いてみ  
よう」「女性の自立をどう考えて  
いるか」などによるものでした。

例によって、子供が部屋の中をと  
び回っている中で話し合いです。  
会員手づくりのお菓子、手づくり  
の昼食をとりながらの楽しいひと  
ときでした。この座談会で、今ま  
で遠くにおいてあった雑誌「わい  
ふ」が身近なものとなり、時の流  
れによって変わる雑誌の使命など  
も感じられ、有意義なものでした。  
ところで一八七号は「面白かった」  
と落ちた人気を多少とり戻した感  
じです。今後私達として協力出来  
ることは投稿ということになりそ  
うですが、筆マメな会員が一人も  
おらず、なんとも自信のないこ  
ろです。最後に田中さんの印象は、  
とてもチャーミングで魅力あるス

テキな女性……でした。

まだまだ分からないことが沢山あ  
ります。今年度また五万円の活動  
資金を得て、市川房枝氏の言われ  
た「女性ヨ、権利の上にあぐらを  
かくな」を肝に銘じ、子供達の  
平和を願い、社会のヒズミに注意  
を向けながら、より成長してゆけ  
るよう、皆で頑張ってくださいと  
思っております。

（威能和子記）



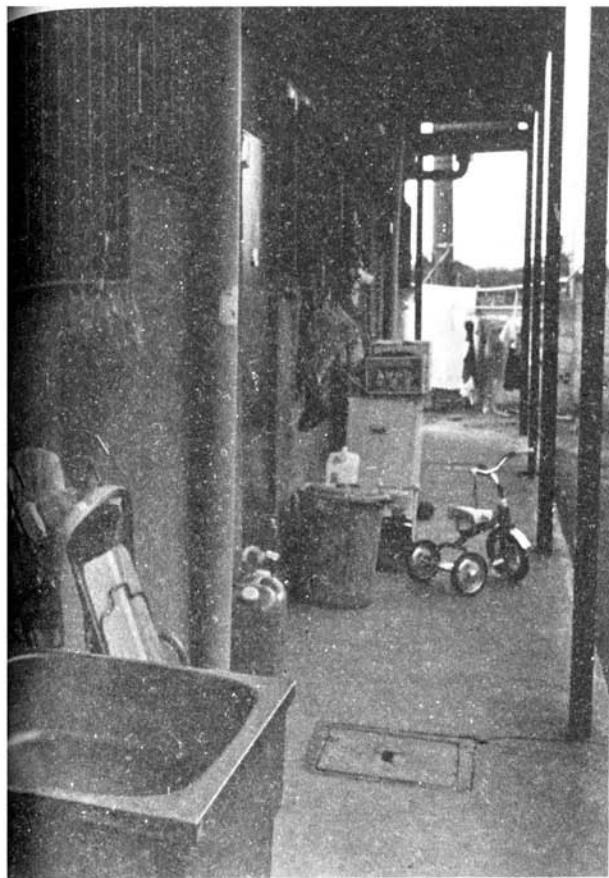


連載第二回

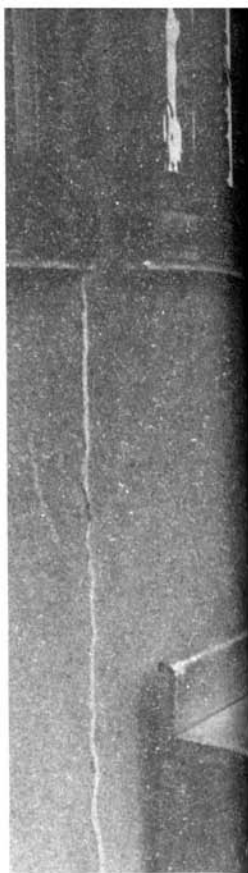
きのえね

# 甲子ハイツ一〇二号室

文●柳原和子







## いらない命なら私にくれれば

大泉学園の家に移り住んだとき、私はそれまでの人間関係をすべて絶ち切った。住所が変わるということとは、どこか私自身に貼りついた時間を変えることにも通じるような気がしたからであった。そのことにも『母と家』の問題は無縁ではない。

当時、母は癌の闘病四年目の冬だった。週三回、コバルト照射と腹水をとる治療のために世田谷からお茶の水まで定期を持って通う日々だった。

その冬は、六〇年代後半から七〇年にかけての若者たちの暑い夏の後であった。癌の母は、夏に揺れ動く私を知ろうと、私も読まない『朝日ジャーナル』や『都市の論理』を見つけてきては「読んだのか？ 説明せよ」と迫ることもしばしばだった。ご多分に漏れず『暑い夏・大学闘争・ベトナム反戦運動』の周辺で、私の友人たちの数多くが、

さまざまに「死」を口にしていた。闘いのなかの死もある。死しても、という覚悟もある。自殺もある。

母は、そんな友人たちの間で、戦々恐々としている私に、たった一言いった。「いらない命なら私にくれればいい」デモに行こうとする私を現場に行かせないために、彼女が一枚のお金も家のなかに置かないこともあった。それでも外に出ようとするとする私との口争いは絶えることがなかった。あるときには、彼女が玄関の土間に座りこみ、コバルト照射で脱け続ける髪に手をかけ、バサリと束になって脱けた髪を私に見せ、泣き始めた。

その数日前、彼女はそれまで一緒に出かけることのなかった父とデパートに行き、かつらを買いおうとして、やめていた。

何かを隠して生きることなど、たかが知れている……」常に本質と向かい合って生きようとしてきた彼女の人生観は、かつらに、何か許せないものを感じたのだろうか。父も同意した。

そんな母が、私の前でふっと頭に手を置いただけで脱げる髪を見せたのだ。



「あんたたちの言っていることが、いくら正しくたって、私の悲しみには答がないのよ。」

お父さんだって、ただ真面目に、家族が生きたための給料を運んでくれて……。自衛隊だって、何も言わずに、ただ誠実に生きようとする人たちに、何か答を出してからデモにでも何でも行きなさい！」

軍人の家族の戦後を、彼女は言外にこめていた、と今は思う。

そんなある日、あれは「オキナワ」の日だった。「デモに来るべきだ」という友人たちの連絡を受け、私は家中の引き出しを探り、一円玉を集め交通費を物色していた。古くからある小ダンスに、ふと白々とした一通の封筒が目に入った。開けた。遺書だった。

同じ所に手帳もあった。母の手帳だ。手帳にはただ「苦しい」「腹水〇〇CC」といった記号的なメモと病院支払いのメモが並んで書かれていた。本来なら家族の生活を支えるための父の月給が、母の高価な癌の治療費となることを、古風な彼女は、書き続けることで自ら確認しつづけていたのである。彼女の死は、自分の苦しさで生命の値段の計算という形で遺書に記されていた。

そんな母が買った、大泉学園の建て売り住宅。その家に移り住んだとき、つぎはぎだらけのバラック育

ちの私が好きになれそうな風景がたった二つだけあった。家の西側にある栗林と、大泉学園の駅舎である。

「家」を買った母親は、引越と同時に病状を悪化させた。しかし、彼女は必死の形相で牛乳とトマトジュースを、毎日飲んでいった。牛乳が癌に効く——とどこかで読んだという。

三日に一度、彼女のお腹に溜る黄色い水は、彼女の腹部にあけられた穴に突き刺された管から搾りだされる。その繰り返しは、彼女の生命の水を、少しずつ奪いとるものなのに、子どもの私にとってみれば、身体の毒が洗われる治療に見えたものだ。

そんな日常の傍で、建て売りの町はみるみる変貌していった。

ある日、わが家の前に巨大なコンクリートの塊が打たれ始めた。——知らなかった——とは両親の言葉であった。コンクリートの塊は、勢いをつけて打たれ、その上に、これまたコンクリートの厚い板がのせられた。田中角栄さんご自慢の関越高速道路の、それが誕生の瞬間である。

わが家の窓からの風景は、激変した。高速道路をよけるように、それまでのバス道路が一方通行となり、もう一本の道路がわが家の前に敷設された。高速道路は、防音装置





であるという金属製のボードで高く囲まれたものの、バス道路を大型車が通るたびに、家は土台からゆらゆらと揺れた。

明日が四度目の入院という日、母は庭が見たい、と言った。戦後、食糧に変わってしまった数々の嫁入り仕度の着物のなかで、唯一残った紬で作り直した綿入れを、彼女の肉の薄くなった肩にかけ、私は窓を開けた。

その日庭には、木瓜や山茶花と混ざって沈丁花が花開いていた。香りが家のなかにまで漂ってきた。四人の子どもを産み、一人は戦後失ったものの、三人を育てあげ、医者代よりも食費を、洋服を買うよりも教育費を、と生きてきた母には、沈丁花の香りは『受験の香り』だった。そういえば、私が物心ついたとき以来、受験生はわが家に絶えたことがなかった。

私には、瘦せた母の後ろ姿しか見えなかった。しかし、山茶花の向こう側に、母の視線がとらえた風景は、たしかに関越高速道路の厚いコンクリートの巨塊だったにちがいない。彼女の眼に、涙はなかった――。

私たちは、何も語らなかった。バスの通行の度に揺れる部屋で、母と私は高速道路の壁を見つめていた。



## 解剖を見せて下さい

母はお茶の水の杏雲堂病院から霊柩車に乗せられて帰ってきた。季節からすれば当然のことなのだが、大泉学園の駅前通りは、古木に満開の桜であった。

その前夜午前二時、彼女は息をひきとった。止まりゆく母の鼓動は、私の指先に今も触覚として残っている。私に対する母の最期の言葉は、彼女と同時代を生きる「母」のものであった。

「ごめんね。あんたがかわいそうで……」

私は医師に解剖を見せてほしい、と頼んだ。

親戚中の顔が、視線が、その言葉に貼りついているのがよくわかった。多分、そのときが、私の「書く」世界の始まりだったと思う。しかし、叔父であるその医師は、実に低い声で断わった。

「いつか、癌を見せてあげる。でも、母親の解剖だけは、見るな。見てはいけない」

解剖室の外で、待った。早朝の解剖だった。一族の代表として、大叔父が解剖室に入っていた。一時間余りの後、白衣の叔父が解剖室からでてきた。手には、母の癌があった。

桜の花——いや、梅の花みたいだ……私は切りとられた肝臓の癌を、そんな風に思った。卵巣から始まり、様々な家族間の心の格闘を食い潰しながら肥大していった癌は、「花」のように見えたのである。

霊柩車に続いてタクシーに乗り、家路についた私の目に駅前の桜並木の白っぽい花の色が、母の癌の「花」に重なってみえた。

玄関を開けると、水が打たれていた。長押しと床の間の部屋に、北枕の床が敷かれてあり、枕元には、錆びついた父の軍刀が横たえられていた。軍刀は銃弾で傷ついていた。何もかも型通りに用意されている葬式と、焼香客の列が、私の心に比して、人々の涙すら明るい世界に見えた。心に入りこまない、遠景の世界として映った。そんな私に、わが家の西側にある栗林は、救われる世界だった。新しい緑を生み出す熱気は、沈みがちな私の心を圧倒したけれど、窮りのない家、儀式、生活から逃げこめる負の世界に見えたのである。私は、自分の心を栗林に隠した。しかし、その栗林も三階建ての分譲マンションと二階建ての賃貸コーポに変わっていった。



栗林がマンションやコーポに変わるのと同じくして、関越高速沿いには、ビッシリと建て売りが並ぶ。日を追うごとに、その数が増え、数が増えるにつれて、土地の広さも三十坪、二十坪とますます小さくなる。土地は狭くなっても、庶民の夢である建て売りの目玉、三DK以上という家の広さは変わらない。結局、庭のない家が並ぶ。デザインだけは、それに反比例して華美になる。

しかし変わり続ける大泉の風景に抵抗するかのようには、西武池袋線大泉学園駅は、あいつも変わらず、木造、かわら屋根の古い風情を守り続けた。

川越街道、目白通り、環状八号線、新青梅街道、と大きな幹線道路に四方を囲まれた駅前は、その凄まじい混雑で人々の愚痴の種だった。主な原因は駅舎の位置だった。大

## ヒューマニズムと質屋

私は何もノスタルジックに古き良き時代を語っているのではない。どちらかというと、昔語りは好きではない。今、今が大切なのである。

今——といえは、甲子ハイツ。引越しも終わり、<sup>わが</sup>城の誕生。少なくともそのはずだった。

しかし、夢みた二DKも、借りることで精一杯。カーテ

型トラックやバス、自家用車が入り乱れ、混雑はコンピュータ操作の信号では手に負えず、町のあちこちにガードマンが立った。人々は、いつも道を探していた。

その結果、大泉界隈の住民たちは、バスを諦め、自転車で通勤することになった。折から健康ブーム、駅前には自転車が増えた。

母が求めた「家」を囲む町の、これが姿だった。母の親戚の一人が、臨終の直前につぶやいた。

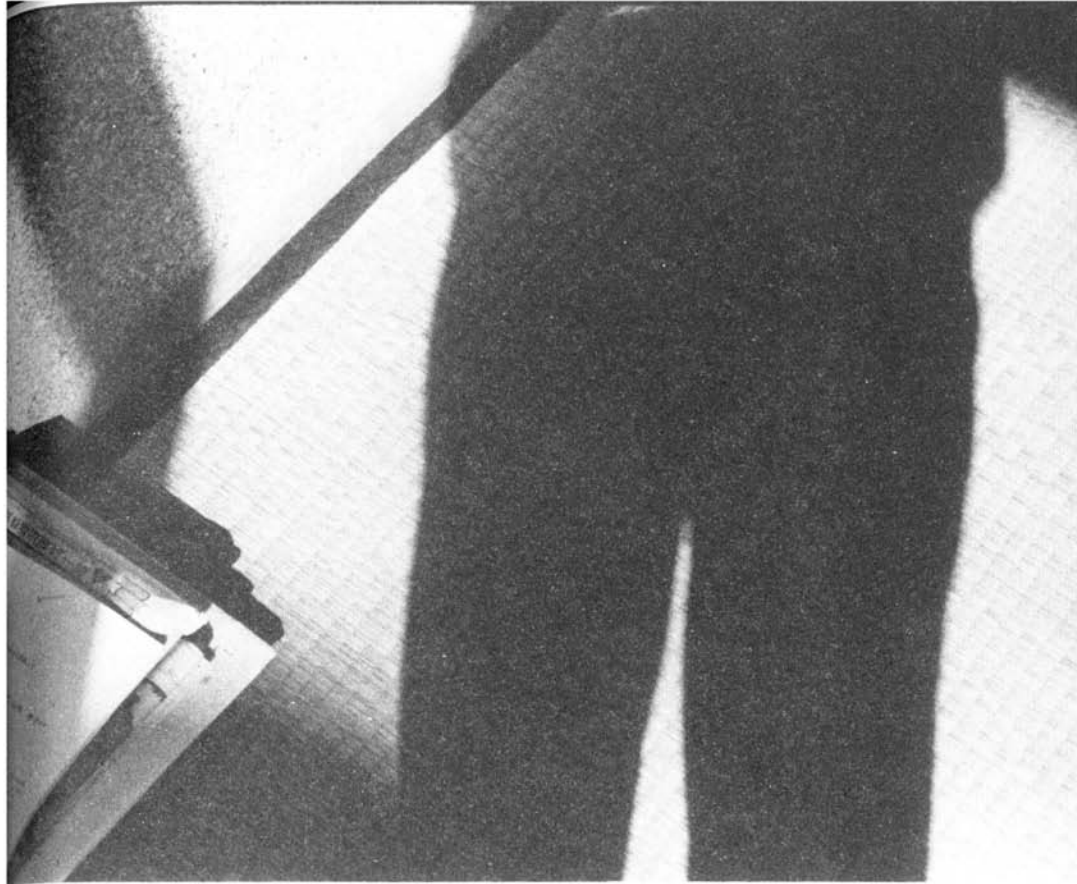
「僕たちは終戦のときに一度死んだんだから。今は余生を生きてきたのだから——」

戦後は、母の死と時を同じくして町の風景を変えはじめてなのである。

シヤ絨緞を揃える余力など何もない。ない、ない、ないで始めた二DK。所在ない。そんな私のつぶやきに、かのK嬢がひとしきり演説する。

「だから和子は駄目なのよ。『生活者』だなんて、口だけなんだから——。何よ、カンボジアだ、難民だ、と騒ぎまわっている癖に誰よりもアナタが難民なんじゃないの。カ







ワイソウなのはアナタ自身なのよ。難民じゃないの。もつともっと生活してみなさい。朝起きて、定期を持って、来る日も来る日も同じように働いて、夜は家に帰って、そして眠る。それも心安らかによ。情緒不安定じゃ駄目なの。心安らーかに」

よくいうよ。と内心舌打ちしつつも、もつともな忠告、いたく心にしみこんでくる。

甲子ハイツの生活は、ドン底の経済状態からスタートしたのだ。原因は、生活力の不足もさりながら、五年前に始めた難民取材にあるといえる。K嬢はそのことについていっているのだ。

NHKテレビの難民報道や、朝日新聞の「難民の悲劇」報道に刺激されたわけでは、断じて、ない。コマーシャルの編集をしていて、少し安定しかけた収入へのやりきれなさや物書きを目指す私自身の反省もあった。いって見るなら、二十代最後を、もう一度原点から生き直してみたかったのである。みたい、と思ったのが難民との付き合いの始まりだった。

以来四年間、難民騒ぎ。預金は見る間に使い果たし、二度、三度とタイ、カンボジア国境へ、その果てに一人の難民少年とのしがらみから、アメリカのミネソタまで足を運ぶ。独身貴族など誰のための言葉なのか。揚句の果てに、

あるカメラ会社の協力で写真展などやってしまったのである。それも、頼み頼まれるままに全国十カ所での開催。下手な写真展でも、ケナゲに生きてみたいと始めた仕事、意地でもやりきろう、と。

おまけに、それまで仕事をしていた親会社が資金繰りを理由に百数十万円の未払い。仕事を辞めそうな私に払う金はない、ということらしい。

どうも日本の社会、虚業産業に労働する人、それも難民なんてことをやる人は誤解されやすいようである。たとえばお金。豊かに見えるらしい。市民団体や学生さんから話を聞きたいといわれれば、どこまでも泊りがけで出向いた私。『難民問題では商売度外視』を決意してはいたものの、そうは見栄が続かない。

たとえば写真展と講演を頼まれる。

「私たちは、難民のために何かしたい、と考える者たちの市民の会です。一度、討論会に来てくれませんか？」

「もちろん、いいですよ」

「いいですよ」の後に、実は——とくる。

「実は、広島なんです、資金集めのための集会で、謝礼はさしあげられないのですがそれでもいいでしょうか？」

「……」

「……」



「いいです。もちろん！」と答えざるをえません。ことは難民です。ヒューマニズムです。

それから私は金の工面に走る。私のカメラは、以来、何度も質屋の倉庫に入った。顔なじみとなった質屋さん。今ではいろいろの社会情勢にいたるまで話しこむ間柄となった。

「大泉ではね、着物と毛皮位しか洋服は受けつけませんよ。宝石だってちっぽけなものしか来ないし。皆サラ金のほうがいいのかな。担保を払った方が安心だと思うけどねー」めっきり減った客筋を話す質屋の親父さん。親切そうに見えても心は冷たい。カメラの値段は、一回一回と安くなる一方。質屋道なんて、どこにもかけらもない。

そんな私に、大阪のPTAから講演の依頼があった。往復飛行機、一泊ホテル代付き、写真展こみで二時間講演、二万円也。

くだんのK嬢、すかさず電話をかけてくる。

「和子、PTAで講演をするんだって？ 出世したじゃない。それで何着ていくの？」

私が話すことなど、「生活感なし」とトンと信じないこのK嬢、気にすることは見た目――

「Gパンでいいんじゃないかな――」

「駄目よ！ PTAに来るとき奥さんたち素敵な服を着て

くるっていうわよ。それに、大阪の豊中でしょ？ 高級住宅地なんだから、売れないフリーだからって、突っ張っていかなければ駄目よ」

何しろ、軽薄を信条とするのがK嬢である。しかし、彼女の指摘も軽薄と笑えないのが世の中。着ている服は、とても重要なのである。

「バシッと決めていかなけりゃ、ネッ！」

「……ウン」

フリーは客商売というK嬢の忠告を心に受けて、企業広告の仕事をしていた頃の服をひっぱり出す……と、会場からの視線の痛いこと。服装で判断されているようである。

「難民のことをやっているから、もっと地道な感じの人かと思っていたら……」

慣れない壇上で冷や汗をかく私を、日頃のGパン姿がすすめます。

カメラを質に入れ、区の福祉事務所に借金して、親会社の倒産騒ぎを何とか切り抜けたこの私。カーテンも絨緞もない、この私に、世間は何とも冷たい。ヒューマニズムはかくもケナゲでなければいけないのですか？ 人間には、健康もあれば病気もある。良心もあれば邪心もある。善意もあれば野心もある。それこそがヒューマニズムではないのか。



## 仕事も未来も不安だらけ

守らなければならないのが甲子ハイツ。私はありとあらゆる知り合いを訪ね、仕事を頼んでまわった。

「何でもやりますから。もう『自分が書きたいことしか書きません』なんて、生意気はいいません」

そうしなければ、維持できない二DK。

そんな私を救ってくれたのがテープ起こし。虚業産業の裏舞台である。座談会やインタビュー、講演のテープを原稿の形にする仕事だ。

始めた頃は相場が低く、一時間分が一万円という値段。今では一万八千円、とランクが上がったものの、一時間分のテープを原稿用紙に書き直すのに、普通の人で約七〜八時間。

しかし、テープ起こしの仕事も生活するほどには数がない。近頃では「主婦のパート」という商売敵が、本職よりも遥かに安い値段でやってくれてしまう。

「和子、生活よ、生活。それが生活者の苦しみよ。耐えなさい。今にきつと、生活が見えるようになるから、そうすれば文章も書けるようになる」

——K嬢、的確な所で、的確すぎることをいう。チェッ

お節介友だちメ。いつも正論だから嫌なんだ。生活、生活、セーカツ。

私は一日中、カーテンのない部屋で机に向かう。

コンナハズデハナカッター——これが二DKの夢の中間報告である。

テープ起こしの仕事も、そうはあるものではない。恋人候補氏も、そうは遊んではくれなくなった。なにしろ、熱しやすく冷めやすい芸術家気取り、甲子ハイツのセーカツが始まった頃から、熱情も冷め始めたらしく、彼も再び旅人を気取りだした。

ドウスリヤインダノ、仕事も未来も不安だらけの私が、甲子ハイツの二DKと、二十四時間の長すぎる時間をもて余す。不安は不眠症を誘発することとなる。

そうなると、甲子ハイツのキンピカ緑の民宿壁が気になります。そして、天井を飾る白と黒の市松模様の棧が、眠れぬ私、意識ばかりが肥大する私の神経を攻撃してくるのだ。この市松模様の白い色と、壁の金ピカは、ほんの薄明りにも浮きあがる。誰だノ、こんな壁とこんな天井を設計したのは——。



今では過去形となった恋人候補氏が、「温かい家庭が嫌い」といったからではないだろう。元々、中途半端な建て売り家庭の温かさより、無機質なホテルのほうが好き、という私自身の性格もある。だから、壁には何も貼っていない。いつでも引越せるように部屋はガランどうのまま、カ

ーテンはない。

部屋を訪れる友人たちは、こんな部屋のどこにいいのかわからない。テーブルも椅子も、茶菓もない。はなはだ居心地悪いから、誰もがアタフタと帰っていく。

そして誰もが、ヒカヒカ緑の民宿壁と市松模様の天井棧についてひとしきり論評していく。

「女の部屋だか、男の部屋だかわからないよな。これじゃ、色気も何もあつたものじゃない」

——という訳で、この甲子ハイツでは、どんな男性が来ても女である私は恐ろしい目に遭わずにいるのです。壁と棧のせいだろうか？

不安に肥大した私の神経は、当時どんな親しい友人たちも辟易するほどに、甲子ハイツが気になっていたのである。仕事がないときは、市松模様の天井を見つめて過ごす。ただ時間を茫洋と過ごす。ある落語家が余暇を考えるシンボジウムの席で、こんなことをいっていた。

「これからの時代、自分が誰からも期待されない人間だ、と思ひ知りながら、四畳半で暇をどう過ごすか、が問題だ。四畳半をゴロゴロ転がりながら、何回転で部屋が終わるのか、それを考えて、暇を過ごす」

売れない彼がいう言葉が奇妙に突き刺さる。





## 三十センチの太陽を求めて一年間

寝転ぶ私がすりつくのが電話、そして日に日に細くなる神経が逆なでされるのが、甲子ハイツの生活の音である。生活の音とは一体何か？

早朝三前半、ヒタヒタ、ガシャン、バサッは新聞配達の声。朝六時、独居住まいの老女がシャッターを開ける、続いて、これまた独身中年職人さんが出勤する車のエンジン音。時には彼を迎えにくる同僚が扉をたたく音。朝八時十五分、一斉に「おしん」の音、テレビの音量はグンとあがる。どこからともなく洗濯機の回る音、洗濯物を干すガラス戸の開閉の音。向かい側の女性が出勤のカローラのエンジンをふかし始める。子どもの通学のおしゃべり。小学校から朝礼の音、音楽。幼稚園のマイクロボス待つ主婦たちの声、ゴミ収集車の回転音――。

十時を過ぎれば、「かわいい、かわいい魚屋さん」と童謡を流しながら、出前の魚売り。ひとしきり群がった奥さんたちの話し声。

昼、「笑っていいとも」――そして笑い声。

そして……。

ふとんである。もの凄いいくまに聞こえるあのふとん

たたきの音。パンパンパン……。

偏見ではない、と思いたい。とにかく音が大きいのである。何か恨みでもこめているのではないか、という音だ。

もう一つ、大事なものは太陽。甲子ハイツ一〇二号を決めたときが雨の日だったから、入居してみて初めて、この部屋に太陽が当たらないことに気がついたのである。

いや、引越した当初は、まだ夏であり、振り分け南向きの六畳、四畳半の窓際一メートル五十センチ位は、それでも太陽の光がさしこんでいた。

しかし、しかし、情緒不安定、職も不安定、経済もつと不安定、外向きにはヒューマニズムの突っ張りフリーライターの現実と未来を暗示するかのように、冬に向かうにつれて、太陽は一センチずつ、減っていくのである。

十月には五十センチ位しか、太陽は残っていない。一月には皆無。天気なのか、曇りなのか、一〇二号室にいる限りはわからない。

甲子ハイツは二棟並んで建てられている。南側に一DKが十部屋、北側に二DKが八部屋ある。南棟と北棟の間には、約五メートル強の幅の通路。この二棟を、ブロック塀



が囲み、東と西が門として開いている。北側にも二つの鉄製の扉が、壊れたまま口を開けている。つまり、このブロック塀は、外敵から身を守るためのものではなく、所有境界線を示すためのものでしかない。西側には、八台位の車が駐車できそうな砂利敷きの空地。

南棟は一DK、独り住まいの人が多い。北棟は二DK、私を除いたほとんどの部屋が四人家族。主婦たちは皆、専業主婦である。北棟の一階は、冬になると太陽に縁のない生活となる。

「昼間働く独身の部屋に太陽があたって、家族アパートに太陽があたらぬ——これは何か暗示的じゃない？」

またしても鋭いK嬢の指摘。

かくして、私は太陽を求めてふとん干しに甲子ハイツを右往左往することになった。

大体がセーカツに疎い私ではある。しかし、これまで老舗のバラックから、新興建て売り四しDK、そして借家住居の一人暮らしのときも、太陽に不自由したことがない。ましてふとんは重く、押し入れに整理するよりは、太陽の陽にあてたほうが、労力も節約できるし清潔だし、夜はフカフカ……。

そんなとき、セーカツの実感。その程度が私の生活の喜びだった。

だが、ここには太陽がない。二階の住民たちは、毎日ふとんに太陽を浴びさせている。下の住民は、といえば、東側の人は午前中、西側の人は午後、集中的に干す。

問題は私の部屋と隣の一〇三号室だ。一〇三号室の若妻は、駐車場に物干し台を作り、干している。私は——。何しろカーテンもない、物干し竿もロープでごまかしている。ふとんを持って、アッチをウロウロ、コッチをウロウロ。意を決して、ブロック塀にかけた。通行人が見たとしても、構うことあるものか。太陽が欲しいのだ。

十一月になると、私の部屋の太陽は、ほとんど三十センチもなくなくなった。それも午前中のほんの数時間だけである。その数時間、三十センチの太陽が、時どきなくなる。ふと考え、じっと見つめると、原因は二階さんのふとん干しにあった。できるだけたくさん太陽をふとんに当てよう、とはかり、二階さんのふとんは、ペランダの下、私の部屋のガラス戸の所までぶらさがらる。シートや毛布、敷ぶとん、掛けぶとんが、約七十センチ位、私の部屋の前にたれ下がる。清潔な生活、主婦の気構えである。

私だって、通りに面したブロック塀に、自慢できそうにもないふとんを干したのだから、主婦たるもの、当然だ。しかし、眼の前のヒラヒラの毛布、シートは気になる。





男友たちが来るときなどなおさらだ。しかし、セーカツ、共同生活、我慢。相手は生活の中心、主婦なのだ。

一年が経過した。しかし、二度目の冬を迎えて、私には三十センチの太陽がたまらなくとおしいものとなっていた。

意を決した。ちょうど、民法の本のライトもしていたときだ。これも日照権の主張ではある。

でも、どう言えはいい？ 父は不動産屋に言えという。姉は勇者のごとく妹をかばい、

「アタシがうまく言ってあげようか？」

いや、その位言えなけりゃ……。そして、ある日……。お客さんを楯にした。

「あの、お客さんが来るので、もう少し、ふとんを、上のほうに、ズラシテ、ク・ダ・サ・イ・マ・セ——シカ……」

気の弱いことおびたらしい。生活者の主婦に、私は言葉が出ない。しかし、答は意外だ。

「今日だけでいいのですか？」

「いいえ、いつものことです」とはいえなかった。分かってくれる、と思ったのに——。

一カ月後、二度目の日照権の主張は正攻法にしてみた。

「あのー、ふとんで太陽が部屋に入らなくなってしまうので、もう五十センチだけ、上にあげてください」

「アッ、でも一階はどうしても太陽が当たらないですよ」

「でも、三十センチの太陽が、ふとんのヒラヒラでなくなってしまうから——」

三十センチの日照権を主張するまでに一年間。ホント二、コンナバズデハナカッタのです。

しかし、今日もふとんは私の眼の前にたれ下がっています。そう、春を待つしかない。



投稿ホットライン——百聞は一見に如かず

# 観たり聴いたり

おいしいとは限らなくとも何でも食べてみよう  
各種イベント・感動と失望の記録

## 「ロミオとジュリエット」を観て

東京都杉並区 山本 陽子

生まれて初めてバレエなるものを観た。それは、貝谷八百子演出振付による「ロミオとジュリエット」であったが、観に行くまでは「はたして、せりふのない『ロミ

オとジュリエット』なんて一体どんなものだろうか」というような気持ちであった。  
ところが、いざ始まってしまつと、そんな懸念はあっという間に

吹き飛ばされてしまい、ぐいぐい舞台にひきつけられてしまった。ロミオとジュリエットの愛のデュエット——はたまた、ロミオを慕うジュリエットの可憐なソロや、ロミオが死んだ後のジュリエットの深い哀しみの踊り等々、せりふが一つもなくとも充分に、しかも見事に情感を伝え得る踊りにすっかり魅せられてしまった。ストーリーなど百も承知でありながら、ラストシーンには、やはり涙を押

え切れず、本当に感激した。

「お芝居はともかく、バレエなんて」という方も、もしかしたら、いらっしやるかもしれない。でも、私だけでなく、私と一緒にいった他の二人も「本当に素晴らしい。またぜひ観たい」と口をそろえて言っている。やはり、ホン・モノはホン・モノ——ぜひ一度、バレエも観てくらんならねよう、お勧めする。



(え・松本をきえ)



# わいわいガヤガヤ

## 娘との語らい

—避妊について—

神奈川県横浜市 北川 洋子

何気なく開いた娘の少女雑誌、かなりきわどい性描写にビックリ。

「婦人雑誌といえばエロ本の代名詞かと思ってたけど少女雑誌もまけてないわネー。この頃の若い人は大人になる前に何でも知ってるってワケね」というと「でもね、正しい避妊の方法なんてのはどこにも書いてないし、誰も教えてくれないよ」と高二の娘、抗議の目つきをする。「それは悪かったわ。じゃあ今度教えてあげるから」と娘からの話題にして

もらって考えてみると、これがかなりの難問である。

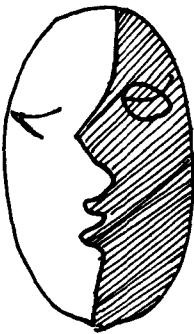
あれやこれや考えたが、結局ケースワーカーの若い友人に相談する。彼女はアメリカ在住の娘時代からピルを常用している。今三代なかばになって、子供をほしいとかほしくないとかしじゅう口にしながら、結局仕事にさしつかえるから子供を作らないことにきめたと宣伝している。

「娘に宿題もらっちゃったのだけど、私はどれが正しい避妊の方法か挙げる事ができないのよ」「娘さんももう大人なんだから、貴女はこうこうこういう方法があるって一々長所・短所を挙げて、選択は彼女に委せればいいのよ」ケースワーカーの回答は明快だった。

それでも暫くの日数を経て、私は娘に迷いながら説明した。

「避妊にはね、いろいろな方法があるのよ。オギノ式というのもあるって、これは毎日体温を計って排卵日を知るのだけれど、貴女みたいにまだ若くて生理日がメチャメチャ不安定な人には向かないと思うわ。リングというのは専門の医師に自分の子宮口を測ってもらって挿入するのよ、これはかなり成功率は高いけれど、未婚の娘がするには抵抗があるでしょう」

「いやだよそんなの」





「私も避妊の負担を女性だけが負うというやり方って好きじゃないのよね。ピルは良いという人がいるけれど、今色々なクスリの副作用が言われている時、微妙なホルモンの操作を何年も続けてすることの副作用のデータもまだ出揃っていないみたいだし、私は恐ろしくて止めてもらいたいと思ってているの。若い人は今後健康な次の世代を産むという使命をもっているのだからね。」

後一つ知っているのはコンドームで、これは一番手軽なのよ。だけど、まだまだ男性が処女性を問題にする世の中で、それを用意しているだけで手軽く貴女が扱われることもあるかと思うと、迷うのよ。『この娘は堅実な娘です。真剣にセックスを考えてこれを使おうとしています』ってママが上書きに書いたのよ」

「バカダネー」

「余り過保護かな」

「そうだよー」

「ただセックスって精神的なもの。肉体的なものと同じ位に、人間の場合は社会的なものだ。」

「のね。まだまだ古い観念がはびこって、処女とかはじらいが女の宝だと思ってる人達の方が多い世の中だから、無理に損することも無いと思うのよね。結婚で一人の男に決める前に、人間の本質がはっきり判るセックスの経験をもっている方が、まるきり無知であるよりも失敗が少ないということは確かなんだけど。」

とにかくケースワーカーはあなたに選択させろっていうけれど、私はやはり娘だから親としてこれが一番良いっていうものを薦めたくてね。貴女は大人かもしれないけれど、私はあなたのシアワセに責任を感じたいと思ってるんで悩んじゃったの。それが母親やってる役目だと思ってる」

イッシュョケンメイに考えた母親の答えに、娘は半分以上納得してくれたみたいな顔つきに私にはみえた。

が、進歩的を気取ってオープンに話した母親のホンネを見抜いて、娘はやさしく言ったものだ。

「ママ、避妊の方法を聞いたからって、私に



はする気はないんだからね。心配しないでいいよ」

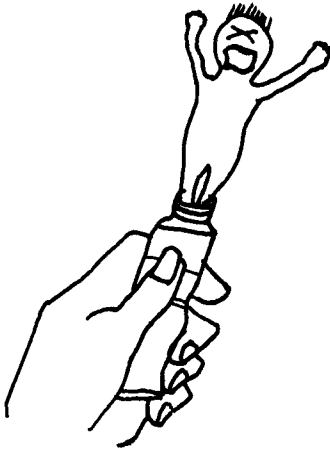


## 計画できること・できないこと

山梨県北巨摩郡 古池けい子

娘は三歳四ヶ月。子供はなるべく、間隔をおかず、体力が許す限り、年子で三人位は、欲しいと思っていたが、こればかりは神様からの授かりもの。予定では、今頃三人目を産み終えて、再就職の準備も着々と進めているはずだったが……。

ようやく授かった二人目、五カ月に入りながら、流産してしまう。直前の定期検診では子宮口はしっかり閉じていたのだが、突然、胎胞が出てしまい、気付いた時には手遅れだった。そして、退院一カ月後の検診で、子宮頸管無力症と診断される。普通は閉じている頸管が、妊娠の中期に開いてしまうというもので、これには、縫縮手術で、末期までもたせる方法があるという。しかし、私の場合は妊娠中でないのに、今も開いたままだという。まず、運良く妊娠できるか、次に縫縮手術



を受けられる中期までもたせることの困難さ、そして、術後、無事お産までこぎつけられるかを考えると、つい気も滅入りがちになる。「いいじゃないの、一人いるんだから」となぐさめられるが、なんとしてもひとりっ子にはしたくなかった。かく言う私はひとりっ子、幼稚園に通う頃から「寂しいでしょ」と言われ、何か、欠点、弱点があれば「やっぱり、ひとりっ子はダメね」少しましなところがあると、「ひとりっ子の割にはよくできた」と言われ続けてきた。結婚する時、姑は心配して、「ひとり娘で、わがままではないか」と

夫に言ったそうだ。(今も思っているかどうかは不明)

ところで、私の両親にしても、この家族構成は、別に決めてしたことではなかった。両親は、ひとりっ子なので、特に過保護にならないように気をつけて育てたというが……。

そもそも、そう意識するところが、不自然ともいえる。私自身はといえば、はなからひとりなので、寂しいなどとは思っていない。最も損だと思うのは、兄弟がいらないから、社会性がないのではないかと、先入観を持って見られることだけである。(そして、それが、一番嫌なのだが……。)

そんな訳で、結婚について、具体的に考えるようになると、経済状態が許す限り、子供は沢山欲しいと望むようになっていた。

しかし、思うことは、うまくいかないもの。世の中、望んでも得られないものは数あれど、子供もその中のひとつだった。かくなれば、ひとりっ子、かわいそう、と言われてもめげないたくましい娘に育てようと、決心している次第です。



## いのちの氣になること

東京都新宿区 S・E

このごろとみに思うこと、それは年をとったせいなのか……。

たとえば、公園内で遊んでいる小さな子供達が水道の水をジャージャー出しゃばなし、若いお母さんはニコニコ見守っているばかり。

電車の中では、お年寄りが目の前に立っていても知らぬ顔……自分だけは年とらないと思っているのだろうか。ヒザをおっぴろげて何人分もの席を一人じめの男に、新聞をおとなりさんの目の前にまでひろげて見ている主、狭い電車で足を組んでいる日本人（サマにしないのだ）こんな最低の常識もわからないのか。

ある日、なんとかカウンセラーという女史の講演会を聞きに行った。女史は、冠婚葬祭などの付き合いは一切しませんでした。私のお母や祖母は、義理とふんどしは欠い

てはならぬ——という言葉を使っていたので、大切なことなんだなと子供の時から思っていたが、まあどっちがよいのか、ナンセンスかわからないが、これも日本古来の四大礼式の大切なものではないだろうか。皆ごもつとも——と頭をこっくりこっくりしていたが、私は一人で力んでしまった。

むなししい日々を過しておりますが、せめても我が大学生の二人の子供よ、普通の頭脳を持った人間であってほしいと念じます。

## 日本の恥

神奈川県厚木市 真崎 恵子

海外における日本人の動向がよく取沙汰されます。農協などの団体旅行客が腹巻から財布を出したとか、ブランド物を若い女性が漁りまわるとかいう、嘲笑を伴ったものがその殆どです。

しかし、嘲笑で済まされないものに、所謂、妓生旅行があります。旅行社が躍起となって

ツアーを組み、日本に残る家族（妻）には知らされない形で韓国などで妓生を斡旋します。強要ではないのですから、はねつければそれ迄でしょうし、旅行社や妓生にしても、その斡旋を手放しで受け入れる状態あつてのことです。海外へ、好色を貪るために出掛けて行く既婚男性の情けなさ——中には、海外ならと許す妻さえあるそうです。その心理はどのようなものなのでしょう。

夫が女性を買うことを認める妻は、先ず女性自身全てを卑しめることであり、自分の夫の品性の欠如を認めることであると思うのです。近ごろは色々と巧妙になり、例えば、自営業者などを対象とした、若干の権威はあるはずの組合・団体の研修として組まれ、その大義名分にスッポリ収まって遊ぶ人々も多いようです。『行きたい人は行けば良い』で済むのでしょうか。

日本がどれ程その方面にかけて金銭を惜しまないか、品位のかけらもない行為が、どう見つけられているか、どう評価されているか、それらを考える時、恥ずかしさを感じずには



いられません。心ある日本人旅行者への迷惑は如何ともしがたいはずでし、諸外国の、日本へのイメージが悪く固定して行くように思えてなりません。

## ああ バレンタインデーノ

岐阜県岐阜市 市川 弘子

二月十二、三日、バレンタインデー特設コーナーに群がる女性。幼きは幼稚園の女の子から、上は七十歳以上の女性（おばあちゃん）まで、実に数多くのチョコレートが売れて行く。一粒三十円、五十円もする、カラーホイールに包まれたハート型のチョコ、ペアになったもの、色とりどりだ。メーカーでは年間売上の四分の一をバレンタインデーで上げると言う。バレンタインの意味すら知らない三歳や四歳の幼児に、母親までが代行して買求めるに来る。チョコレートを贈る主のない私としては、実にバカらしいと思う（ひがみかな）。実際自分のまわりを見回しても、らしい男が



いないのだ（淋しいかぎりである）。

二、三日して、仕事のついでだと言って、フラリと立ち寄った男友達。会社の若い女の子達と、今年五年生になる娘さん、最愛の奥さんからもらったとか……。『お前さんはチョコレートをやる相手が見つかったか』と冷やかしの一言。『ふん、そんな者がいるか』

行きつくところ、男と女の話になる。「あなたは私をどう思うか」ちょっと、切口上で聞いてみた。彼、苦笑して「お前さんとは、そんな気は起らないよ」私、憤慨。「そんなに女としての魅力がないのか」「いや……お前さんとはこのままがいい。意識しないでいられる」ムカッ！「同じ事じゃないか」訳は次のような事だそう。

お互い友達を取ったら、男と女になる（わざわざ書いて示す）。そうなれば、俺は女房、子供に、お前さんは世間の人に後ろめたい思いをする。そんな気が作用して、二人の間になんて、今迄はなんでもなく話し合えた事だって、話しくくなるんじゃないか」それは私も同感だ……いい年をして、でも、ちょっと、彼の奥さんが、うらやましいと思う。来年のバレンタインデーには、板チョコを一枚贈ろうかな……。

すっかり髪に白いものが増えた同じ年の男友達、やっぱり女は、生まれた時から、年を重ねても、夢を見るのが好きなのかしら……。私まだ四十七歳、ちょっと乙女チック。



# 留学の風景

——そこで私はいつも一人だった

関野 光代







## はじめて

「留学」なんて、珍しくもない御時勢である。隣のお姉さんはイギリス留学中、親戚のおじさんはアメリカの支店で働いている……こういった会話が日常的に交わされている。本屋をのぞくと、「××留学記」なるものがずらりと並んでいる。

私も、某奨学金を運よく手に入れ、フランス留学が決まってから、留学準備を兼ねて、その種の本を何冊も読んでみた。ハウ・トゥーもの、エピソード集、文化比較論——今読み返してみても、それらの本に嘘は書いていない。成程、確かに、ごもっとも、とうなずける。異国の生活や、その国の人々のものの見方、考え方を知るには、経験者の話を聞くに如くはない。

しかし、私にとっての留学と、これら情報としての留学記との間には、天

と地ほどの差があった。

誰かが私に尋ねたとき。

「あなたにとって留学生活とは？」

または、単に漠然と、

「この一年、どうだった？」

そんな時、一言で答えられないものどかしさに苛立つ私の頭をよぎるのは、たいそうな文化比較論でも、おもしろおかしい道中エピソードでもなく、たとえば、寮のへやで一人、ゆっくり暮れてゆく空を飽かず眺めていた自分、オレンジ色の街灯にはんやり照らされた石畳の道を一人、冬の寒さに背を丸めて足早に歩いていった私、言葉も通じぬ国の、ある街の広場で、夜行電車を待ちながら、行き交う人々を見つめていた私の姿、なのである。

そのどれもが、私の留学生活の一枚の風景であり、その風景の中で、私はいつも一人だった。一人だったからこそ、友人を求め、議論をし、勉強し、お祭りをし、旅をした。



「一人の風景」こそが、私の「留学」であったのだと思う。人は誰でも一人である。それが、日常の生活にあっては、個々の「一人の風景」は、ぼやけ、鮮烈な輪郭を失い、喜びも厳しさも中間色に溶け合ってしまっている。

私は、私の過去の一片たりとも知る人となない異国の地で、自分の姿が、フランスの澄んだ空気に映え、鮮やかな輪郭を取るのを見た。鏡に映るように、自分と向かい合わせられるのを感じた。

異国という鏡の前で、私は自分に出会ったのである。私は一人であった。どこまでも一人であり、ただ、一人だった。

これは、特別な留学記ではない。それまで一度も日本を離れたことのない二十二歳の女が勉学のために渡った異国の地で、たった一人の自分と向かい合った——言ってみればそれだけのことであらう。しかし、それだけのこと

のうしろに、確かに存在したものがあ  
る。正体のつかめぬ焦りと逡巡——。  
そんなものを語るのは邪道だろうか。  
いや、私は、その一つの戸惑い、一つ  
の失敗にこそ、「留学」の意味があったの  
だと思う。つまり、私にとって、「留  
学」とは、何をした、かをしたとい  
うこと以上に、まず、その内面的経験  
——私自身の発見と変容——であつた  
のだと、今心から思うのである。

## 留学生活、その実情

私が最初の二カ月を過ごしたのは、  
パリからそう遠くない、ロアール河沿  
いのある中型都市である。街の大半は  
戦争中爆撃を受け、わずかに残る北部  
の旧市街地に中世の面影を留めるだけ  
である。二つの河に挟まれた街は、整  
然と、碁盤の目のように区画され、街  
の中央を貫く大通りの両側には、マロ  
ニエの木が行儀よく並んで緑の木陰を

作っていた。その通りを南にたどり、  
わずかに東に外れたところに、私の住  
む大学都市はあった。

巨大なコンクリートの塊が三つ、殺  
風景な芝生地をはさんで立っている。  
巨大な、と言っても、私の住んでいた  
一番高い建物でも六階建てであるが、  
家の高さがだいたい三階までに規制さ  
れている、均正のとれた美しいフラン  
スの街並と比べると、図体ばかりが大  
きい、味気なくみずばらしい建物であ  
った。

当然、部屋も粗末なものであった。  
しかし、七月末日本を発って十日間、  
放浪を続けていた私には、やっと自分  
の部屋を持てた、という安堵感の方が  
大きく、美醜などどうでもいいことで  
あった。

元来私は旅好きで、必要最小限のも  
のをリュックに詰めて、計画もなく歩  
き回るのが得意であった。フランスに  
向かう時も、外国へ行くのは初めてだ



というのに、リュックが大きいのスーツケースに変わっただけ、ちょっと長めの一行をしてくるような気分、一泊目のホテルの予約さえせず、日本を飛び出してしまった。

パリ到着当初は、さすがに疲れた。大学ではフランス語を専攻していたから、会話に不自由はなかったが、たった一つのことをするだけで、精神も肉体も、どっと疲れた。

たとえば電話をかける。たとえば郵便局で手紙を出す。フランスの電話や郵便局がどんな仕組みになっているか、予備知識はあったはずなのに、当初はこういった些細な行為に全身全霊をかけるなければならなかった。まるで、大海にはっぱり出された子供のように、手足をばたつかせ、あっぱあっぱしていたのである。

今考えると、どうしてあんなバカなことをしたのかと不思議に思われることもある。

パリ到着二日目ドイツに三日ほど行く用があり、二十数キロもあるスーツケースを、日本の友人の文通相手の家に預けに行った時のことである。住所だけを頼りに、見ず知らずの人のところへ乗り込むのは気がひけたが、ほかに知り合いとてないパリ、そうするしかなかった。

こんな大荷物を抱えている場合、タクシーに乗るのが常套手段だろう。それが、こともあろうに私は、地下鉄を乗り継ぎ、いくつもの階段を悪戦苦闘し、汗を流してスーツケースをガラガラ引って張って行った。

奨学金は、これから勉強する街で受け取る手筈になっており、パリ到着当初、余分なお金を持っていなかったというのは本当である。それにしても、よくまあ、こんなしんどいことをやっていたのけたものである。

からだの幅くらいしかない、名前がについているのが不思議なほどの犬の糞

と汚水にまみれた道の奥、やっと見つけたそのアパートは、貧しい外国人移民ばかりの住むところであった。通訳をしているスウェーデン人のウルフト、運送屋の事務をしているドイツ人のユルゲンが、二間しかない手狭なアパートに、気さくに私を迎え入れてくれた。住所だけを頼りに初めて訪ねて行ったパリの住人が、外国人だというのも、期せずして、フランス社会の現状を象徴していてもしろい。

その夜、ユルゲンは、私を近くのクスクスレストラン（アラブ料理屋）に連れて行ってくれたが、私は、極度の緊張に身心共に疲労困憊しており、レタスだけのグリーン・サラダしか、喉を通らなかつた。

こんな具合に、私の留学生活は、全く無鉄砲に、幕を開けたのである。





八月、ロアール河沿いのその街に着くや否や、私は同じ寮に住む、数人の日本人と親しくなった。

この街での語学研修を終えると、スタンダールの博士論文の準備に取りかかることになる。通称トッツァン。恰幅がよく、ベートルベンタイプの髪に眼鏡をかけ、すでに大学教授の風格がなくもない。眼鏡越しのまなざしは落ち着いてやさしく、それがトッツァンという愛称の由来かもしれない。

アニキは、すらりと伸びた長身に天然パーマの髪を横分けにし、かつてよい男の条件を備えているはずなのに、片手で額にかかった髪などかき上げるしぐさがいかにもキザと鼻についてしまうタイプである。部屋中に、自分でタイプした宿題の小論文を張りめぐらしては悦に入っていた。フランス史を大学院で専攻しており、その道ではすでにかなりの著名人と交流があるようなことをよく聞かされた。



トシは、私と同じフランス語学専攻である。ごく普通の、現代大学生風、と言っても人によって描く像がちがってしまふだろうか。音楽が生活の中心といった様子で、日本から大切に持って来たラジカセで、ひっきりなしにニューミュージックを流していた。「これは新宿の××で買ったシャツ。このストライプがなかなかいいだろう」

彼をミーハーと呼んだら、大学生すべて、ミーハーということになりそうである。

もう一人、韓国人のホンがいた。すでに一年ほどフランスに住み、これから数年、腰を落ち着けて建築の勉強に取り組むため、下準備をしている。電気釜からテレビまで、本国から持参しており、彼の部屋に行けば何でもあると言われ、事実その通りだった。ダンスが上手で、人一倍はしゃいで人を笑わせるくせに、細い肩を丸めた後ろ姿は、いつも胸をつくような淋しさが漂

っていた。

この四人は部屋が隣同士で、ドアは開けっ放し、ほとんど共同生活をしているようなものであった。私は、食堂を間に挟んだ別の建物に部屋を持っていたのだが、寮生活を始めた当初は、先輩の彼らに聞くことも多く、しょっちゅう行動を共にしていた。

誰が言い出すともなく、毎晩、彼らのうちの一人の部屋に集っては、お祭り騒ぎを繰り返していた。一本三百円位のぶどう酒とカマンベールチーズを買い込み、夜中過ぎまで、音楽を流し、おもしろおかしくたべるのである。何を話していたのか、何がおかしくてあんなに笑っていたのか、今思い返そうとしてみても、思い出せない。それほど意味のない、他愛ない会話であったのである。

もちろん男どもの間では、「うちのクラスのスペイン人の子、かわいいんだよ」なんて話題が多かった。「男っ

て、これしか言うことないのかね」と思いつつ、私はと言えば、このゆるゆるとした親しげな雰囲気の中につかっ

て、ただ、安心していた。

私たちのドンチャン騒ぎは、個人間の軌轢もあってそう長くは続かなかったが、それでも週末ともなると、いっしょに買い出しに行き、料理をしては、分け合って食べていた。

「日本人は、何てお祭り好きなんだ！」隣のオーストリア人が、あきれ顔で言った。

私たちも、これではいかん、と内心思うのである。トツツァンと二人になった時、彼がポツンと言った。

「これじゃ勉強になんないよな。本を読むには、一人でいる時間がないとダメなんだよ。僕は、夜中から明け方にかけて読む方だから……」

アラブ人、ポルトガル人、アフリカ人、ドイツ人、イギリス人等々、雑多



な国籍を持つ学生が、この学生都市に住んでいた。

男も女もごちゃ混ぜであった。隣人とのつき合いはほとんどない。各自がそれぞれの世界を持っている。群れをなすのは日本人だけではなかった。自己防衛本能から、似た者同士が集まるのは、当然かもしれない。ちがう国籍の若者たちが、肩を組み、満面笑みを湛えている。国際交流キャンペーンの風景は、ほとんどどこにも見当たらなかった。

夏だけをこの町に過ごしに来る外国人は、大半が私のように語学学校に通っていたが、それでも実情は同じである。

朝八時半から夕方までの授業の合間、型通りの会話はあるけれど、授業が終われば各自がバラバラ自分の部屋へ急ぐ。相手と自分の間の見えない壁に阻まれて疲弊し、相手の心にもう一歩踏み込めないもどかしさに傷つき、自分の

巢へ逃げ帰るのである。特に日本人である私にとっては、言葉の浪費としか思えないほどに際限なくしゃべり続けるヨーロッパ人との会話は、しばしば苦痛でさえあった。

あまりにも様々な人種が集まると、言葉は空ろな記号と化してしまう。「御出身は？ お住まいは？ お名前は？」

聞いたとたんに忘れてしまう名前。砂に吸い込まれる水にすぎない会話。

一カ月か二カ月の夏休みの間語学研修を受けに来ただけの外国人どうしが、どうやって心を分かち合えるだろう。そこに生活の基盤を持っているフランス人はなおのこと、向こうから外国人に声をかけてくれたりなどしない。そうなると、各々、より意志の通じやすい同族のそばに、身を寄せてしまう。身を寄せることで、我が心の脆さを守っていたのであろう。

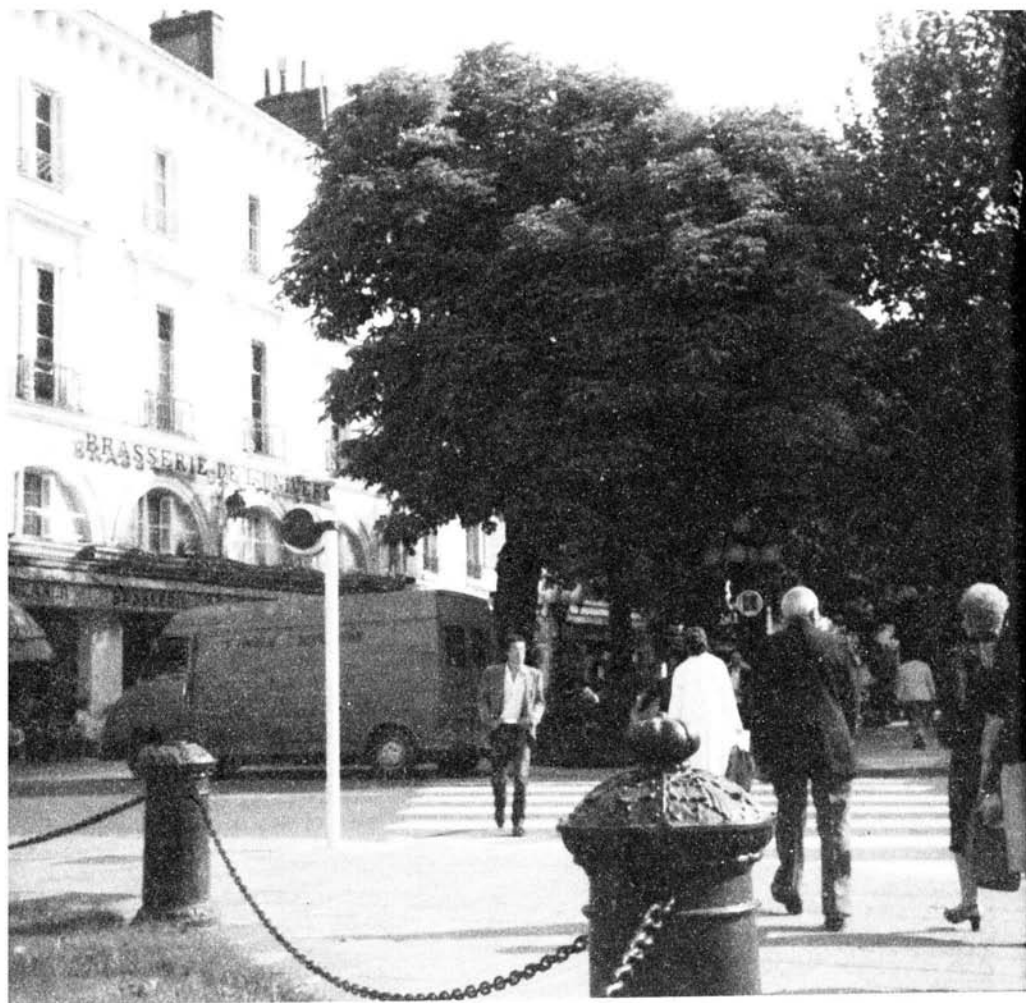
私たちが特別弱かったのだらうか。

しかし、日本での日常生活を振り返っても、似たような風景は、あちこちに見られる。飲み屋で仕事の憂さを晴らす男たち、お茶飲み会と称して集まっては他愛ないおしゃべりに花を咲かせる女たち――異国の地にあつて、私たちのそういった姿は、凹面鏡で、拡大され、歪んでうつされてしまったようである。

留学生の誰もが、かなりの量の手紙を書いていた。コミュニケーションの成り立ちにくい異国の地に生活する者にとって、自分を大切に思ってくれる者と、ペンを通して向かい合うことが、一番大きな安らぎなのかもしれない。外国にいと、書かねばならない手紙の量は、おのずと増えるものだが、自国の親や友人や恋人に手紙を書き送るのが、一日の最大の仕事であつたりした。

留学生が、周りの人々と接触を失い、自分だけの世界に閉じ込めることは、





本当にたやすかった。授業を受け、帰りにスーパーマーケットで言葉も使わず買物をし、夜は学食で二百円の食事を取る——それだけで毎日が過ぎて行くのである。

## 自分自身はどっち

とは言え、一方で私はかなり活動的であった。学校で計画された小旅行には積極的に参加した。親切なフランス人が、家族との夕食に招待してくれれば、臆せず出かけて行った。

私がフランスに来たのは、大学で専攻した語学を完成させるため、というのほもちろんのこと、それと同時に、自分とはちがった価値観を持って生きている人々の生活を、この目でじかに見ることもあった。だから、フランスでの生活に慣れるにつれて、また、日本人どうしの発展のないつき合いからのがれるため、私はやたらに動き回



り、人々にぶつかって行き、会話を試みた。

フランス人のファビエヌ、ドイツ人のハイカー、アメリカ人のディビッド、ナイジェリア人のアイヨ……短期間にしろ、忘れ得ない思い出が、彼らの名前と共に、私の心に刻み込まれている。

ファビエヌ。十九歳の医学生であった。

ある日、私がいつものように学生食堂で昼食をとっていると、隣のテーブルの二人の会話が耳に入った。

抜けるように白い、若々しい肌をしたフランス人らしき女の子を、精悍であると同時にどこことなくさんくさい目つきのアラブ系の男が、言葉巧みにくどいている。あとで分かったのだが、モロッコ人であった。その饒舌を、かわいい八重歯を見せて笑いながらのりくりとかわしていたのが、ファビエヌである。

大きなとんぼめがね、太めの三つ編みに結い上げたブロードの髪、フォークとナイフを繰るきゃしゃな指、くるぶしまで垂れるやわらかい布地のスカート。その、どこことなく妖精的な魅力にこちらが見とれていると、思わず目が合った。相手の男に辟易していた彼女は、いたずらっぽい目を輝かせて、私のテーブルに移って来てしまった。

それから二週間、私は完全に彼女に振り回された。私が殊勝にも部屋で勉強していると、プールに行こうと誘いに来る。夕食が終わると、コーヒを飲みのうちへおいでと、寮から五分の彼女のアパートへ呼んでくれる。それはうれしいのだが、次々と彼女のいとこやら友人やらが登場して、止どまるところを知らないおしゃべりが始まるのである。今思えば、本当にやさしくしてくれた彼女から、なぜ遠ざかってしまったのか、なぜもっと大切にしないかったのか、悔やまれる。

自分の車で、近郊のお城に連れて行ってもくれた。ジャンヌ・ダルクが、シャルル七世を訪ねたことで有名なシノンの街のお祭にも、彼女の友人アンヌと私の友だちと、四人で出かけて行った。それは、夢のような一日だった。車を飛ばして約三十分。シノンの街には中世の音楽が流れ、中世の服に身を包んだ人たちが、石畳の狭い路地から突然現われる。広場では、当時、王侯貴族を喜ばせたにちがいない旅芸人の芝居がかかっている。私たちは、香料のピリツときいたソーセージを、お昼代わりにはおぼりながら、地べたに座ってそれを楽しんだ。

一瞬にして中世を再現し得る、フランスの石造りの街と、その下を悠々と流れるロワール河を、シノン城の廃墟から見下ろして、私はその日、初めてカルチャー・ショックなるものを味わった。

ファビエヌは、私たち日本人二人





を、シノンの大農家の息子ジャンの家に連れて行った。私たちは、明日の予習が心にかかって早く帰りたいのだったが、そんなことには全くおかない。じゃがいも入りオムレツを作り、広大な庭にテーブルと椅子を引っ張り出し、これまた大きな犬たちに囲まれて食事をしたあと、ジャンとファビエヌとアンヌは、ステレオのポリウラムを庭に向けていっぱい上げ、踊り始めた。

周りは、ジャンの父親の農地がどこまでも広がっている。うるさいと文句を言う者などどこにもいない。これが、フランスであった。ワインと饒舌と、豊かで広大な土地。

そのあと、シノンの街に再び繰り出した私たちは、夜中過ぎまで、町の広場の踊りの輪に加わり、一年に一回のお祭りをとことん楽しんだのである。私に初めて、生のフランスを教えてくれたファビエヌ。しかし私は、彼

女の生活のリズムに巻き込まれるのに少々怖気づいて、いつしか彼女から離れて行ってしまった。

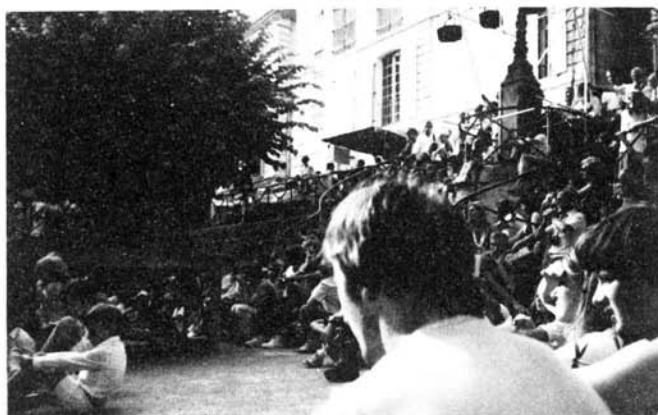
言葉の問題もあったのだが、ぐいぐいと人を自分の生活に引き込むような性格の彼女の前で、私は、私自身になれなかった。私自身が、まだ、開かれていず、自分の「アイデンティティ」を確立していなかったせいだろう。

アイデンティティ——当時何度となく反すうした言葉である。手紙にもよく書いた。

自分自身を見失う怖さ。異質のものの前であっけなく砕け散ってしまう、ちっぽけな私自身への苛立ち。日本人である私。私が日本人であるということ。アイデンティティ——。

こういった自分自身をつかみ切れないもどかしさと焦りのために、私は、いくつかの成就したかもしれない友情を、指の間から取りこぼして行かねば





ならなかった。

## さびしい女と さびしい男が

おもしろおかしく時を過ごすのはたやすい。浮いた話もいくつあった。

さびしい人間どうしがくっつくことは簡単なことではない。

私が寮に到着した時、迎えてくれたのは、トシであった。同じ地区の奨学生との会合で顔見知りになっていた。まだ人を見抜く目を持っていなかった私は、こんなに人当たりのよい人がいっしょなら、あちらの生活にもすぐ慣れるだろうと思っていた。ところがどっこい、これが、私の最初のつまずきとなるのである。

私より一カ月前から寮生活を始めていたトシは、私に何かと親切にしてくれた。どこで買物をしたらいいか、滞在許可証はどうやって取るのか等々、留学の雑事のめんどろを快く見てくれ

た。その時は、やっと日本人に会えた安堵感から、ただただ彼の親切がありがたかった。

しかし、私がこの町で生活を始めて三日目の夜、寮に住む日本人どうしの自己紹介のための集まりの後、彼は私を部屋まで送ってくれた。すぐ帰るのをためらうような態度であったが、今度は私がエレベーターのところまで彼を送って行くと、彼は、突然、私を抱きすくめた。

「もうさびしくないから……」

その時の彼の言葉である。

人の胸に寄りかかるということとは、何と楽なことであろう。今までの緊張感が、一気に解けたかのようであった。この三日間に、今までの苦労話など二人でよくし合っていた。パリのお巡りさんの冷たいあしらい、スーツケースを引っ張って地下鉄を乗り継いだ話、郵便局で戸惑ったこと——誰もが似たような経験をしており、一人で悪戦苦





しかし、彼は私を取りがちがえていた彼の目に、私は単なるかわいい女の子と映ったのだろうし、私自身、知らず知らずのうちに、その役を演じていたのかもしれない。私が自分を語り出すや否や、彼は尻ごみし出した。

「私が意見らしい意見を言うと、君はかしこすぎるよ。インテリだよ。」

フランス語の宿題にちよっかいを出す、

とくる。彼にとって、女とは、かわいければよいだけの存在だったようだ。

しかし、使い捨てコップのように、つかまれたと思つたらもうほっぽり出されていた私は、目を白黒させてしまった。世の中に、こんな男がいるとは思つてもみなかった。

それよりも、私は自分自身に驚いていた。自分が弱くなっている時には、こんなにもたやすく、甘いものにひっかかり得るのである。一体、どうなってしまったのか、私はこんなに弱かったのか。足元がふらついている。自分で自分の重みも支えられないような人間だったのか。

置き去りにされ、傷ついている自分を前にして、私はその受身の立場に、





さらに傷つけられた。この恋愛沙汰のあと、私の孤独感は、さらに一層深まってしまったのである。

朝の目覚めが恐ろしくなった。真ん中が陥没した粗末なベッドの上でポツカリと目を開ける。白い天井、白い壁、そして真っ白な一日が、私の前に広がっている。

「また朝が来てしまった……」

この一日を、たった一人で、見守る人もなく、この私が埋めなければならぬ。今日という、まだ真っ白い一日を、塗りつぶさねばならない。義務も強制もないのだから、一日ベッドの上に寝ころがっていてもいいのである。誰も私を必要としなければ、私も誰も必要でない。

この時ほど、生きるということが恐ろしかったことはない。生きることへの恐怖は、即ち、孤独への恐怖であり、空虚への恐怖であつたろう。十月から

は、別の町に移り、別の生活を始める。しかし今、自分を結びつける何ものをも持たない私は、ただ、怖かった。自分を統御できないことへの恐怖であつたのだろうか。

その頃であつた。チョコレートやビスケットなど、部屋にある食べ物に、一度手をつけ出すと、全部なくなるまで、食べ止められなくなった。一人で部屋にいと、ふと、自分の心臓の鼓動が気になり、胸苦しく、わけのわからない恐怖感に突如襲われることがあつた。

この私が、である。なぜ以外、病氣らしい病氣もしたことがなく、人の二倍も三倍もよく動き回り、毎日充実した（と思われる）学生生活を送って来たこの私が、なんと、こんな状態になり得るのであつた。

この発見は、私にアッパーカットを食らわせた。私の捉えていた私自身の像——その後ろに隠されていた私自身



の脆さに、私は、外国生活を送るまで、気づいていなかったのである。

幸い、そんな状態は長続きしなかった。

「何をしにここまで来たんだか、よく考えてみてよ。孤独を忘れるほどに勉強すればいい。自分の内部をのぞき込むより、今は、周りの人たちを反対に観察するつもりで外へ出て行こう」

周りを見渡せば、みんな一人であった。

韓国人のホンは、結婚式を挙げて五日目に渡仏、一年になる。ここ数カ月、妻からの便りが途絶えてしまっているという。

ドイツ人のハイカーは、私と同級生であった。びっくりしたような大きな目をくりくりさせ、いつでも明るい笑顔を絶やさない女性なのに、

「私もあなたのように、最低一年は、フランスで勉強したかった。でも私には、彼と一年も離れている勇気がない

の。彼との生活を守るために、自分の野心を犠牲にしているんだわ。彼はとてもやさしい人なのだけど……」と、ある日しんみり私に語った。

トシはというと、私をふり捨ててのち、特定の友人以外とのつき合いを極度に嫌い、勉強にも嫌気がさして、部屋に閉じ込もって四六時中、音楽ばかり聞いているようになってしまった。

個人間の対立やせめぎ合いを避け、ニユミュージックの甘い世界に、自分を閉じ込めてしまったのである。これからやっと、フランス社会に一步を踏み出そうという時に――。

「ただ、一度は来てみたかったんだ」という、彼の留学動機の弱さも一因だろう。しかし、その姿はあまりにも惨めだった。

学生食堂の食事に飽きると、よく二、三人集まって自炊をした。一人でやるよりずっと経済的である。そんな時も、トシは、できた物を食べるだけ。一番

食べることに熱心なホンは、皿洗いをしながら、トシの怠惰に対して、ぶつぶつ文句を言っていた。

夜、音楽が聞こえるので部屋をのぞくと、食事も取らずベッドにひっくり返って眠り込んでいるトシの姿。自分のめんどろさえみられない大きな子どもだったのかと情けなくなる。

留学しても、ノイローゼになって帰国する人も少なくないと言う。そういったケースは、決して特別なものではないのだ。私は、トシと自分の姿を通してそのことを知った。しかし、淋しいからと肌を寄せ合ったところで、そこから何ひとつ生まれてきはしないのだ。



# わいふ・投稿規定

書くもヨシ  
書かぬもヨシヨシ

ドンドン書いてノドシドシ送ってノグイグイ載せます！

●定期購読者になればどなたでも投稿できます。誌上匿名は可。ただし原稿には住所氏名を明記すること。（無記名のものは受付けません）

●次のコラムへご投稿をどうぞ！

- うちのワルガキ 子どもとその周辺の話について、どんなことでも。
- オットどっこい 夫について、ノロケ、珍談、不満、ケンカ、何でも。
- ナウい熱年 今どきの若い者へ、一言いいたい方のためのシルバースー・ト。若い方がそれを読んで、文句言いたい場合もどうぞ。
- ファミリー・イン・ブルー 家庭内、親戚づきあいなどのトラブル、よそ

では言えないホンネのはけ口に。

- マン・ウォッチング 家庭で、職場で、PTAで、その他どこでも、あなたの観察したヒト科男属の生態を。
- 職場は多面体 あなたの職場レポート。フルタイムはもとより、パートでも内職でも、切実な体験や悩みなど、ぜひ寄せて下さい。

●親のホンネ 親、ことに母親ほどつらいものはない。子育ての全責任者、何でも母親のせいだと言われ……でもこっちにも言いたいことがありますよ。母親だってニンゲンだ。言いたいこと言おう。

- 男性専科 敵に塩を送る心意気、男

のいいたい放題のページです。

- マスコミむしる 新聞、雑誌、テレビ。ずいぶんどうかと思うこと、腹の立つこと、被害を受けたこと……いろいろなあるんじゃないですか。遠慮ない告発を！ 強いマスコミに弱いミニコミからなぐり込みかけよう。
- マジの発言 まじめは「わいふ」の本領なんですわね。あなたの主張や切実な体験を。
- 対話のページ 本誌の投稿や記事についての感想、反論など。
- 女の道楽 あなたがやってるホビーについて。
- 親たり聴いたり 映画、演劇、音楽



会、展覧会などの感想を。

●生きてます活字人間 読んだものについて。

●遊びましょ こんなところ行ってみた、こんな遊びしてみたなど、楽しかった話を。費用も忘れずにね。

●わいわいガヤガヤ どこにも当てはまらないものを押しこむスペース。

●エッセイスト・クラブ ずいひつものよさをたっぷり味わわせてくれるよい文章を。この欄だけ千六百字まで。

●以上いずれも八百字まで。オーバーしても内容がよければ掲載いたします。締切り偶数月二十五日。

×

●持ちこみ原稿 詩、小説、評論、旅行記、ルポルタージュ、どんなジャンルのものでも。二十枚―三十枚程度。長篇なら連載も可。

掲載分には薄謝を贈呈します。締切日はとくにもうけません。

●短い投稿はハガキでもけっこうです。

友だちとおしゃべりする気分が氣樂に投稿して下さい。

●絵・カット・イラスト・写真などの投稿も歓迎します。作品を送ってみて下さい。

×

●投稿は原則として一応編集部で選択しますが、投稿規定以内の枚数のものについては、ほとんど掲載されます。

●「わいふ」の特色は、完全な言論の自由を守ることにあります。思想信条を問わず、すべての女たちに自分の考えを発表する場を確保することが、「わいふ」の望みです。どうかこの場をフルに利用して下さい。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承下さい。

●「わいふ」からこれまで数人のライターが巣立っています。文章を書くことをしごとにしたいと思っていられっしやる方に、「わいふ」は絶好の

トレーニングの場となります。あなたもぜひ、利用して下さい。

●あなたの周囲に、誌上でご紹介できそうなすばらしい仕事をしている方、特殊な体験をお持ちの方、ユニークな生活をしている方――はありますか？ そういう方をご存じでしたら、ぜひ編集部までご一報下さい。

また自分自身、書きたいテーマをあたためていらっしゃる方は、編集部へ声をかけて下さいませんか。有効なアドバイスをして差上げられると思います。

●編集部・編集長へのたよりで掲載ご希望でないものは必ず「私信」とお書きそえ下さい。

●ご自分の投稿に、イラストや写真が用意できる方は、ぜひそれも合わせお送り下さい。



# 編集だより

●雪の多い冬でした。雪かきに大奮闘なさった方も多いでしょう。今年のように春を待ちかねた年は珍しいですね。

●四月十七日（火）のわいふパーティの場所がきました。

新宿東口の中村屋五階のフロアです。会費四千円。十二時から。

中村屋の電話番号は(03)三五二一六一六一。

わざわざ新潟からのお申込みもあって感激していますが、新しい会員のご参加が少ないので、編集部のメンバーの顔など見物がてら、新しい友人をつくりがてらにぜひご出席下さい。四月十四日までお申込み期間を延ばします。編集部へお電話下さい。

●転居の際は早目に必ずご一報下さい。書籍小包の場合、「転居先」不明で返ってくる、還付料が二百円もかかり、あとから又新しいご住所に送り直すとそれで二百円、要するに一冊の本がお手もとにとどくまでに四百円のお金が多分にかかることになり、泣き面にハチ、なのです。よろしくお願い致します。

●一八六号の三十ページ、昭和五十五年は昭和四十五年のミスプリでした。訂正しておわびいたします。

●昨年五月に出版した「ハイスクール・レポート、84」で、さまざまな私立高校が存在することを知りました。今回からその内容を具体的に深めてみようとして「私立高校あらかると」を企画してみました。取材にも何かと制約が多く、もどかしい思いも味わいますが、少しでも皆さまのお役に立てばと考えています。

●今回は「テーマ投稿募集」の欄が七十三ページにのっています。どうぞお見逃しなく、ではご投稿をお待ちしています。

## 購読申込は

ハガキか電話でどうぞ。

すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上とまりますと送料が半額以下になります。

## 購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

(隔月刊) 187号

1984年5月1日発行

印刷・浩文社印刷

定価 450円

(年間購読料送料共3600円)

編集 発行・わいふ編集部

東京都新宿区加賀町2-4 ☎162

TEL (03) 260-4771

郵便振替 東京5-110430

銀行口座三菱銀行神楽坂支店

普通預金 052-4348909

振込先 (株)グループわいふ



私たちの自立と連帯を探る画期的講座！  
サークルや学習会等のテキストに最適の書！

# 講座 主婦

●木村栄・田中喜美子・武田京子編

各1200円

## 2 壁のなかの主婦たち

●新刊発売

「辛せ」を約束されたはずの結婚生活の行く手に待つものは何か。育児期の閉塞、子離れ期のあせりと、やがて訪れる空しさ。そして三たびのどい……。こんなはずではなかったという岐きの底にある閉ざされた主婦人生を多角的・体験的に描きながら、私たちの生き方を問いなおす。

●おも執筆者

木村栄／半田たつ子／和田好子／佐藤洋子／田中喜美子  
友松悦子／駒野陽子／鈴木恵子／沖藤典子／永畑道子／他

## 1 主婦はつくられる

●好評発売中

生まれおちたその時から、なによりも「女らしさ」を求められ、結婚志向に駆られていく女性たち。家庭・学校・社会などぐらしの現場と絵本・少女マンガ・女性誌・テレビなど各メディアの、女たちをめぐる状況を生々しくとらえ、主婦がどのようにつくられていくかを浮きぼりにする。

③動きだした主婦たち

●10月下旬発売予定

## 父親の自立と子育て

木村 栄

「いたい父親は、家庭の中でどんな役割を果たし、どう子どもにかかわるべきか」を、立場から、男の自立にもとづく新たな子育て像・家庭像を大胆に提起する。

1200円

## 母性をひらく

子どもに歩む自立への道

木村 栄

子育ての視点から、女が働くことの大切さと自立の必要性を切々と説きあかす。自らに苦しみながら生きてきた母性を通して、ひらかれた母性のありようを生きいきと綴る。

1200円

## 主婦からの自立

武田京子

家事・育児、と親の介護など「一家のきりり」と仕事、そして自立のさまざまな葛藤する主婦の現実を見つめ、女も男もともに人間らしく生きられる途をさぐる。

1200円

## アメリカ「豊かさ」とはなにか

田中美智子

異常なまでの犯罪と腐敗、愛の不足と孤独。人間にとって繁栄とは、豊かさとは何かを問うた会心のルポルタージュ。

1200円

世界を駆けめぐる不滅の原爆長編シリーズ

## はだしのゲン

●コミック版(中沢啓治作)

全8巻 各600円

●児童文学版(深沢一夫作)

全3巻 各980円

●絵本版(中沢啓治作・絵) 全1巻 1200円



すてきな生活ワールド JCG



世界中でたった一人しかいない自分…尊い自分自身の幸福のために、価値ある人生を生きたい、チャレンジしてみたいと考えたことがありますか？

今日より明日、本当によくなりたいと願ったことがありますか？そしてその夢をかなえてくれるチャンスがあるとしたら、両手でつかんでみたいと思いませんか？

私も平凡な主婦でした。出会いがあって人生が変わり、感動の中で私でも社長になりました。

やれば誰でもできるんだ。アイ キャン！

最初は不安でしたが、人格形成を含めたすばらしい教育・システムが成功へと導いてくれました。この喜びを分けてさしあげたいのです。

あなたの夢がここに……

(有)アイ キャン

〒102 東京都千代田区九段北1-4-3 渡辺工業ビル3~5F JCG ☎03(265)0161(代表)